

ハンディー版

石見の国読本



島根経済同友会

「石見の国」再生委員会

「石見の国読本ハンディー版」目次

はじめに	1	益田編 (石西地域).....	
石見編 (石見全域)		1節 先史時代.....	49
<先史・古代>		2節 上古.....	49
1節 石見地方の古代	3	3節 古代 (白鳳・飛鳥時代).....	50
2節 広がる生活空間	7	4節 平安時代.....	51
<中世>		5節 鎌倉時代.....	53
1節 荘園と公領	10	6節 吉野朝時代	55
2節 「地方の時代」の到来.....	11	7節 室町時代	56
3節 戦乱の中に生きる	14	8節 後期室町時代.....	60
4節 庶民の文化	17	9節 江戸時代	63
<近世>		10節 現代	66
1節 出雲、石見、隠岐の大名配置	19		
2節 農民の仕事と暮らし	21	大田編 (石東地域)	
3節 新時代への胎動	23	1節 石器時代.....	69
<近・現代>.....	25	2節 弥生時代.....	69
1節 資本主義社会と「裏日本」	26	3節 古墳時代.....	70
2節 地域振興への挑戦	27	4節 奈良時代.....	71
3節 戦争と県民生活	29	5節 平安時代.....	72
4節 新しい島根をめざして	31	6節 鎌倉時代.....	73
		7節 室町時代.....	74
浜田編 (石央地域)		8節 安土桃山時代.....	77
1節 古代石見国府時代における 浜田の発展と柿本人麻呂.....	35	9節 江戸時代	78
2節 徳川幕政時代248年間、 浜田は6万石の城下町として栄えた..	36	10節 近代	84
3節 浜田藩落城から浜田県誕生まで.....	42		
4節 浜田歩兵21連隊あり。 全国に勇名をはせた.....	44	石見3回廊と地域特色の呼称提言	
5節 水産基地として、政治・経済・ 文化の中心地として栄えた.....	45	1節 山村の自立とは何か.....	103
		2節 石見の地域特性を生かす3道.....	104
		3節 地域の特性・特色を打ち出そう.....	105
		おわりに	109

はじめに

「石見の国読本」は、地域活性化のためにはまず地域を知ることから始めよう、と平成21年(2009年)から発刊をスタートさせたものです。石見地域、石央、石西、石東それぞれの歴史を概観し、地域の成り立ちを理解していただくと同時に、観光客の皆さんのガイドブックとしてまとめました。

制作にあたっては、島根大学の内藤正中先生が編集に携われた「図説 島根県の歴史」(河出書房新社)など優れた著作から許可をいただき、要約、編集させていただきました。ここに改めてお礼申し上げます。

島根県の西部を占める石見地域は今日では人口減、高齢化、少子化と経済基盤の脆弱性から地域活性化の面では苦戦を強いられていますが、7世紀の律令時代には「石見の国」として存在し、古代山陰道で畿内と結ばれていました。近世山陰道には京から36の宿場があり、文化の黎明期から明治維新に至るまでは日本海通商の舞台となり、活発な経済活動や人的交流が行われていました。これらを背景にした独自の石見文化も花開きました。

私たちは石見地域と歴史と伝統を知ること、これからの地域づくりのヒントを見出さなくてはなりません。見出したヒントから将来を見据えた知恵を働かせ、生き生きとした住みよい地域を形成するためのアイデアを生み出す役割があります。

本書籍は、これまで発行してきた4部の「石見の国読本」と、平成20年(2008年)10月に発表した「石見3回廊と地域特色の呼称提言」のエッセンスをハンディー版としてまとめたものです。現代の山陰道とも言うべき「山陰自動車道」の島根県内の区間は福光—江津間の事業化の目途が立ち、今後10年ほどで計画区間が全線開通する見通しとなりました。島根経済同友会、石央支部、石見の国再生委員会がおよそ半生記にわたって活動の指針としてきたルートが古代から現代へ、1400年の時を超えて繋がろうとしています。

本書籍はこうした節目に発刊を企画しました。石見の歴史を知り、今後の方向性を考える参考資料としてお役立ていただければ幸いです。

平成28年(2016年)4月

島根経済同友会石見の国再生委員会
委員長 宮田 弘

ハンディー版

石見の国読本



島根経済同友会
「石見の国」再生委員会

石見の国読本

石見の歴史と伝統を学ぶ

<先史・古代>

海幸・山幸を求めて

石見地方の古代【付図―1, 2】

島根県の歴史の曙は、今から数万年前の旧石器時代にさかのぼるようだ。島根県内では、邑智郡石見町（現在の邑南町）のドンデ、美濃郡匹見町（現在の益田市）澄川でこの時代の遺物といわれる石槍が発見されている。石器時代には、程よい石塊や石片を打ち欠いて作った打製石器を主な用具として、狩りと植物採集の生活が営まれていたとみられており、石槍の採集は旧石器人のいたことが予想される資料として貴重なものである。

旧石器時代の遺物が見つかった邑智郡瑞穂町（現在の邑南町）横道遺跡と、美濃郡匹見町新槇原遺跡を取り上げてその詳細を見てみよう。横道遺跡は出羽川の溪流に沿った丘の上であり、縄文時代でも古い早期・前期の土器や打製石器や、ほかに石器を作るときに出る石屑などが出ている。

新槇原遺跡は中国山地の最高部近く、匹見川と赤谷川が合流する個所際の丘の上であり、出土遺物は縄文土器の破片と石器などであるが、出土した地層の下部には安山岩の石屑が見つかり、中国山地の北斜面でも二万数千年の昔に旧石器人たちが活動を繰り広げていたことはほぼ疑いなさそうである。

●山の幸を求めて

匹見町荒木の水田ノ上遺跡で見ると、発掘された部分では丸みのある川原石が足の踏み場もないほど露出している。石と石の間には縄文土器（およそ3500年前）の破片が見られる。さらに注意して見ると、石が密集している個所とばらばらの空間に分かれることに気づく。密集部分の形は円か四角で、中心部分に石を配した遺構が帯状に並び、その帯が70mの大きなサークルになっている。「環状列石」という用語があるが、それに近く、ドーナツ状の石畳のベルトとも言える構造物である。掘り出された遺物には多量の打製石斧があり、そのほか女性を象った土偶（粘土製の人形）、円形の土盤、ネックレスの玉なども出ている。

発掘、調査者は、一種の「斎場」ではないかとも言っている。このような大規模な「環状列石」もしくはドーナツ状「斎場」があるということは、それに相応した「むら」があったことを意味している。

では、どうして山間の小盆地に規模の大きい縄文集団がかなりの長期間住み着くことになったのだろうか。中国山地の東西に長く延びる断層は、旧石器時代以来「山手の道」として人々の往来に役立っていた。また、南北の川の流れは陰陽を結ぶ交通路であったとも考えられている。匹見盆地は、そのような古道が交差する交通の要衝であったといえるだろう。

また、掘り出された遺物の中に石錘が少なからずある。これが漁網の錘であることは確かで、恐らく東、西、南の三方向から流れ出す合流場所に魚が豊富に生息していた可能性は高い。こうしてみると匹見盆地は、採集経済の生業には極めて恵まれた条件を備えていたことが判明する。

●沿海と山間の「イネの道」

稲作農業の故郷中国から広がったイネ作りが山陰に波及したのは、2200～2300年前のことであった。石見地方での稲作遺跡を挙げてみると、益田市安富遺跡、浜田市鰐石遺跡、江津市波子遺跡、仁摩町坂灘遺跡、大田市土江遺跡などがある。これらを見ると海岸沿いに並ぶ沖積平野とに点在していたようにみられる。

しかし、日本海沿岸を東に進んだ稲作文化の流れとは別に「山の道」とでもいえる伝播ルートもある。六日市町九郎原遺跡、匹見町半田遺跡群、金城町七渡瀬遺跡群、石見町余勢原遺跡、邑智町沖丈

遺跡などで、早くから原始農村が誕生していたことが判明してきた。

旧石器、縄文時代から開通していた山間の東西ルートは、稲作文化の東方伝播路としても大いに役立ったといえる。こうして米づくりという新産業は、県内のほぼ全域に急速に広がり、定着し、各地に活気ある農村が出来上がったのである。

●古墳の出土品と古墳の復元

益田市乙吉町の丘の上に小丸山古墳と呼ばれる大規模な前方後円墳があった。「あった」という過去形の表現をしたのは、この古墳も旧の姿をほとんど留めないほどに破壊されていて、昭和62年から古墳を現地に復元し、石見地域の古代史を探る手掛かりにと一般に公開されたものである。この古墳から発見された銅鏡、馬具の類は、被葬者は5世紀後半から6世紀前半の激動期を生きた地方の小国の首長であり、武将の一人であったと想像される。

益田市ではこの小丸山古墳のほかに大元一号墳と、円墳のすくも塚古墳があり、これらの3古墳が平野部の統合を成し遂げた統治者の墓地であるとみなされている。

浜田市西部の周布川下流域には周布古墳があり、ここに埋葬された首長は周布平野を治めた最高首長であったと思われる。この周布古墳は別名「おんぐろ」古墳とも呼ばれ、近くにこれとペアの呼び名を持つ「めんぐろ」古墳があった。石室の構造に九州の肥後地方のものと共通する点があり、注目される。

●農・漁業と手工業の発展

5世紀中ごろから農業と手工業の発達、大陸との頻繁な交渉でもたらされた新農法や技術が社会全体の仕組みを大きく揺さぶり始め、6世紀に入ると平野をはじめ山間、海浜に多数の村落が出現した。今日の農漁村のスタートは、ほとんどこの時代に始まったといえる。

大田市鳥井南遺跡群は、砂浜海岸の背後の丘陵に残された。後期の大规模集落跡である。その一つ壱貫田遺跡では、西向きの緩い斜面を階段状に整地し、そこに総数30棟以上の住居が建てられていた。瑞穂町の今佐屋山1号遺跡では、6世紀後半のたたら製鉄跡と、ここで鉄づくりに励んだ労働者の作業小屋兼宿泊所とみられる竪穴住居3棟が発見された。

浜田市日脚町、益田市西平原町でも須恵器窯跡が発見されている。そこで働く職人もまた日常的には、農業に従事しながら群集墳の流行などで高まった需要に応じて土器づくりに励んでいたことが分かる。

●古墳から寺院へ

建物の跡などは未発見だが、石見国府の確かな所在地とみられる浜田市東部の上・下府町の狭い平野を流れる下府川右岸の高手に1個の礎石が据えられている。国指定史跡の下府廃寺跡である。しっかりした土台の上には五重塔が建っていたと推定されている、また、塔の西側には金堂と考えられる建物群が見つかっている。出土した瓦の様式と須恵器の型式により建立年代は白鳳時代から奈良時代初期のころで、以後、平安時代中ごろまで存続していたらしいことが分かる。建立者はまったく分からないが、近くに比較的大きな横穴石室を持つ片山方墳がある。7世紀半ばの築造と考えられていて、この古墳の被葬者の子孫によって寺が建てられていたものと考えられている。

国分寺、国分尼寺が建立される前後の石見地域には、石東地区の大田市天王平廃寺、石央山間地の旭町重富廃寺が建てられていたようであり、石西地区の益田市にも同時期の寺院が存在した可能性がある。下府廃寺創建のころから石見のあちこちで土豪勢力が仏教文化に地域支配の精神的支柱を求め、造寺、造仏活動を熱心に進めていたことが知れよう。彼らが律令制度の下で中央政府の地方統治を支えていったのではなかろうか。

広がる生活空間

●都からの道、都への道【付図—3】

中央集権的な国家体制としての律令制の成立は、中央と地方をつなぐ新しい回路を開き、従来にはなかった新しい文物の流れを生み出すことになった。律令政府は全国を畿内と東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の7道、その内部を「国」「郡」「里（のちに郷）」に区分して統治する体制を敷いたのに対応して、都と各国を結ぶ道路の整備に努めた。

出雲、石見、隠岐は丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆とともに山陰道に属し、都から丹波、伯耆を経て出雲、石見、隠岐の各国府に至る道（駅路）もまた山陰道と呼ばれた。山陰道の各国は、新たに敷設された平均10m前後の道幅を持つ駅路によって結ばれ、各国府の間には原則として30里（約16km）ごとに駅家が設けられた。石見の国の駅家は東から波瀬？、託農、樟地、江東、江西、伊甘の6駅で、それぞれ5匹の馬が常備され、朝廷の発行する駅鈴を携えた官人の公務出張や公文書伝送の際の休憩、宿泊などに使用された。

これら駅制とは別に各国府と郡家とを結ぶ伝馬制も敷かれ、郡家ごとに5匹の馬が常備され、国司の赴任や国内巡行などの際に用いられた。こうして都と各国府と郡、郷が幹線道路によって結び合わされ、一つの均質な社会に向かって歩みだした。

都との往来は公文書を携えた官人の下向と国府で作成された公文書、帳簿類を携えた朝集使の派遣のほか、平安時代になっては石見の紬などが特産として運ばれていった。

●日本列島の表玄関日本海

日本海に向かって開かれた山陰地域は古来、朝鮮半島や北九州、北陸地域などと親密で多様な交渉を持ち、大陸からの進んだ文化を受け入れる表玄関として絶えず重要な役割を果たしてきた。「出雲国風土記」に採録された説話の中には、神話という形を取りながら原始社会以来の豊かな交流の痕跡が多数刻み込まれている。冒頭部分の「国引き神話」はその代表的なもののひとつである。これらの説話や伝承を裏付ける事実や遺跡、遺物も多数確認されている。

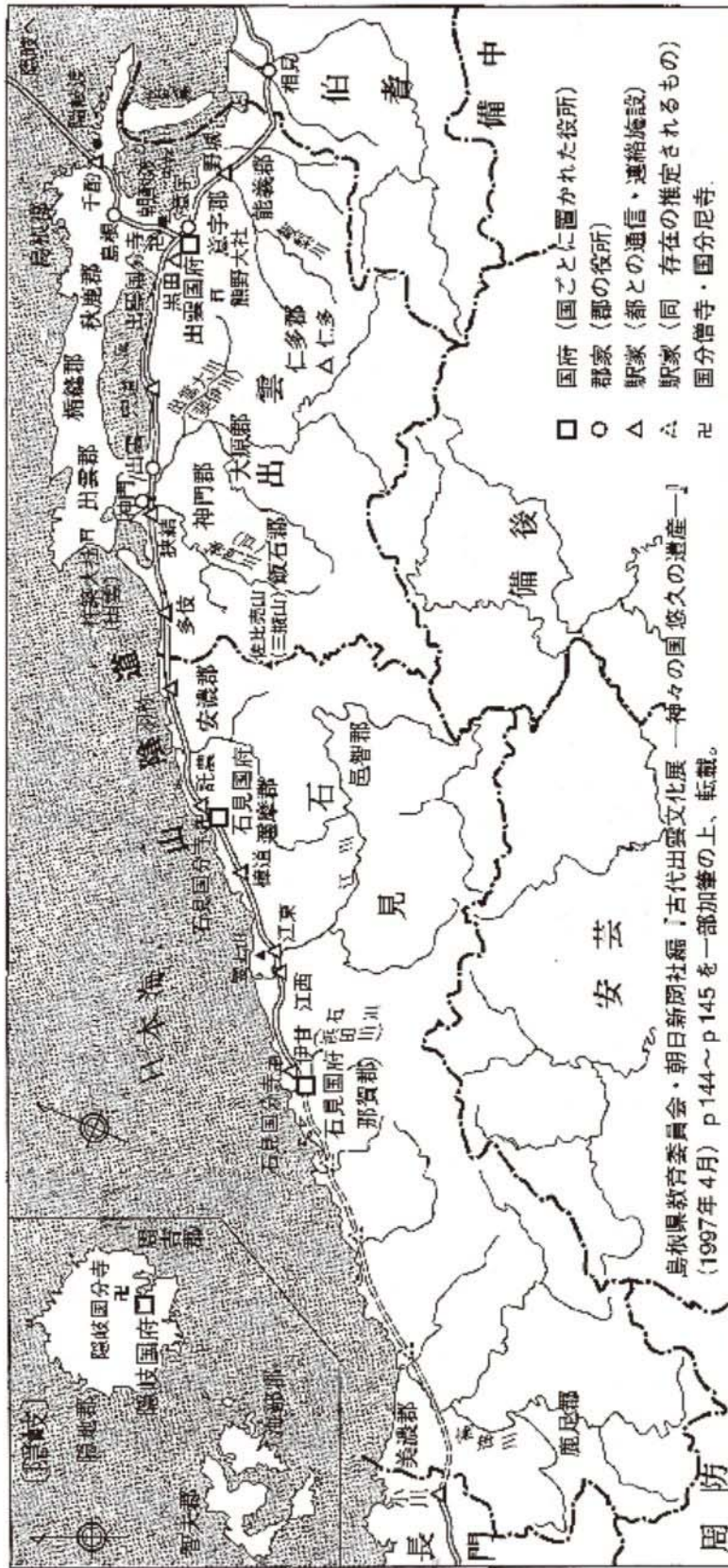
その後、中央集権的な律令国家の成立と展開に伴って山陰地方の対朝鮮関係は大きく様変わりした。8世紀末から9世紀にかけて山陰海岸に漂着する朝鮮人の記録が「六国史」などに集中的に表れるようになるが、朝鮮半島との交渉における非公式な窓口へと大きく地位を後退させたことを示している。一方、律令政府は山陰道諸国に対し日本海経由の物資輸送を認めず、これもまた非公式で私的なものとみなされるようになった。しかし、だからといって日本海を媒介とする交流がなくなった訳でもなく、日常的な民間レベルの交流としてその後も発展していった。

●律令地方政治の変容

律令制がもたらした最も深刻な影響の一つは、地域民衆が全国一律の基準に基づいた生活と身分保証を得る一方で、実際には従来にも増して過酷な収奪にさらされることによって伝統的な地域社会の構造や地方政治の在り方に強権的な変容を迫ったことである。こうした矛盾は何よりもまず伝統的な豪族層の支配基盤を切り崩し、国司、国衙への権力の集中をもたらすことになった。8世紀から9世紀を通じて進んだ伝統的な郡司層の没落と新興郡司層の登場がこれを示している。

一方、これらと並行して国司組織の内部にも変化が現れた。国司の長官である「守」に権力が集中し、

(付図-3)



古代の駅家・郡家・都と列島の各地域(国)を結ぶ官道には30里(約16km)ごとに駅家が、また各国では国府と郡家とを結ぶ道がそれぞれ新たに設けられ、この幹線道路と施設を通じて都と地方は一つに結び合わされた。

一括して雑任国司と称される「介」以下の国司は「守」への従属性を強めた。9世紀末の元慶8年(884)、石見国では郡司、百姓らが国守を襲撃するという事件が起こったが、それは律令制の過酷な収奪がもたらす農村の疲弊に加えて、国守と雑任国守及び、国守と郡司層との矛盾、対抗関係がからんで引き起こされたものであった。

この時期、山陰地方でも新しい支配体制が整えられ、国守の指揮、監督の下に税所、田所、調所、建児所、船所などに属して地方行政を推進した。雑任国司や郡司層は一括して在庁官人と呼ばれ、やがて国守が都から下らず、代官を派遣して地方行政を進めるようになると、彼らは主導権を握って独自の動きを示すようになった。11世紀中ごろはそうした体制の転換期にあっており、11世紀末の院政期にかけて日本社会はなし崩し的に古代から中世へと変貌を遂げていった。

10世紀から11世紀の時期の地方政治は以上述べたほかにも本来の律令政治とは異なる特徴を持っていた。

一つは新しい「公民」の成立である。かつては戸籍を策定してすべての民衆を公民として把握し、おのおのから徴税を行うのが原則とされたが、戸籍の作成と班田制が放棄されたのに伴い国家に対して税の納入を請け負う有力な農民だけが新しい「公民」として把握され、多数の弱小農民は国家支配の対象から除外されて、有力農民などその他の私的な従属関係の中で生きていかなければならなくなった。

二つには同じく班田制の解体に伴って旧口分田などの耕作が有力農民に請け負わされることになったことである。当時、これを「請作」を称し、これを請け負う農民を「負名」、請け負った耕地群を「名」と呼んだ。先に述べた公民とはこの「負名」のことだったのである。

こうした新しい支配体制が間違いなく山陰地方でも実施されていたことは、大田市水上町の白坏遺跡から出土した木簡の銘文によって確認することができる。ここでは「尚生名」と記した木簡が発見されている。「尚生名」という名前の負名と推定されるからである。

この時代はまた私的で多様な回路による都市と農村、中央と地方との交流が活発に展開された。そこには律令制の時代とは異なる新しい生活空間が大きな広がりを見せ、時代の大きな転換が示唆されていた。

中世荘園の世界

1節：荘園と公領

中世は一般に荘園制の時代、あるいは荘園・公領制の時代と呼ばれる。それは荘園や公領（国衙）、山野、河海、村落などを含んだ一定の地域的まとまりを持つ地域が、人々の日常的な生活空間を構成し、かつ中世社会に基本的な構成単位をなしたからである。

荘園と国衙領との違いは、荘園が天皇家、摂関家、将軍家、有力寺社など直接国政に関与し得る立場にある中央の権門勢家の所領に属し、中央国家権力の承認を得ることによって基本的には各国衙支配の外にあるのに対し、国衙領は、各国司の直接的な管理、統制下に置かれているところであった。しかし、国衙領もまた領有する主体（領主）がいて、土地と農民に対する一円領域的な私的支配を行っている点で本質的に荘園と異なるところはなかった。

島根県内で最も早く史料上で確認できる中世的所領は、出雲国の遙堪郷（現出雲市大社町地域）と、石見国の久利郷（現大田市久利町地域）で、ともに11世紀中ごろに姿を見せる国衙領である。

久利郷は久利別符とも称し、石見国府の在庁官人清原氏が国衙の承認の下に邇摩郡佐波郷の一部を開発し、その領有を認められたものである。久利郷の事例からも国衙領はその多くが在庁官人やこれに連なる者たちによって占められる傾向にあった。「在国司」とも呼ばれ、在庁官人の筆頭として大きな勢力を誇った出雲の勝部（朝山）氏や、石見の藤原（御神本・益田）氏などはその代表的な例である。

石見藤原氏一族の場合は、史料に若干の不安はあるものの美濃郡益田荘益田本郷を中心に、同郡10（鹿足郡域にまたがる所領を含む）、那賀郡11、邑智郡4、邇摩郡2、安濃郡1か所の所領があったとされていて、石見6郡全域に広がる膨大な数と量に達した。このうち、秋鹿郡佐陀荘や美濃郡益田荘などはいずれも朝山、益田両氏が、それぞれ自己の保有する所領を安楽寿院や摂関家に寄進することにより、改めて荘園として立件されたものと推定される。

●武士の登場

中世はまた武士の時代、武者の世とも呼ばれる。それは支配層の一角に新しく武士身分の者が登場したこと、またこれらの武士を編成した新しい権力（幕府）が登場し、国家権力の重要な一角を担ったこと、さらにこうした状況の中で中世を通じて戦乱と合戦が絶えなかったことなどによる。

島根地域で軍事集団の存在をある程度具体的な形で確認できる比較的早い事例は、嘉承2年（1107）の源義親の乱に際してのことである。官物押領などの罪で隠岐に流された源義家の二男義親が、隠岐から出雲に逃れ公私の財物を奪い、目代を殺したので中央政府は因幡守の平正盛に義親追討の命令を下したことを記している。『大山寺縁起絵巻』に多数の騎馬武者が描かれており、各地に武士集団が生まれていたのを知ることができる。

鎌倉幕府の草創期から幕府と緊密な関係を持っていた石見国では、早くから幕府の御家人となって地頭に任じられている者が多かった。石見国については荘園の少なさからも推測されるように出雲以上に在地領主の武士的支配が貫徹していたと考えてよいだろう。しかし、農民の求める方向が百姓として自立と自由の確保、拡大という在地領主とは全く相反するものであり、現実の歴史過程もまた基本的に農民の求める方向に沿って進んだことから、両者の対立は一層深刻なものとならざるを得

なかった。日本の中世社会が、兵農分離と領主層の城下町への集住という在地領主のあり方を根底から否定する、きわめて特異な形で終わりを告げたところに中世武士の抱えた逃れようのない矛盾の深刻さがよく示されている。鎌倉末一南北朝期以後に本格化し、戦国期に至って頂点に達する戦乱の日常化は、こうした矛盾の一つの現われでもあった。

2節：「地方の時代」の到来

この時代の人々の最も一般的な日常生活の場は、荘園・公領制によって編成された村落にあった。各荘園・公領は1ないし数個の村落を含むのが一般的であるが、石見国の大家荘や益田荘、長野荘などのように広大な領域を抱える荘園は、さらに内部が幾つかの郷に分かれ、村落は郷単位に1ないし数個存在した。

名主は村落の中、上層農民で構成され、彼ら自身が名田の耕作に当たるとともに名田の一部は下層農民によっても耕作された。名主は名田全体をまとめ、各名田単位に年貢、公事を納入した。中世の荘園村落は、大きく分けると名主層とその下層にある作人層の2つの階層から成り立っており、後者は一般に小百姓、散田作人層などと呼ばれた。

下層の名主層や小百姓層は、上層の有力名主層に対して従属的な立場にあり、多くは小作関係も結んでいたと考えられる。しかし、それは人格的な支配・隷属関係とは異なって、いわば散りがかり的で階層制的な関係であったと考えるべきである。私的・人格的な隷属関係の下にある下人・所従は、これとは別に地頭・荘官の給田や正佃の耕作などに従事しており、村落の構成員ではなかった。

●石見国久利郷の復元

石見国の久利郷（現大田市久利町）は、南北朝および戦国時代の村落の景観や構造が比較的良好に分かる事例として知られている。銀山川とその流域に広がる久利郷は、市原村、赤波村、角折村、鬼村などいくつかの村落を含んでいたが、応安元年（1368）作成の『久利惣領田畠目録案』と、永正13年（1516）の『久利郷市原村半分所務帳写』以下の一連の文書が残されていて、中世村落の実態をある程度具体的に復元することが可能である。

応安元年の目録案とこれに基づいて作成された景観復元図によって南北朝時代の様子を見ると、おおよそ次のような特徴を指摘することができる。

1. 久利郷の田地は定田と除田（仏神田・給田など）からなり、さらに、定田は名田と名田に結ばれない散田とから構成されている。名田は5反120歩と3反の2種類の規模を基本とし、それぞれ持田荘でいう「本名」と「浮名」、あるいは南北朝期の益田荘本郷で確認できる「本百姓名」と「間人名」に対応するものであったと考えられる。散田のみを耕作する小百姓層が成長を遂げ、その一部が新しく名主として組み込まれつつあった様子を物語るものと考えられる。

2. 年貢は1反当たり約500文の銭納で、先の2種類の名田には名単位に種々の名目の公事銭及び佃豆、胡麻、麻の実、さし縄などの現物の雑公事が賦課された。

3. 各名主は税のかからない屋敷地と若干の門田とを与えられて、丘陵上もしくは丘陵の傾斜面に散居し、溜池用水の統制などを通じて下層の散田作人＝小百姓層を従属させていたと推測される。

4. この地の領主（久利氏惣領家）は、銀山川左岸に位置する段丘上の所領全体が見渡せる交通の要所に拠点を構え、背後に山城を築く一方、居館の周辺に矢剥（戦闘用の矢を作る工房・職人）、鍛冶屋、櫛屋、紺屋（衣料生産に携わる職人）、あるいは酒、瓶、漆、茶の職人など、地域支配を進めていくうえで必要とされる軍需品や、その他の手工業生産のための多種多様な工房、職人を配

置していた。

ここに示された南北朝期の久利郷は、その基本構造において鎌倉期の持田荘と共通する側面を持つと同時に、持田荘以上に在地領主の支配が強力に及ぶ一方、年貢の銭納化や小農民層の自立化が進むなど、鎌倉期とは異なる様相を示している。永正13年の一連の文書が物語るのはそうした変化の側面の一つの到達点を示すものである。

最も注目されるのは、本年貢とは別に全ての耕地に反別250文の段銭が賦課されていて生産力の向上にともなう税負担の強化がみられる一方、領主側の作成する帳簿から「惣村」と寺社の買得した田畑が除外されていて、中世の村落が領主権力から自立した惣有地を持ち、惣村として村落の自立性を大きく高めていることである。

惣村は、畿内とその周辺では鎌倉末期から現われ始めるとされている。かつては村落構成員から排除されていた小百姓層が新しく加わることによって、飛躍的に領主権力への抵抗力と自立・自治性を高めていった。

島根地域においても、若干時期はズれるものの、南北朝から室町、戦国期にかけて次第に農民の自立と自治が高まりをみせ、中世から近世への歴史の大きな転換を可能にする重要な歴史的前提条件となった。こうした中世民衆と中世村落の自立と自治獲得、拡大のための飽くことなき努力の積み重ねが、内部にさまざまな問題を抱きながらも中世が「地方の時代」と呼ばれる最大の要因を構成していたのである。

●中世の市場と都市（付図－2）

中世社会の基幹産業は農業を中心としたことはいまでもない。しかし、このことが領主や農民が閉鎖的で自給自足の生活をしてきたこと、あるいは諸産業が著しく低調であったことを直ちに意味するものではない。逆に中世社会は最初から都市的要素を本質的な部分として内部に含み、また、商手工業生産や商品流通を不可欠の前提として成り立っていたのであって、特に島根、山陰地域では、こうした観点から中世をとらえる視点が大きく立ち遅れていることをあらかじめ承知しておかなければならない。

中世都市として確認できる第3の類型といわれるものに交通の要衝に位置する商業都市がある。その多くは日本海沿岸部の港湾都市として現われる。これは日本海水運の発展とも関わっており、中世の島根地域の交通体系が日本海水運を結節点として成立していたことによる。

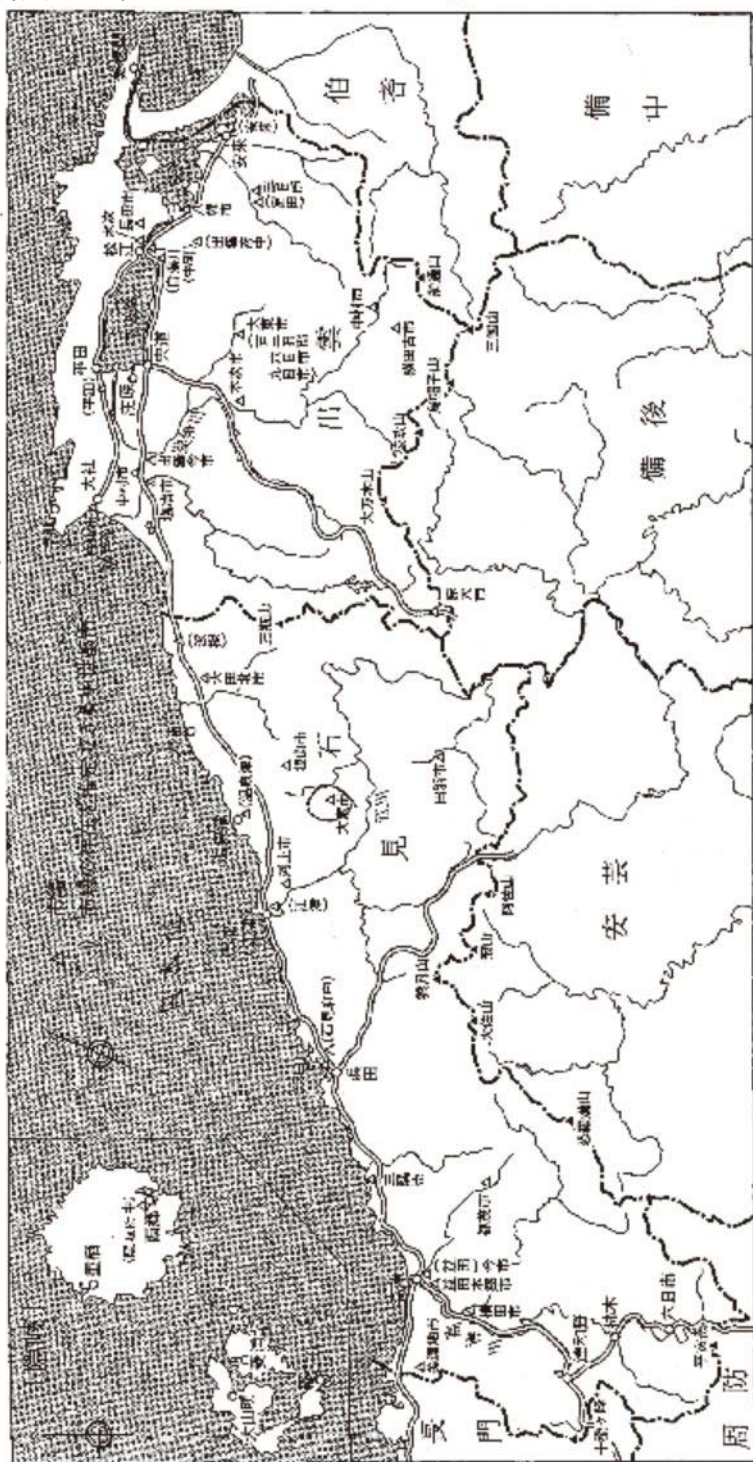
石見地域では東から大田、温泉津、江津、浜田、益田などを挙げることができ、実際にはもっと多数に上ったことが推測される。これらの都市は、水陸の交通の要衝に位置しているところに特徴があり、津や市場を中心に多数の商人および手工業者が軒を連ね、多数の寺社なども建立されて、独自の都市的な場を作っていたと考えられる。ただし、全てが港湾都市だったわけではなく、内陸部にも存在を確認することができる。その一例が石見国大家東本郷に位置した中世都市大家である。

ここは、邑智郡河本、邇摩郡温泉津、那賀郡江津などとの交通の要衝に当たり、四日市を中心に石見八幡宮ほか多数の寺社が密集することによって周辺諸地域とは様相を異にする地域の中核として都市的な場を形成していた。類するものとしては、木次、横田などを挙げることができよう。また、内陸部にある都市という点では、戦国期に大きな賑わいを見せた「石見銀山町」なども、見落としてはならない。

もう一つの類型として戦国期の城下町を挙げるができる。石見地方では、浜田市周布町の周布氏の城下町、同市三隅町の三隅氏の城下町、益田市の七尾町から本町地域にかけての益田氏の

城下町など、いずれも同様の事例と考えることができよう。これらの都市では、人々は生鮮食料品や農間副業で得たさまざまな物質を相互に持ち寄り、また、全国各地を渡り歩く遍歴の商人や都市の商手工業者などが持ち込んだ品物などと交換するなどして、生活に必要な諸物資の調達を行ったものと考えられる。

(付図—4)



中世の市場 史料で確認できる、出雲・石見・隠岐3国の中世市場の分布を示したもの。全体に日本海沿岸部に集中して分布する傾向が指摘できるが、実際はこれよりはるかに多数の市場が存在していたと考えなければならぬ。

●中世の日本海——山陰地域の水運と日朝交流（付図— 5）

山陰道による陸路交通を交通政策の基本とする律令国家の解体に伴って、中世には日本海水運を基幹的交通手段とする新しい交通体系が成立した。これは、主要には山陰地方に分布する各地の荘園から直接、荘園年貢などを荘園領主の住む京都まで運ぶ必要から生まれたもので、水運全体を円滑に運営するための機関として出雲国美保郷美保崎に新しく海関が設けられ、現在の「美保関」が成立した。

山陰の水運の成立は、原始、古代以来続く民間レベルで行われていた多様な交流の伝統に支えられたものであった。そして、山陰地域間及び朝鮮半島を含む日本海沿岸所地域相互の活発な交流を促し、本格的な「日本海時代」の扉を開くことになった。地域水運の成立と発展は、日本海沿岸部の各地に多数の「津」や「湊」を成立させ、また、近辺に市場なども発達して、それぞれの地域における流通と経済活動の中心地へと成長を遂げていった。石見地方では、仁万津、温泉津、福光湊、江津、桜井津、都野津、須津・三隅湊、岡見港、土田港、中津、高津などが確認でき、さらに波根、刺鹿、長浜、浜田なども中国、朝鮮の史料で確認できる。

中世において朝鮮との交流が確認できる最初は貞治 5 年 (1366) であり、その後、両国の交流を史料的に確認できるのは、応永 15 年 (1408)、暴風のため通信副使李芸が石見に、同じく応永 32 年 (1425) に張乙夫らが石見長浜に、それぞれ漂着したとするものである。

このうち、張乙夫らを救助し対馬経由で本国に送還した周布氏は翌年、朝鮮国王から李芸らが謝礼のため石見に派遣されたのを機に、恒常的な通交を求めて承認され、さらに文安 4 年 (1447) には、山陰地方で唯一公式の通交証を与えられて 16 世紀初頭までの約 1 世紀の間、朝鮮との安定した交易を行った。この間、朝鮮側の記録に残るだけでも 40 回以上、周布氏は朝鮮と交易を行っている。このほか応仁、文明期 (1467 ~ 87) に集中的に使者を派遣して交易を行った松田氏、益田氏、三隅氏以下の国人領主を確認することができる。

しかし、こうした日朝交流も 16 世紀の前半には大きな転換を遂げ終息を迎える。16 世紀の 20 ~ 30 年代、朝鮮から伝えられた新しい鉱山技術（灰吹法）によって石見銀山における銀の生産が飛躍的に拡大し、従来の日朝関係に代わって中国を中心とする貿易構造が成立し、さらに 16 世紀の 40 年代には、スペインなどのヨーロッパ諸国も加わって、山陰地方はこれまでの日朝関係の枠を越えて新しい東アジア世界のなかに組み込まれていった。

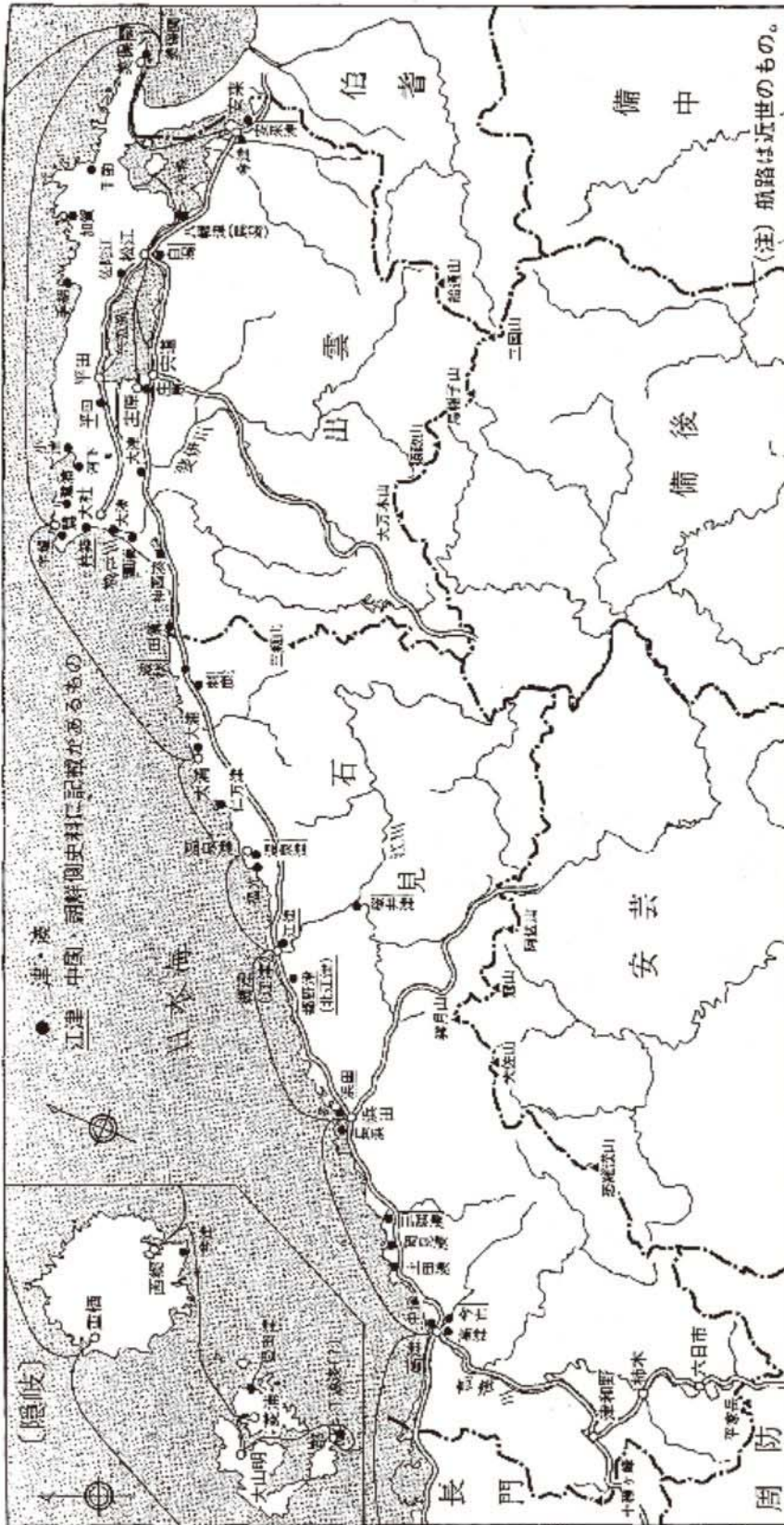
国内的には戦国の争乱の激化に伴って出雲、石見の鉄や銅などの鉱山物資に対する需要が急増し、北陸、東北や九州などから隔地間交易が本格的に展開するようになり、山陰の水運構造そのものが大きな転換期を迎えた。

こうした状況の中で日本海沿岸部の各地に多数の港湾都市が成立し、発展を遂げることとなった。時代はまさに、大きく動こうとしていたのである。

3 節：戦乱の中に生きる

山陰の戦国史、とりわけ出雲国の戦国史は、尼子氏の興亡を基軸として進展したとあってよい。近江国犬上郡に由来する尼子家は、応仁の乱が勃発して守護京極持清が領国出雲をみる余裕がなくなると、尼子清貞が出雲の有力国人との戦闘を開始し、続いて伯耆国に進出し山名軍と戦い、能義郡利弘荘・飯石郡多久和郷などの所領や、美保関などの代官職などの所職を獲得し、能義郡広瀬の「富田城」を拠点に自己の権力基盤を拡大した。清貞の跡を継いだ経久は、いったんは守護代職を剥奪

(付図-5)



津・瀨戸 史料によって確認される中世の港(津・瀨)。これらは、とくに大規模なものばかりで、実際にはこれに数倍する港が存在していたと考えなければならぬ。このうち、傍線を付したのは中国・朝鮮側の史料に見える港を、航路は近世の日本海航路を示す。

され富田城から追放されたが、2年後には再び奪還し再登場した。さらに、出雲国内の国人層に対する制圧戦を加速させ、永正5年(1519)には杵築大社の遷宮を実現して、出雲守護としての地位を確保し、短期間に陰陽11州の太守と称せられるまでに成長した。まさしく一代の英傑といえよう。

●雲芸攻防戦と尼子晴久

経久の引退後、尼子氏の家督を継いだのが晴久で、天文6年(1535)には大内氏に奪われていた石見銀山を回復、翌年には播磨守護を淡路へ追い落とし、天文9年(1540)には安芸遠征を行い、大内氏に転じた毛利元就を高田郡吉田の郡山城に攻囲した。5か月にわたる包囲戦は大内氏の来援によって尼子方の大敗に終わった。勢いに乗った大内義隆は出雲侵攻を開始し、天文12年(1543)には京羅木山に本陣をおいて富田城に迫ったが、尼子氏の守備は固く大内方が総崩れとなって敗北した。

尼子晴久は天文21年(1552)に出雲、隠岐、因幡、伯耆、美作、備前、備中、備後8か国の守護に補せられた。さらに幕府の相伴衆にも任ぜられ、これによって尼子氏は昔日の威勢を回復し、中国地方の覇者となるかにみえたが、大内陣営には毛利元就という恐るべき敵が成長していた。

毛利元就の攻勢は、まず石見国の尼子方に向けられた。永禄元年(1558)、元就は小笠原長雄の抛る邑智郡川本の温湯城を攻撃させた。吉川元春を主将とし、出羽元実、佐波秀連、福屋隆兼、益田藤兼ら主だった石見国人こぞっての攻撃に尼子氏の支援を受けながら長雄はよく持久したが、翌年8月に小早川隆景を介して温湯城を開城して降伏した。残された尼子方の拠点で資金源でもあった石見銀山も永禄5年(1562)に毛利方の調略に応じたので元就の手中に帰した。

●富田城開城と尼子義久

石見国を制圧し終えると毛利元就はいよいよ出雲国への侵攻を開始した。永禄4年、將軍足利義輝の調停によって尼子義久との間に約していた雲芸和平を反古にしての本格的な侵攻であった。毛利勢は、まず出雲平野の北端に鳶ヶ巣城を築いて軍事拠点とした後、宍道湖北岸に位置する荒隈山を本営として長期戦に備えた。1年近くの攻防戦の末、永禄6年(1563)に白鹿城が陥落し、中海を経由する補給路が切断されると富田城は毛利方によって完全に包囲された。毛利方の総攻撃を一度は撃退したものの、兵糧攻めの効果は著しく譜代の家老衆までもが次々と富田城を下城し、永禄9年(1566)11月、尼子義久はついに富田城を開城して毛利元就の軍門に降った。

最後まで踏みとどまった140人余りの尼子家の家臣は諸国に四散したが、尼子勝久を擁して尼子家復興戦の旗頭とし、尼子の旧臣を集めた。その中に山中鹿之助もいた。勝久は杵築大社や鏑淵寺をはじめとする出雲や伯耆の有力寺社に寺社領を寄進するなどして人心の収録も図り、年内に出雲国の大半を回復した。急報を受けた毛利元就は、毛利の全軍を挙げて富田城の救援に向かわせた。この報を受けた尼子方は、富田城の南西約8キロの布部で迎え撃った。未明に始まった戦闘は、当初、地理に明るい尼子勢が優勢であったが、次第に兵力に勝る毛利方に圧倒され、鹿之介らは総退却を余儀なくされた。布部での敗戦の後、尼子方の諸城は次々と落とされ、退勢の挽回を図って伯耆に転戦したが、勝久らは元亀2年(1571)8月に真山城を退却して出雲を去り、ふたたび故国の土を踏むことはなかった。

●鉄砲の登場

本格的な鉄砲の伝来は天文12年(1543)であるが、合戦に鉄砲が使われた史料上の初見は天文18年(1549)の大隈国(現鹿児島県)であり、出雲、石見、隠岐の三国について見ると、鉄砲が実戦に使われたことが確実な最初の戦闘は、永禄4年(1561)の末から始まった通摩郡福光の不言城の攻防戦である。不言城の攻略に失敗して福屋隆兼を江津市有福の本明城に孤立させようとした毛利元就は、永禄5年(1562)2月に重要な支城である川上の松山城を攻撃した。

これに先立って元就は「鉄砲放」を3人送り、さらに増援すると書き送っている。出雲国に侵攻して築かれた鳶ヶ巣城に「鉄砲はなし中間」が派遣されたのは同年の夏で、築城と同時期であったようである。鉄砲の普及は戦場の主役の座を騎馬武者から鉄砲足軽へと確実に移行させたのである。

●鶴丸築城と普請役の賦課

通摩郡の温泉津港はリアス式の沈降海岸を利用した天然の良港で、石州銀の積み出しと銀山への諸物資の搬入の拠点港として石見銀山の発展とともに重要性を増した。永禄5年(1562)に石見国を制圧して温泉津港を手中にした毛利元就は、当地を直轄領にして温泉津奉行を置き、津料の徴収や町場の管理などに当たさせた。

ところが、永禄12年(1569)に尼子家復興戦が始まると温泉津港は石見銀山の経営に直結した外港としての機能に加えて山陰沿岸に進出した毛利水軍の軍港と化した。尼子方が沿岸に船で上陸し、その後も簸川郡の高瀬城を拠点とした軍勢がしきりに船で平田城や満願寺城に挑んだように船戦が展開されたからである。

尼子水軍に備えて急ぎよ築城されることになったのが鶴丸城である。鶴丸城の北、温泉津湾の湾口の櫛島には、かつて温泉郷を領した温泉氏が築いた櫛島城があり、湾口の西側の笹島にも物見程度の城が築かれていたらしいので、温泉津港の湾口はこの三城によって嚴重に防備されることになった。その鶴丸城を毛利元就は通摩郡静間郷から那賀郡川上郷にいたる周辺の郷村に細孔80杖から最低7杖を割当て、1か月という短期間で完成させるよう命じたのである。ここで明らかのように普請や作事のための徴発は、戦況が進展するにしたがって、次々と陣城が築城されることによって直接戦乱の舞台となった郷村だけでなく、遠方の民衆にまで及ぶものであった。しかも普請時期は2月から3月というもっとも激しく北西の季節風が吹きつる温泉津湾の岩頭で村から駆り出された人々が、波しぶきに濡れそぼちながら黙々と働いたのである。

4節：庶民の文化

●石見門徒

石見東部の江川流域、いわゆる石東地方には浄土真宗の教線が濃密に広がっている。近年の調査によると真宗の寺院数は石見全寺院数の54%を占め、特に邑智、安濃、通摩の石東3郡についてみると約60%、邑智一郡にいたっては全寺院148か寺に対し真宗寺院は105か寺、実に71%を占めているのである。江戸時代中期以降、ほぼこのような状態だったと推定される。背景には親鸞の教えに忠実な石見教学が育っていたことがある。代表的理論家は邑智郡市木(現邑南町瑞穂)浄泉寺の仰誓、履善の親子、及び仰誓の弟子で通摩郡西田瑞泉寺の自謙である。仰誓は石見地方の邪義異安心を説教するとともに、信仰ぶりの純粋な門徒を「妙好人」として高く評価し、彼らを集めて『妙好人伝』を作った人として知られる。

ところで、石見真宗はどのようなコースで、いつごろ流入したものであろうか。石東の真宗は備後

山南（現広島県福山市沼隈町）の光照寺を中心とする明光上人系教団の流れである。光照寺教団の教線拡大の方向は、光照寺末寺の照林坊の移転の軌跡に読み取ることができる。もともと照林坊は光照寺の近くにあったが、永正4年（1507）、安芸高田郡原田（現広島県安芸高田市）に移し10年後、船木（現同）に移建した。安芸、備後、出雲、石見4か国の国境に達した教線は、照林坊末の出雲赤名（現飯南町）の西蔵時を拠点に出雲と石見に伸びていく。

中国地方の真宗は北陸のように農民層の中に広まり、領主権力との抗争によって教勢を拡大していくパターンとは異なり在地領主層の保護のもとに発展していくという特徴を持っていた。石見の真宗も領主層の保護によるもので、石見の真宗寺院の中に武家の開基伝承を持つ寺がかなり存在するのは、そのことを物語っている。永禄5年（1562）、石見銀山が毛利の手に移ることにより、石見は毛利の支配下に入ったとみてよいが、毛利支配の下で石見の真宗勢力は順調に進展していった。

元亀元年（1570）から始まる織田信長と石山本願寺の抗争には毛利氏は安芸門徒と連携し、本願寺を支援した。籠城中の顕如上人からの「一紙半銭奉加」の悲痛な訴えに応じて、多くの石見門徒が兵員や銀を送っている。こうした支援要請の書状は温泉津・西楽寺、佐波・浄土寺、祖式・浄土寺、天河内・正善坊に残されており、石見門徒の積極的な参戦は、単に本願寺側からのアピールによるものではなく、毛利氏及びその配下の石見国人領主層の働き掛けがあったからであろう。江戸時代に入っても真宗の教勢は衰えることなく、民衆に根付いていった。

●雪舟の益田滞在

雪舟は応永27年（1420）、備中赤浜（現岡山県総社市）に生まれ、少年のころ京都五山第二位の相国寺に入り、禅の修業と画曾天章周文に画法を学んでいる。40歳のころ大内氏を頼って山口に入り、48歳の時、明へ入り3年間、設色や破墨の画法を学ぶとともに中国の自然をしっかりと見つけて帰国した。

帰国した雪舟は、文明10年（1478）ごろ山口に戻って「益田兼堯像」を描いている。その後、奥州、北陸から京都を回り再び山口に帰っている。文喜2年（1502）には83歳の高齢で「天橋立図」の壮大な真景図を完成した。雪舟は中国絵画の模倣から脱却し、日本の自然や人物を彼独自の美意識で写実的に描こうとした。雪舟の偉大さはその点にある。

そのほか……、

1. 「山寺図」は出羽の立石寺ではなく、益田東光寺近辺の情景を描いたものだろう。
2. 益田医光寺（もと崇観寺）や万福寺の庭は、庭園史家たちによって雪舟作庭の折り紙がつけられている。
3. 大喜庵の雪舟墓、医光寺門前の雪舟灰塚などの伝承遺跡があり、益田以外の石見の地にも、雪舟作庭の伝承をもつ庭園がある。

これらから没年までに2度にわたって益田を訪れ、この地で没したと説く説がある。しかし、残念ながらこれらの理由は雪舟の益田滞在を確実に論証するには少々弱すぎる。そのため、中央の研究者はほとんど言及しようとならないのである。

山陰の城下町

1節：出雲、石見、隠岐の大名配置（付図－6）

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で勝利した徳川家康は、西軍に属した91名の大名を改易し、4名を減封、そして642万石を没収、これを東軍に参加した大名に加増するとともに、併せて全国的な規模での大名配置替えを行った。石見国では浜田城の毛利元氏、益田城の益田元祥、三本松城（津和野）の吉見広行らは、毛利本家に従って防長（現山口県東南部）と長門国（現：山口県南部）両国に退転していった。

代わって石見国では大森銀山の周辺と美濃、鹿足両郡のうち銅山がある村を合わせて4万8,000石余が幕府直轄の天領となり、邇摩郡大森に代官所を設置した。初代石見銀山奉行として大久保石見守長安が着任するのは慶長6年（1601）であった。津和野三本松城には、坂崎出羽守成正が3万石で入城するが、千姫事件で御家断絶となり、代わって元和3年（1617）、因幡国（現鳥取県東部）

鹿野から亀井正矩が4万3,000石で入部して津和野藩の祖となる。浜田には、元和5年に伊勢国（現三重県の大半）松坂から古田重治が5万石で転封された。しかし、2代重恒に嗣子がなく改易、慶安元年（1648）に播磨国（現兵庫県南部）宍粟から松平康熙が藩主となり、周防守家の浜田藩を開くのである。

●浜田城と城下町

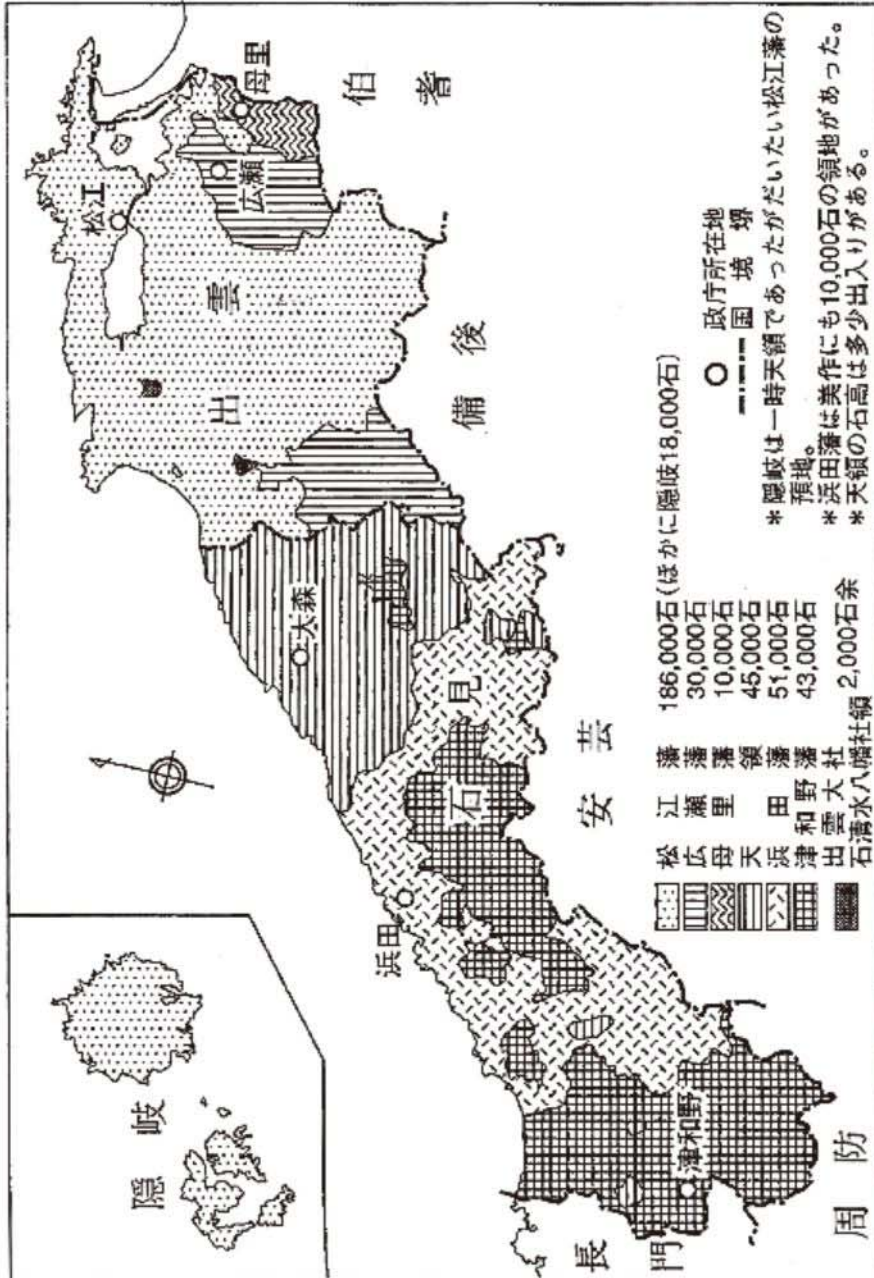
石見国の美濃、那賀、邑智の3郡172か村5万石の所領とされた古田重治は、所柄を見立てて居住すべしと命じられて浜田にやってきた。初め美濃郡益田の七尾城を考えたが旧城主は12万石であり、5万石の自分では維持できないとして断念、浜田亀山を城地とすることに決定した。築城工事は元和6年（1620）から長門国に退転した周布氏が代々抱えていた土木技術者たちを招いて着工した。河原町から丸の内を流れ、松原の弁天の前に出る川筋を内堀とし、その外側に天満堰から池田を流れ海に注いでいた川を廃して、城地の南から西へ流れ北州崎で松原湾に入るように付替えて外堀とした。

本丸は上段の西に三層の櫓を立てて天守造りとし、二の丸には多門を設け、三の丸には藩主居住の御殿のほか、諸役所、番所、土蔵などが置かれ、浜田川以北を惣曲輪とした。丸の内であり、内片庭、藪町、大手、殿町、福浦、祇園町、堀町、河原町が武家の屋敷町になっていた。浜田川をへだてて町人町の「浜田八町」があった。紺屋町、新町、蛭子町、片庭町、門ヶ辻町、檜物屋町、辻町、原町が八町である。江戸期を通じて八町の合計戸数は600戸前後で推移している。同時期の『諸職人並商売人控』には、職人について14業種159人、商業が14業種105戸が記されている。浜田には城下町に接して浜田浦、松原浦、瀬戸ガ島の港町があり、問屋や船頭が多かった。

●津和野城と城下町

津和野城は、文永・弘安の元の軍勢来襲（1274～81）に備えて能登国から下向してきた吉見頼之、頼直父子が築城した山城に始まる。慶長6年（1601）、津和野藩3万石に封ぜられた坂崎直盛は山城を補強して山頂に本丸、二の丸、三の丸、その一段下に腰曲輪を設けて複郭とし、石塁を築き防備を固くした。また北方には出丸として新しく織部丸を構築した。これは吉見氏のころにあった中荒城、茶臼山の向城の代わりに鉄砲を使う戦闘に対処して築造したと言われ、直盛の弟である織部が指

各藩支配図 17世紀中期以降の雲石隠3カ国各藩支配図。出雲国は松江藩のほか、分家の松江藩と母里藩がある。隠岐国は松江藩の預地。石見国は大森銀山を中心とする東部が天領で、中部に浜田藩、西部に津和野藩が置かれたが、津和野藩領は浜田藩領のなかに飛地が多かった。また天領も大森銀山だけでなく石見国内の鉾山所在村を支配下に置いていた。



(付図一 6)

揮にあたったことから織部丸の名がつけられた。天守櫓をはじめとする各所の櫓、そして各櫓をつなぐ塀なども造られ、正保3年(1646)の城絵図にその威容をうかがうことができる。

城下町づくりのために坂崎直盛は城山の西側面にあった大手を東側に変更し、今に残る街並みの原型を造った。続いて元和3年(1617)に入部した亀井正矩、二代菰政の時期に町割がほぼ完成したと思われる。寛永2年(1625)、殿町の藩邸が火災で焼失、代わって中ノ原に新邸を建築して移転するが、中ノ原は現在の津和野高校のあるところ、城山の麓に接しており、城山に至る通路門や勢溜が設けられていた。

この新しい藩邸を中心に後田と森村の地区が家中武家屋敷であり、これをとりまく鷺原、中座、町田、後田、森村の外延部が下級武士の屋敷になっていた。また寛永15年(1638)には、中座の沼地の水抜きをするため、町田尻より大橋詰まで濠を掘り土塁をつくった。津和野川を内堀とすれば外堀の役割を果たさせるもので、その内側の中ノ島、堀内は重臣の屋敷地とした。

城下人口は文化2年(1805)の調査では家中5,464人、町方2,540人で、家中が町方の2倍を超えているところに特色があった。津和野川にかかる大橋の北が殿町で、堀と惣門で区切られて町方との境界を作っていた。殿町の惣門より北が町方で、本町、今市、上本町、京伝町、下町、下魚町、大工町、新町、横町などがあった。

町方に居住する者のうち、屋敷持ちからは町方運営の経費を取り立てていた。津和野では、本町は表間口1間当たり米1升5合、他の町は米9合などの税をとり、他所から津和野の城下にやってきて行商する者からの口銭を徴収する制度もあった。

●城下町の商工業

自給自足の自然経済が封建社会における経済の原則であるが、城下町の商工業は特別のものとして例外的に許されていた。藩財政は現物の年貢米が最大の収入源であったが、年貢米は販売して貨幣に換えなければならなかったし、生産活動から切り離されて城下町に集団移住させられた家臣団も、生活が必要とするすべての物資を購入して日常の暮らしをしていたのである。

このため城下町の商工業は、藩財政と家臣団の消費需要に対応することを基本にして、あるときには奨励的な形で、ある場合には統制されるなどして発展していった。統制面が強くなるのは18世紀からで商品経済の発展に伴われて商工業者が増加し、町方人口も増加するようになったからである。

2節：農民の仕事と暮らし

「百姓は天下の民、田地は元より公儀の御田地に候えば、御年貢は百姓の身分より納め候者にござなく、田地より納め候儀、作徳は公儀より下され候品と心得」とは、天保2年(1831)正月に石見銀山領の代官教書で示された言葉である。封建社会での領主と農民、田地と年貢米、農業をすることの意味が十二分に表現されている。まさに農は納に通ずるが故にこそ、百姓は国の本、天下の民とされたのである。それだけに農業生産に従事する農民に対しては、年貢米の生産に精を出し、その間には雑穀などの畑作に務めるとともに、消費生産では質素と儉約の「分相応」が、ことあるたびに繰り返して御触書で強調され、周知徹底が図られていた。

●石見の紙年貢

浜田藩は紙漉きの仕事を女にさせるために寛政10年(1798)、國東治兵衛に「紙漉重宝記」を著させて、紙漉きを奨励普及させた。石見地方の山村は紙の原料である楮の栽培に適していた。このため津和野藩では、山に段々畑を開いて楮の植えつけを奨励するとともに、紙漉き先進地である飛騨国に人を送って、御用紙漉き立ての技術を学ばせ、領内に紙漉きを普及していった。寛文5年(1665)からは、藩営専売として紙問屋に雑役人を配置し、元禄9年(1696)には米に変えて紙を年貢とする制度を作った。その結果、太宰春台の「經濟録拾遺」には「石州津和野候は板紙を占めて売る故に、四万石の録は十五万石に、また浜田候も五万石が十一万石の高をなす」と記されるほどに石州半紙の紙年貢は、米に代わって藩財政を潤したのであった。津和野藩では「増御買紙」や「働漉」などといって定免の請紙を超える増収策をとっていた。

●天領支配の石見銀山

江戸時代の初期に石見銀山は最盛期を迎える。『銀山日記』は、慶長の頃より寛永年中の大盛、士稼の人数20万人、一日米穀を費すこと千五百石余、車馬の往来昼夜をいはず、家は家の上に建て、軒は軒の下に連なりぬ」と盛況を記している。

初代の銀山奉行は大久保石見守長安であった。長安は全国にある金銀山を巡回しており、常時石見にいたわけではないが、「大久保間歩」をはじめ新しい坑道をいくつも開発して、銀の産出を大きく増加させて「銀山大盛」といわれる時代を作ったのであった。

銀山は、幕府直営の御直山と山師による自分山に分けられていた。間歩すなわち坑道の中に入って仕事をするものを下財(あるいは銀掘)と呼び、3~4人いた。四面を岩盤に囲まれ、したたり落ちる水滴と湧水のなかでの重労働である。このため銀山鉱夫には湿気と「けだえ」という鉱害病のため短命で終わる者が多かった。

銀山奉行としては、下財に1日当たり米2合5勺ずつ給付したり、鉱害病患者に対して大豆4升、麴2升、塩2升を与える「御勘弁味噌」の救済制度を作って対処していた。坑内と精錬で使う材木と薪炭を確保するためには、代官所直営の御林を持つほか、材木供給の任務を持たされた32か村の御囲村と、薪炭供給を義務づけられた炭方6か村が銀山周辺の村に定めてあった。材木や薪炭はすべて代官所による買上げであり、その値段には問題があったとしても周辺農村に在住する農民にとっては、現金収入が期待できる農間余業の役割を果たしていた。

こうして製造された灰吹銀は、江戸時代初期は石見海岸の温泉津、馬路、大浦の諸港から積み出していたが、ほどなく赤名峠を越えて三次から尾道に行く陸路に変えられ、尾道から船に積んで大阪の御銀蔵に海上輸送した。

●芋代官・井戸平左衛門

銀山領代官として井戸平左衛門が赴任してきたのは享保16年(1731)であった。享保年間には毎年のように凶作が続く、銀山領農村の窮乏はその極に達していた。平左衛門は、旅の僧侶が語った薩摩国での甘藷を石見国に導入することを企画して、種芋100ヶ余を取り寄せ、海岸部の砂地の村々に100石につき8割の割で配って試作させた。年貢の対象とならない甘藷栽培は、不毛の石見の畑地で生活する人たちに食料を確保することになった。凶作で米が採れない時でも人々は飢えからまぬがれることができるようになった。このため農民は、平左衛門に「芋代官」の尊称を贈って遺徳を称えた。

享保17(1732)年は大凶作であった。平左衛門は私財を投じて領内から義損金を集めて救済策を講じたほか、緊急の措置として代官所が管理する幕府囲米を独断で放出した。農村の年貢米についても「当子虫付皆無引」と全額免除を決定した。

石見では収穫が終わった11月26日を中心に「芋供養」「芋法事」を行って、「芋代官」井戸平左衛門に限りない感謝と敬慕の情を捧げている。

3節：新時代への胎動

●浜田藩の密貿易

明和6年(1769)に再び浜田藩主に返り咲いた松平周防守康福は、老中首座の要職にあり、田沼意次とともに幕府政治での「田沼時代」をつくっていた。浜田へは息子の康定が入城し、寛政元年(1789)に襲封した。浜田藩では明和5年(1768)に藩医の小篠敏を侍講に任命していたが、寛政2年(1790)には藩校の長善館を開設して小篠を教授にした。小篠は古文辞学を学ぶとともに長崎で蘭医を、さらに本居宣長について国学も学び、藩校を通じて広めようとしたことに浜田藩学の特徴がある。

国学と蘭学による教学改革を推進した浜田藩の革新性は、家老の岡田頼母、そして百姓から勘定方に登用された橋本三兵衛によって禁制の外国貿易に挑戦させることになる。すなわち、藩の御用船を受け持っていた会津屋八右衛門が勘定方の橋本と相談し、窮迫していた藩財政を再建する一助ということで家老の岡田が黙認し、竹島での朝鮮貿易を行ったのである。

八右衛門は浜田藩の黙認を得て密貿易を始め、朝鮮半島から中国大陆、南蛮諸国まで範囲を広げていった。幕府の取調べ書には、江戸をはじめとして諸国から集めた刀剣類を積み込んで漁師の姿で異国人と交易したとある。海外から持ち帰った珍品は、京、大阪で販売したが、時が経つにつれて密貿易の噂を立てられ、たまたま山陰道にやってきた幕府隠密の間宮林蔵に気付かれ、天保7年(1836)、大阪西町奉行によって摘発された。幕府は八右衛門だけの行動とは見ないで藩ぐるみの密貿易として取り調べを進め、江戸に呼び出しを受けた家老の岡田と年寄役の松井は、浜田を出立する直前に切腹した。さらに江戸の藩主父子にも連帯責任が問われ、老中首座御勝手御入用掛の重職にあった前藩主の下野守には、永蟄居が命じられ、藩主の周防守には奥州棚倉(現：福島県白河市)への転封処分が申し渡された。

●養老館の津和野本学

津和野藩が藩校養老館を開設したのは天明6年(1786)であった。教授には大阪から朱子学者の山口剛斎を招き、藩儒の吉松儀一郎が助教授に就任した。学問に熱心な菰監は、弘化4年(1847)、江戸深川の下屋敷を売払い、その代金7千両に御納戸非常手当金3千両を加えて1万両で教育資金とし、武道教場を新設した。さらに翌年には増築工事として国学部を新設。岡熊臣を国学教授に登用するとともに、儒学に替わって国学が優位に位置づけられ、「惟神の道」を基本とする学則を制定した。

岡熊臣は領内八幡宮社家の生まれで、寛政7年(1795)浜田藩校教授の小篠敏に従って本居宣長の鈴屋を訪ねた。宣長は蘭学や西洋事情にも強い関心を持ち、「解体新書」や「采覧異言」など、各種の漂流記の写本を作り、広い視野からの実証を旨としていた。熊臣の死後、大国隆正が国学教授に任命され、国学を「本学」と改称させ「津和野本学」を高唱した。津和野本学は「異国人に

接すべき国学」として、独特の尊皇擁夷論を主張する。隆正は、天皇は「皇国の天皇」であるにとどまらず「四海万国の統王」であるとし、古伝により明らかにされているのが天皇支配の正統性であるとする。外国に対しては排外主義の擁夷論はとらず、「実理大道よりいふ擁夷」、外国人に尊王の気持を起させるような「万国をひきよせ、わが天皇につかわしめたまはれ」とする尊王援夷を主張した。

●日本海の家運

隠岐国が江戸に年貢米を初めて直送したのは寛文元年（1661）であったという。同12年には河村瑞賢による西廻りの日本海航路が開発され、船番所を設置した寄港地が定められた。出雲国からは、美保関⇒[3里]⇒雲津⇒[4里]⇒加賀⇒[7里]⇒宇龍⇒[17里]⇒温泉津⇒[10里]⇒浜田⇒[21里]⇒須佐⇒[8里]⇒萩⇒[6里]⇒仙崎、そして馬関に至るのである。隠岐の西郷や大山脇の港は、北陸から日本海を西に横切って馬関に直行する「沖乗り」の寄港地であった。

浜田外ノ浦の廻船問屋清水屋に出入した諸国廻船を、「客船帳」から集計した船主の国別分布では、延享元年（1744）から寛政10年（1798）までの時期では近畿地方がもっとも多く、四国の船がこれに次いでいる。ところが寛政11年（1799）からは、北陸と山陰の船が急増して日本海廻船の主力を占める。入港船数も幕末には100年前に対比して3倍に増加して最盛期をつくる。清水屋による商品売買は、他国廻船からの揚げ荷＝買荷として米、塩、砂糖、種油、酒、大豆、昆布、板類、七島蕨、素麺、繰綿、小豆など、廻船への積荷は干鰯、銑鉄、半紙、塩鯖、生蠔、瓦、鯖、干鯖などであった。

明治維新からの石見

慶応4年(1868)5月には、井上整介らが石見国旧浜田藩領に軍政を敷いている長州藩本陣に郡代追放のことを報告、「御地頭の儀は恐れ乍ら朝儀を奉じ相待ち候より外、他念ござなく候」と所信を述べるとともに、援軍の派遣を要請した。

●廃藩と島根県の成立

島根県の県域が出雲、石見、隠岐の3国として最終的に確定するのは明治14年(1881)であった。石見国は長州戦争で益田口から反撃した長州藩によって浜田城が落城させられ、銀山領大森代官は逃亡したので、旧浜田藩領と幕府の銀山領は占領支配の長州軍政の下に置かれた。長州藩民政方は慶応2年(1866)8月になって藩主、代官が不在であるため「其人民依頼するところこれなく、就いては止むをえず、撫育の方便慈悲を主とし、仮に民政取捌かれるべき事」という方針で臨むことを明らかにした。

こうして石見国は津和野藩領を除いて長州藩預かり地とされ、浜田と大森に民政方を置いて支配することになる。明治2年8月2日付で長州藩預かり地の旧浜田藩と銀山領とを合して大森県が新設され、併せて隠岐県も含めることにして隠岐県知県事が大森県権知事となる。初め県庁は大森に、3年1月9日から浜田に移して浜田県と改称する。

津和野藩は明治2年6月23日に「かねて返上の義申上げ奉らず候えども」という立場から独自の版籍奉還を行い、同4年6月25日には自主的に廃藩を申し出て、浜田藩に編入された。同4年11月15日に松江、広瀬、母里の3県が廃止され、浜田県から隠岐を分離して出雲、隠岐両国を管轄する島根県が成立した。県名は県庁所在地の松江が属する郡名の島根郡からとっており、徳川一門の朝敵藩の多くが同じ形で県名が与えられた。同9年4月18日、浜田県が廃止され、ついで8月21日には鳥取県も廃止されて島根県に合併された。出雲、石見に加えて因幡と伯耆、隠岐の山陰5か国を管轄する島根県の成立であった。しかし、因幡国では鳥取県再置の運動を起こり、同14年9月に鳥取県が再置されて分離、島根県の県域は出雲、石見、隠岐の3か国に確定した。

●島根の自由民権運動

明治6年(1873)6月、島根県は県庁内に初の県民会としての集議所を開設した。県民代表による県政への参加が始まったのである。浜田県でも県民会が開設され、県権令佐藤信寛(元首相・佐藤栄作の祖父)は、地方官会議が地方長官だけを召集して開催されることを批判して、「県下ノ人民12名ヲ以ッテ代議士ト為シ、地方長官ト共ニ召集」するように太政大臣に建白した。

有司専制(自由民権派が藩閥政府の専制を非難した語)に対して国民の政治参加を要求する声は、自由民権運動の高揚に伴って全国に広がった。石見国東部では同15年に大阪で開かれた酒屋会議で活躍した小原鉄臣の石陽自由党がある。小原の安濃郡波根東村(現大田市)を中心に小学授業生や未成年者も含めて数十名が加入していた。小原は村会議長であり、村会では14名の議員中12名までが党員で、毎月の常会のほか、年3回の自由懇親会を開くことにしていた。

浜田の石見立憲改進黨は県会議長の佐々田ススムを党首に那賀、邑智、美濃3郡の県会議員を中心にしており、「中央干渉の政略を省き地方自治の基礎を建る事」を党綱領に掲げ、島根県会に

おける県会闘争の主役であった。那賀郡跡市村に石見義塾を開設し、機関誌「山陰新誌」を発行していた。

益田には佐々田らの改進黨に反対する自由主義者によって石見立憲自由党が結成されていた。主な党員は益田の醤油屋野村角太郎ほか仲買人、農民、左官、小学生ら60人ほどで、初代益田町長になる寺井文三郎もいた。同17年になって3回にわたり集会条例違反に問われ、全国にも例をみない裁判所による解党判決を受けた。

●「むら」に不学の戸なく

明治5年(1872)に学制が公布された。同時にこれまで府県で設けていた学校は全て廃止となったため、浜田県では同5年2月に開校したばかりの津和野、美濃、邑智の3校を閉鎖し、予定していた那賀と遍摩の2校の開校を中止した。

小学校の開校は同6年4月、松江の雑賀南小学、浜田の朝日山小学が早い。学齡児の就学率は明治7年になって30%となるが、10年代になっても向上しない。同11年には小学簡易教則を定め、1日5時間の課業を3か年で終了する過程を作り、「貧民ノ子弟長ク在学スル能ハサル者」に対処した。授業料の経済負担に加えて、子供は労働力として重要な役割を果たしていたのである。

●文明開化と新聞

道路交通の整備では、明治6年4月に道路の要地に道標を立てさせ、10年代から県内幹線の3大道路の整備に着手する。中海・宍道湖の航路も開かれた。同5年7月には松江灘町に郵便取扱所が開設され、松江を中心にして県下の郵便網が作られた。

新聞縦覧所は「島根新聞誌」を創刊した前島美治からの要請を受けて同6年3月、島根県庁内に開設した。浜田県下では同7年9月に「浜田新聞誌」が創刊された。同年6月に開かれた浜田県民会で新聞社創立議案として提案可決されたもので、浜田県庁の支援で浜田の文会堂が発行した。

1 節：資本主義社会と「裏日本」

●山陰鉄道の開通

山陰での鉄道建設計画の具体化は、明治20年(1887)の私設鉄道条例公布を機に島根、鳥取両県の県会議員有志が松江で会合して、岡山と境を結ぶ陰陽連絡鉄道の建設促進を決議したことに始まる。ところが明治23年になると、津山一倉吉経由の線、津山一勝山経由一米子行き線、玉島一新見経由一境行き線、倉敷一新見経由の米子行き線など、陰陽連絡の4路線が競合することになった。これを調整して同25年(1892)、舞鶴一鳥取一松江一浜田一山口の縦貫線と、横断線では姫路一津山一鳥取、岡山一津山一米子一境、倉敷一境の3路線のうちの1つが予定線とされた。

日露戦争を控えた同37年に大阪と舞鶴の軍港とが鉄道で結ばれた。併せて山陰鉄道は、姫路一津山一鳥取よりも福知山一鳥取一米子の縦貫線を優先することに変更した。同41年11月に松江駅開業、同45年6月には京都一大社間の山陰鉄道が全通する。しかし、今市から西の開通は遅れ、浜田が大正10年(1921)、下関までの全線開通は昭和6年(1931)であった。

日本資本主義の確立期にあつて山陽地方に比べて20年も遅れて鉄道が開通したわけである。京阪神地方への絶対的な距離は鉄道によって時間的に短縮することはできたが、20年のギャップは、山陰地方の後進性を決定的なものにしていったといえる。

●衣食住の洋風化

生活の近代化は、洋風化という形で進められた。和服が洋服に、和紙に対する洋紙、和食に対する洋食などである。食生活では、石見の海岸部にある大浜村（現大田市温泉津町）、波積村（現江津市）は畑作だけの漁村であったから、米1升に麦3合とか、米1升到同量の麦や粟の混食であった。番茶汁で煮立てた「茶粥」も常食で「上流者は団子餅を入れ、中下流者は一般に甘藷」を入れていた。蒸甘藷もよく使われた。

当時の記録をたどると、「現今の食物を明治初年頃に比較すれば、其程度やや上進せり、即ち明治初年頃は上中下の別なく、常食は交り飯、団子粥等なりしが、明治10年頃より漸次上進し、中流以上は交り飯を食するもの少なく、休憩時間に煎茶を飲むに至れり」とも書いている。

●裏日本の位置

表日本に対する裏日本という地域区分を明確に使った例としては、明治40年（1907）に東京博文館から発行された山崎直方・佐藤伝蔵編の『大日本地誌』がある。第5巻が北陸であるが、中に「裏日本」がでてくる。『大日本地誌』は近代的な地誌の代表といわれていただけに、同書によって北陸や山陰の日本海沿岸地域を裏日本とすることが一般的になったと思われる。

大正4年（1915）には、山陰鉄道の京都一大社開通を記念して久米邦武の『裏日本』が出版される。序文を寄せた大隈重信は、いみじくも「裏とは僻隅の謂にあらず」と述べて僻隅のところと思われている一般認識に対して、あえて「裏日本」と題する書物を発刊して見直しを呼びかけたのであった。僻隅の地域としての「裏日本」という言葉が、明治末期の時期に作られたことは重要な意味を持っている。時は産業革命を終えた日本資本主義が社会全体をとらえて確立した時期でもあった。表日本に対する裏日本という問題意識は、日本資本主義が内在していた地域的不均衡発展の法則に照らして考えてみる必要に迫られてくる。

20世紀に入って本格的に工業化が進展するが、裏日本の後進性が顕著になってゆく。伝統的な地場産業である鐘製造業や鉱山業の比重が大きかった島根県の第二次産業は、資本主義的近代化を遂げることができずに凋落を余儀なくされ、替わるべき新しい産業の育成も遅れた。

富国強兵をスローガンにして全てを中央に集中集権しながら、政府によって上から近代化を推進してゆく場合、中央から遠く離れた交通不便な地域における近代化は、否応なく後進的とならざるを得ないのである。山陰鉄道にしても明治末になってようやく開通したのである。石見西部になると大正末である。先進地域に対する後進地域としての地域格差は、拡大の一途を辿ることになる。

こうして先進地域が工業化と都市化で特徴づけられるのに対して、工業化と都市化で遅れをとった地域は、農林水産業を基幹産業とする農山漁村として特徴づけられ、食料と原材料と労働力の供給地の役割を課せられることになる。

2節：地域振興への挑戦

●大正の産業計画

第一次世界大戦は、戦場となったヨーロッパ諸国に代わって日本を工業国として世界経済に新しい地位を築かせることになる。島根県は大正7年（1918）に新しい産業計画を作った。普通農事、蚕糸業、畜産業、林業、水産業、醸造業、製紙業、窯業、染織業、各種工業、その他の11部門があり、

明治期の殖産計画が農林水産業が中心であったのに対して工業に特別の比重をかけ、業種別に独立した部門にしたことが最大の特徴である。

独占資本が主導する日本の工業水準に比べると島根県の工業はあまりにも幼稚であり、小規模かつ前近代的であった。このため産業計画では現存の伝統的地場産業を取り上げて、工業近代化の手法として科学と技術の応用、職工養成と、技術力向上、品質規格の統一、市場調査による販路拡張・生産と販売の共同化、県内自給原料増殖の6項目が実施されることになった。県の工業試験場も醸造、製紙、窯業、染織の4部門で新設され、物産陳列所も拡充強化された。

しかし、経済情勢は戦後恐慌をはじめとする激しい変動を繰り返していた。計画策定後3年を経過した大正10年(1921)に実施状況を点検した結果、「これが実行予期の如くならざるの憾みなきに非ず」とした上で、「督励事項と名づけ、特に主力をつくすべき共同目標」に、米の増収、米の乾燥改良、部落養蚕組合の普及、造林事業の発達、畜牛の増加、産業組合の普及、漁業組合の活動の7項目を特定した。しかし、これらはすべて農林水産業関係であり、工業関係は取り上げられなかった。

●農民運動の高揚

大正12年(1923)4月、鳥取県米子市で島根、鳥取両県にまたがる日本農民組合(日農)山陰連合会が結成された。「小作料永久三割減」が目標であるが、結成大会で決議した宣言文では、小作人の団結を訴えて生存権の確立と農村文化の実現を訴えていた。

県下では石見部の安濃郡で大野佐市が中心になって富山、波根、朝山に、那賀郡では岩田惣太が中心になって今市、丸原、和田、本郷、木田、久佐に、邑智郡では富田清作らにより日貫に各支部を作った。昭和2年(1927)3月、安濃郡波根東村で日農島根県聯合会を結成して会長ほか役員を選出し、安濃郡富山村に事務所を置いた。さらに同年8月には八束郡の7支部から加盟者も出て県連の事務所を松江に移した。

昭和2～3年にかけてが農民運動の最高潮期であった。争議件数と参加人員は同2年が75件3,263人、3年が46件1,206人である。3年7月に日農と全日農(全日本農民組合同盟)が合同して、全国農民組合(全農)を結成したことに対応して、県下でも日農系17組合と全農系50組合が合同して全農島根県聯合会を結成し、次第に厳しさを増す状況の中で戦闘的な性格を明確にして、6年の第3回大会では闘争スローガンを決定している。この大会の翌日である3月1日、治安維持法違反容疑で県下で100人を超える一斉検挙が行われ、指導部を失った全農は解体の道を歩むことになる。

●米騒動

大正7年(1918)8月13日、邇摩郡温泉津町で米の安売りを要求する貼紙が貼られた。20日には邑智郡市山村(現江津市桜江町)、那賀郡浜田町(現浜田市)、美濃郡高津町(現益田市)で米屋や酒屋を打ち壊す暴動が起るなど、9月10日まで1か月間は県下各地で米価の引き下げや安売りを求める集会、貼紙、投書などを通じて行政当局の善処が要望され、米騒動一色に塗りつぶされたのである。

温泉津、浜田、高津はいずれも港町である。全国の米騒動の発端になった富山県魚津がそうであったように地元に米がなくなり、値上りしているにもかかわらず、米の積み出しを眼前にした港町の住

民の抗議行動が米騒動の始まりになる。

[浜田の米騒動] 松江や今市では暴動にならなかったが、那賀郡浜田町では8月15日米屋焼討ちの貼紙、郵便局集配人の2時間ストライキ、子供による焼討ち流言があり、16日早朝には100名ばかりが集まって焚火、そして同日から町による廉売が実施されたが、20日午前零時、乱打された寺の鐘を合図にして浜田浦と松原浦の漁民600名が一斉に蜂起して米屋24軒を襲って打ち壊した。警察は浜田聯隊と憲兵隊に出動を要請、実弾をこめ着剣した小隊が鎮圧にあたった。浜田のほかに16日に邑智郡市山でも2軒の米屋が襲撃され、22日には美濃郡高津村で3軒の米商人が打ち壊された。騒動後の浜田では、町内に廉売の貼紙が出され、ほとんどの物価が自発的に3割も下げられたという。町は2万円の寄付金を集めることとし(実際は5,400円しか集まらなかった)、26日から内地米は25銭、外米は15銭で町内6カ所の町営販売所で廉売をはじめた。

3節：戦争と県民生活

日本農民組合の農民運動は地主に対する小作争議にとどまらず、組合員の政治意識の向上による経済的課題の政治的解決を目指して取り組まれていた。そうした運動の一環として地方議会選挙があり、日農県聯のあった安濃郡富山村では5名が、邑智郡日貫村で3名、那賀郡今市村で2名の村会議員を当選させていた。そして大正15年(1926)の県会議員選挙には安濃郡で県聯委員長・大野佐市を立候補させて、日農組合員数を上回る166票を得た。村議選から県議選への政治的進出の余勢をかって同年10月には、労働農民党島根支部を創立させるのであった。

●県の農会の郷土文化運動

昭和3年(1928)7月の「島根県農会報」は「農政の根本義を論じて郷土愛の作興を高調す」と題する恒松於菟二会長の論説を掲載して、県農会が系統組織の全てを挙げて「住みよき農村」建設をめざす郷土文化の振興を農会運動として推進する意義を明らかにしている。農村は経済的にも社会的にも厳しい状況に置かれているだけに、農村の経済的振興は緊急の課題になっていた。しかし、経済問題は基本ではあっても農村問題の全てではないという問題提起である。農民に、郷土愛を育むこと、そのためには伝統的な歌と踊りを振興して「住みよき農村」を作っていこうと呼びかけたのであった。提唱に応じて県農会は町村農会に依頼して古老が伝える民謡を集め、盆踊り唄、田植え唄、草取り唄、子守唄、餅掲ぎ唄、木挽き唄に分類して『農村の民謡』を発刊した。

8月の盆には盆踊りを復興する計画を立て、各町村農会の手によって「歌え1踊れ!」のポスターを貼って回った。「島根県農会報」の昭和3年7月号には「盆踊礼讃」の巻頭言が掲載され、県農会が意図するところが「農村娯楽の理想化」であり「新たに復興せんとする盆踊りは、これを芸術化せしめたり」と明言している。7月から8月にかけて、県下の農村では町村農会主催の盆踊り大会が相次いだ。大原郡木次町と鹿足郡津和野町の盆踊りは広島放送局からラジオで放送された。県農会が言うように「昭和3年の夏は農村の古典芸術復興の時代として、農村史に記録されるに足る」ものであったといつてよい。

●民芸運動の勃興

島根の民芸運動は、昭和6年(1931)の5月から6月にかけて、柳宗悦によって「島根工芸視察の旅」が行われたのを契機として本格的に取り組まれた。「県産工芸の全般に亘って健康診断を行い、これによって健康なもの、健康を回復し得るもの、全然その見込みなきものの三種に大別して、将来の根本的指導方針を確立しようと試みた」ものであった。旅の成果は、大田の『島根の民芸年鑑』によると益田で喜阿弥焼土瓶と糊壺、壱坦の粗陶器、竹工品、利休饅頭、都野津の山葵おろし、温泉津の平鉢、大森の竹箸と陶器、全童一の日の出団扇、広瀬のぼてぼて茶碗、煎茶碗、絞り染、安来の木工品、織物、金工品であった。

旅に続いて県下で『正しい工芸の展覧』を開催した。「工芸が土地の人々の生活と結びつくことは、地方色を一層豊かにするばかりでなく、その発達を最も堅実ならしめる上に欠くべからざる約束の一つであり、殊に旅館料理屋等に於いて地方の工芸品を使わすことは、外来客を喜ばせ又料理を一層うまくするであろう。それ故に地元の人々に更正した地方の工芸品展示し、且つその愛用を勧めることは私共の第一の任務である」と述べている。

昭和6年9月には松江商工会議所で「島根県民芸品展覧会」を、10月には京都で「山陰民芸展」を、11月には東京銀座・資生堂で「山陰民芸展」を開催した。「都会の人々に豊かな地方色と親切味とに充ちた器物を見て貰い、使って俱に喜びを頒ちたいと思ふ」という趣旨である。

こうした民芸運動の支援と協力を得ながら、本格的な地産工芸への取り組みが始まる。平凡な農家副業に民芸のライトがあてられ、新しい発展が期待されるのであった。

●戦時下の暮らし

昭和17年1月から点数式衣料切符制が実施された。繊維製品の工場が軍需生産に転換したため、需要を制限する方策としてとられた制度であった。都市は100点、郡部は80点と定め、総点数の枠内で衣料品を購入させ、手拭い3点、背広上下50点など、種類ごとに点数が決められていた。

食糧問題はより窮迫していた。働き手を戦争にとられた農家での生産減退を補充するため、学校の生徒・児童は総動員された。衣料品は切符制に、食料品はすべて配給制になり、子供の学生服やカバンその他の用具入れ等、親の着物を染めて作った。銃後の男子は50歳、60歳、70歳代ばかり、いつも防空頭巾にモンペ姿で、竹やりやバケツリレーの訓練、小学生も防空演習が日課で、勉強はとかくお留守になり、幼児は町内の神社やお寺が特設の保育所となり、弁当を持たせて朝8時から夕方5時まで預けられた。

●郷土決戦体制

島根県下にはじめて「空襲警報」が発令されたのは、昭和19年(1944)6月15日だった。同20年になるとさらに戦局は悪化し、「本土決戦」が言われる。県下高等女学校では、護身用の千枚通しを常時携帯することが決められた。敵兵が上陸してきたとき、「1人でも敵を殺してからでなければ、死んではいけない」と女学生に申し渡された。日本海沿岸部の上陸しやすい地域にあっては、所轄の警察署から敵が落下傘で降下した際の攻撃方法と竹槍の作成方法が指示された。一般用は1m70cmないし2mとされたのに対して「少年用竹槍」は1m50cmと定められた。少年も少女も竹槍や千枚通しを武器にして、「鬼畜米英」に立ち向かうというのである。

同20年7月5日には鹿足郡の日原小学校に大国部隊が駐屯した。浜田市内の学校にも分駐した。大国部隊は大黒さまの打出の小槌をマークにした臨時編成の聯隊で、石見海岸から上陸して、大黒部隊師団司令部が置かれた山口をうかがう敵に対する防衛を任務とした。

4節：新しい島根をめざして

●アメリカ軍の進駐

太平洋戦争の終結は昭和20年(1945)8月15日であった。しかし17日から19日までの間、美保海軍航空隊の戦闘機は、松江市上空で「断固抗戦」を呼びかけるビラをまき続けた。連合国軍の進駐は、25日からと新聞は報じた。言論報国会島根連絡部の岡崎功らは、進駐前の24日の早朝に松江で武装蜂起することを決定、46名の青年を集めて皇国義勇軍を結成した。彼らは松江中学の兵器庫から歩兵銃などを奪って武装、県庁に放火し、新聞社や変電所を襲った。松江放送局を占拠して決起趣意書放送の交渉をしている時、駆けつけた警察と松江聯隊の兵士に包囲され、全員が警察に同道するというで事件は決着した。

アメリカ第六軍第十軍団のウイロビー少佐指揮の1個大隊1,000名が、松江、出雲、浜田の三市に進駐した。松江市では進駐軍専用の娯楽場12か所を開設、市内に土産品バザーを開いて歓迎したという。しかし、県民の気持は複雑であった。

簸川郡斐川町の小学校校長は、進駐軍視察に際しての道路清掃の感想を次のように記している。「つい先頃まで、鬼畜米英を撃滅せよと叫んで戦った相手のため、道路を清掃してねぎらいの言葉をかけられる私どもは、残念でたまらなかった」。

●戦後の民主化

連合国司令部が「農地改革についての覚書」を発表したのは、昭和20年11月であった。既に県下では戦前からの農民運動活動家30数名が玉造温泉に集まって協議し、12月に日本農民組合島根県聯合会を再建していた。中央の日農創立大会は21年2月であり、『農地改革の根本的改革を期す』と綱領のなかでうたわれていた。農地改革は21年11月の自作農創設特別措置法、農地調整法改正によって実施されてゆく。

県民から募集した標語では《開放だ、農地の上に陽が昇る》が一等に当選した。二等には、《農地の改革、民主の門出》《目醒めよ農村、やり抜け改革》が当選した。そこには農地改革こそが農民開放であり、農村民主化の道であると考えた当時の意気込みを見ることができる。農地改革の結果、地主は農地を取り上げられて没落し、小作人は農地を取得して自作農となって社会的に進出していったのである。

都市では労働組合と民主団体が職場と地域の民主化を推進していった。各職場には労働組合が結成され、21年11月までに県下で209組合、30,761人が組織化されていた。戦後初のメーデーは、21年5月に松江、木次、江津、浜田、川本、津和野の6会場で開催された。松江会場のメーデースローガンには、戦後の県民生活の当面の諸要求を見ることができる。食糧の不足、ヤミ価格、物価高騰に加えて、住宅難に雇用不安が重なった戦後期の県民生活であったから、何にも増して生活擁護が共通の課題になっていた。このため年末年始にかけて、県下各地では生活養護大会や経済危機突破大会が開かれ、22年2月には全国一斉のゼネラルストライキ突入の山場がつくられてい

た。

このように戦後期に高揚した民主主義運動も同26年のサンフランシスコ講和条約に伴う日米安保体制下では社会党が分裂し、労働組合運動も退潮を余儀なくされてゆくのであった。

●後進性打破の地域開発

昭和31年に長期経済7カ年計画をつくった政府は、財政投融資で産業基盤整備を重点的に進めた。同35年の国民所得倍増計画は、地域別の投資重点を既存の4大工業地帯とその周辺地域とする太平洋沿岸ベルト地帯構想を内容にしていた。それ以降の政府の財政投融資は太平洋沿岸ベルト地帯に重点的に配分され、工業化と都市化を急速に進展させていった。

「裏日本」と言われた日本海沿岸の山陰地方は、投融資配分にあずかることが少なく、表日本に対する地域格差を拡大することになったのである。生産での格差をつくり、所得の格差ももたらし、生活水準での格差も結果していったのである。

島根県では、同36年に10年の計画期間で島根県総合振興計画を策定した。スローガンに掲げられたのは「後進性の打破」であった。拡大する一方の地域格差を縮小するため、県経済の発展と県民福祉の増進を目指して10年後には県民所得を倍増する目標を設定した。そのために第一に果たすべき課題は産業基盤の整備であった。主として交通条件の改善であり、山陰と山陽を結ぶ連絡道路の重点的整備、伯備線と山陰線のスピードアップ、通信網の整備、航空路の開発などであり、国民所得倍増計画が述べていた道路交通を整備することによって「太平洋沿岸ベルト地帯の周辺、近接地域化する途も開かれる」との指摘に沿う取り組みであった。

●過疎化と高齢化のなかで

農業近代化政策は一面では離農促進策であり、そのために農村人口は急減していった。加えてエネルギー政策の転換で、木炭は石油に変えられて、山村の木炭生産は完全に行き詰まって離村が促進された。時あたかも都市と工業地域では労働力を求めていたから、農山村の新規学卒の若者は根こそぎ流出となったのである。

島根県だけでなく全国の農山漁村で起った人口急減は「過疎」と呼ばれる新しい地域問題を提起することとなった。それは、同42年の経済審議会地域部会報告によると…「人口減少のために、一定の生活水準を維持することが困難になった状態」「防災、教育、保健などの地域社会の基礎的條件の維持が困難になり、資産の合理的利用が困難となって、地域の生産機能が著しく低下すること」である。この現実を直視する時、行政による過疎対策を拡充するだけでは、過疎問題は解決しないといわなければならない。上からの過疎対策が、生活関連の公共施設整備に片寄っていて、産業振興に有効な役割をあげることができなかったことにも問題がある。外からの工場誘致だけというのもおかしい。過疎地が農山村であるからには、農林業振興のための特別の施策が必要であった。しかも過疎地の農林業は、生産的機能からだけ見るのではなく、自然環境維持や国土保全の機能も果たしていることを評価したうえで、対策がなされなければならない。

今、過疎地では地域に根差す内発的な村おこしが、各地それぞれの条件に応じて取り組まれている。高齢者たちにしても、福祉の政策対象としてだけでなく、地域社会のために何かを役立てることを願う、高齢者パワーとして活動を始めている。さまざまな意味から条件不利地域といわなければならない過疎地域ではあるが、ふるさとを守る営みが続けられている限り、支援は惜しんではならない。

石見の国読本

〈浜田編〉

浜田の歴史と伝統を学ぶ

1節：古代石見国府時代における浜田の発展と柿本人麿

浜田地域は古代において国府町に石見国庁があり、約470年の間石見地方の政治、文化の中心地であった。大化改新(661～671)に当たり地方制度を改革して、諸国に国司を置き統治させられた時、石見国府は当初は仁万郡仁万町字御門に置かれ、後に那賀郡伊甘郷に移されたという説と、都濃津神主の恵良にしばらくあったが後伊甘郷に移されたという二つの説がある。前者には確証はないが後者には大分確証があるので有力である。いずれにせよ伊甘郷に石見国府が移されたのは確かで、その時期は聖武天皇の頃(724～748)に那賀郡伊甘郷(国府)に移されたとされている。そして石見国守は初代柿本人麿から始まり、66人の国守の名前が判明しているが、最後は高階宗兼の養和元年3月頃(安徳天皇1181年)来任とある。

しかし、平安時代の後期になると中央の威令が行われず、石見国は西に僻在する関係上国守に任ぜられても自ら来任せず、その下僚である介、椽等に統治を委していたものもあった。永久2年(1114)、来任した49代国守藤原定道は、乱れた中央の政治に希望を失い、京師を捨てて勇躍石見に赴任した。彼は長く石見の地に留まり善政を布いて地方の尊信を一身に集めて任満ちても帰京せず、上府御神本の地に土着し、伊甘郷を中心として隠然たる勢力を蓄え、ひそかに新興勢力源平に倣って墾田開拓に専念し、後御神本国兼と改称、豪族化して、名実共に「石見守」となるに至った。4代目御神本兼高は建久3年(1192)、住み慣れた上府の地を去って益田に移り、自ら益田氏と名乗り、その後も暫くの間は国府に通って政治を行っていたが、後年そのことも止んで国府は遂に荒廢に歸した。しかし兼高の子や孫は繁栄して益田氏、三隅氏、福屋氏、周布氏を名乗り、その地方の豪族となって武士団を形成し、浜田、那賀一帯、益田の発展の中心となった。以上で分かるように伊甘郷は約470年の間石見の国府として当地方の政治を行い、政治文化の中心地として発展したのである。

次に伊甘郷の国府庁の跡については、延喜の式内社伊甘神社、国分寺跡、尼寺跡、安国寺等の古蹟、古文書等により現在の下布の伊甘神社付近が有力視されているが、確証ある出土品(国府庁跡)が未だ発掘されていないので今後の課題である。

柿本人麿の在任は、古文書によると慶雲2年(702)から和同2年(709)3月頃までと言われているので、国府が伊甘郷に移る以前にあたるので、人麿の在任国府は都濃津神主の恵良が最も有力である。しかし、人麿の臨終の地は、都に向かって石見国を出る前に「鴨山」とおぼしきところで死んでいる。その死はいまだに自殺か他殺か刑死か不明である。その場所も高津鴨山、浜田城山(鴨山を亀山と改称した)、那賀郡神村、江津市二宮恵良、邑智郡湯抱説と5つの説があるが、浜田の国学者藤井宗雄の流れをくむ栗崎瑞雄氏は「浜田城山」説が最も確証が高いと説いている。

2節：徳川幕政時代248年間・浜田は6万石の城下町として栄えた

古田重治入部：元治5年(1619)2月～慶安元年(1648)6月断絶 2世30年

松平周防守入国：慶安2年(1649)8月～宝歴9年正月転封 5世111年

本田中務大輔入国：宝歴9年(1759)5月～明和6年(1769)正月転封 3世11年

松平周防守再入国：明和6年(1769)11月～天保了年(1836)3月転封 4世67年

松平右近将監入国：天保7年(1836)3月～慶応2年(1866)7月落城 4世31年

以上のとおり松江、津和野藩が長く安定していたのに比べて浜田藩はその交替が激しく、藩政は常に不安定な状態のまま幕末に及んでいる。そして慶応2年7月18日、浜田城消失により古田重治入部以来248年の封建浜田は遂に終わりを告げ新しい時代へと舞台は移るのである。

(1) 古田重治の入部と城下町浜田の誕生

慶長5年(1600)9月、関ヶ原の合戦が徳川方の勝利に帰し、中国一円120万石を領有していた毛利氏が防長2国37万石に減封された後、石見は幕府直轄領となり、天領として奉行大久保長安、竹村丹後守等の支配下に置かれたが、元和5年(1619)2月、古田重治公が伊勢国松坂から5万石余で浜田に転じて、鴨山(亀山)に高さ2丈6尺1寸に及ぶ殿守造りの三層の天主を中心として築城し、浜田に封建の象徴がそびえ、慶応2年(1866)の落城までその威容を誇ることになる。次いで城の周辺に侍屋敷を定め、城下町の経営に乗り出すことになる。

すでにこの地は建長2年(1250)、益田兼時(初代兼高の孫)が、閑院内裏再建のため木材を送り出した港として、室町時代には石見5港の一つとして明、朝鮮との貿易の一翼を担っていたし、中世以来発達していた君市、牛市、小野市などの定期市として集落が形成されていたので、これを基礎として町割が進められた。紺屋町、新町、蛭子町、片庭町、門ヶ辻町、檜物屋町、辻町、原町のいわゆる浜田8町の職人町や商店街が形作られたのである。今も蛭子町、片庭町等に残っているように町の所々に広場を設け、辻井戸を掘るなどして万一の非常の際に備えるなど着々と城下町の経営は進められ、その結果、繁栄の中心は今までの門ヶ辻町から蛭子町へと移っていった。城及び城下町が一応整備されると、重治は兄重勝の子重恒に家督を譲ったが、嗣子がなかったため古田家は2代30年にして断絶した。

(2) 松平周防守の入国と烈女鏡山お初

慶安2年(1649)8月、松平周防守康映が古田家の後を受けて播磨国宍粟より浜田へ転封を命じられたが、関ヶ原後以後50年間に今まで5度も転封されているので、快く思っていなかったようである。浜田に対しては愛着を持ち、前後合わせて178年と徳川幕政下の3分の2の長さにわたって支配したのであり、浜田発展に深い関係を持っていたと言える。

松平家の浜田配置は石見における譜代大名の最初の進出として注目され、中国地方は福山、松江

と共に松平一門、譜代大名として中国地方における大名配置が完了され、徳川幕藩領体制の確立を図った。康映は、家老岡田竹右衛門以下士分159名の外三戸屋、牧野屋、松尾屋、岡野屋、茶屋、東野屋、田原屋、和泉屋など24戸の商家の者を引き連れて入国し本格的な藩政を始めた。所領地は那賀郡60か村、邑智郡35か村、美濃郡は42か村、計137か村に及び、その各々で津和野領、天領と交錯していたのである。藩政の中核となっていたのは農村であったが、武士の経済生活が行き詰ってくるにつれて浦（漁業）が大きな関係を持つようになった。

浦は浜田領全体で28浦を数え、浜田市内に含まれるものに生湯、松原、浜田、熱田、長浜、日脚、津摩があった。寛文2年（1662）、城下の経済発展を図るため、今までの中心商店街蛭子町に続く新町へ商家を移したため、新町に繁栄が移って行くことになったのである。後2代から3代にかけて領内の検地、浜田領絵図の作成をして藩政の基盤づくりを進めるにつれて世情も安定し、人口も増えて城下町も次第に活気を帯び、新しく真光町や錦町等が出来た。4代康豊となった治政下の享保年間（1715～1735）は、全国的に大凶作の続いた時代で百姓一揆が続発しているが、浜田藩でも大ひでりが続き、浜田領一揆を起し首謀者が処分されている。

歌舞伎で有名な「加賀見山事件」もこの時代（1724）。江戸の藩邸で「鏡山お初が、主人である老中岡本道女の仇を打ったため老女沢野を刺し殺した」事件で、赤穂浪士討入からわずか20余年後のことである。これが「女の鑑み」として、主人への忠誠心を高く評価され江戸中に喧伝せられ、遂に「歌舞伎」になり長く世の称揚するところとなったのである。

5代康福は明敏にして幕府の奏者衆に加えられていたが、宝暦9年（1759）、正月寺社奉行を兼ねることになり、同時に江戸に近い下総の古河に移封された。間もなく大坂城代となり三河の岡崎に転じたが、宝暦12年（1762）12月、擢んでられて老中に列したが、浜田の地が忘れがたく、10年先に再び浜田に帰ることになる。

（4）松平周防守の再入国と海商会津八右衛門

明和6年（1769）11月、松平康福は希望が聞き入れられて老中のまま浜田に封ぜられたが、老中のため江戸を離れることが難しいので、養子康定を浜田に置いて政務にあたらせた。当時幕閣の実力者田沼意次と康福は姻戚関係にあったので、天明5年（1785）正月、意次と共に1万石を加増され6万4百石余となり、遂に老中首座まで推されたが、やがて田沼意次が失脚するや天明8年（1788）老中を免ぜられ、江戸を離れて浜田に帰った。こうして浜田藩は再び松平周防守によって4代67年間その治政下に過ごすことになった。

しかし、老中として長年政治的にも活躍した康福も翌年の寛政元年（1789）に没し、その後を養子康定が継いだ。康定は賢明にして好学、特に国学に造詣が深く、本居宣長に教えを乞い、小篠敏をはじめとする数多くの国学の秀才が輩出した。

特に民政には細心の意を用いて領内を巡視し、民情を視察すると共に財政再建のため柿木山に植林をした。文化4年（1807）3月、康定は江戸で死去し、康任が後を継いだ。彼もまた好学、明敏で国学を奨励するほか、民政に意を用い文化7年（1810）の10月の浜田の大火には、藩主は直ちに馬を駆って巡視し罹災者に対して応急の米銭の給与と復興資金の貸与を行った。文化4年（1817）には推されて寺社奉行となり、続いて大阪城代から文政8年（1825）、翌9年には西の丸老中から本丸老中へと康福と同じように栄進の道を歩み続けたほどの藩主であったが、その時常にライバルとして任の後を追って栄進の道を歩んでいたのが水野越前守忠邦であり、この両者の対立確執がついに

周防守家の奥州棚倉への転封の一つの原因として発展するのである。

やがて康任は出石藩の御家騒動に姻戚の故をもって連座し、天保6年(1835)に老中を免ぜられた。嫡子康爵は家督を継ぎ周防守に任ぜられたが、翌7年(1836)3月に奥州棚倉へ転封を命ぜられ、浜田城入替の日限を9月27日に定められた。こうしたあわただしい状態の中にあった周防守家に追い打ちをかけられたのが会津屋八右衛門を中心に行われた密貿易の発覚であった。

(5) 会津屋八右衛門と密貿易

藩の回船御用を務めていた松原の回船問屋会津屋清助は、当時禁止されていた2千5百石積みの巨船を建造し、他の藩をはばかって無名のまま大阪に出航し、世人から「阿呆丸」と呼ばれた。文政2年(1819)の秋、江戸に向けて出航したところ、紀州灘で大暴風雨に遭い何日かを漂流するうちにオランダ船に救助され、ジャワ、スマトラ、ルソンなど、東南アジア各地に寄航したりして、文政5年(1822)漂然としてほとんど裸に近い姿で浜田松原に帰って来た。

清助の漂流談の中には南風が吹くと寒いとか、北風が暖かいなどという話があったので、倅の八右衛門は密航と幕府に咎められてはいけないうので清助を気狂い扱いに藩に届け出た。これを聞いた町の人々は清助もついに気が狂ったらしいと噂した。しかし、八右衛門は父の漂流談を繰り返し聞かされているうちに次第に海外雄飛の念が高まるのを覚え、手探りで粗末な地図を作っているうちに竹島(鬱陵島)を見つけた。八右衛門が密かに密航を企てたのが文政7年(1826)のことであるが、「北風が吹くと暖かい」島の手がかりはつかめなかった。そこで渡辺華山に教えを乞い、研究した結果、「北風が吹くと暖かい」地が確かにあり、父の漂流したスマトラ、カンボジャも明らかになり、そこでまず壮図の手はじめに先に密航した竹島を捉えた。一つには阿呆丸遭難で衰えた家運を盛り返し、併せて窮迫した藩の財政に寄与するためにも、またとない好機と考えたのである。

八右衛門は藩の勘定方橋本三兵衛に竹島渡航のことを打ち明け、家老岡田頼母に通じ、更に家老松平亘の知友である宗氏の臣松村但馬を頼って宗氏の記録を調べ、竹島が無所属であるとして頼母は年寄役の松井図書に相談し、老中として江戸在勤中であった藩主康任に申し出た。康任は重大なこと故十分に調べて申し立てるよう返答し、さらに異国の品が「大阪以東に出回っては大変であるから」許可のないうちに渡航することのないよう戒めた。頼母はこの事を八右衛門に告げて、渡航を断念せしめた。しかし断念せしめたというというのは、あくまで表面的なものであり、「大阪以東」は含みのある言葉であると解釈し、岡田頼母、松井図書、橋本三兵衛らは八右衛門と密議し渡航の決行を話し合った。

その結果、天保初年(1830)の頃から竹島渡航が始まり、次第にその交易範囲は朝鮮、中国からさらに清助の漂流談を実地に確認するかのように台湾、安南、ルソン方面にまで拡大されて珍しい品々が荷揚げされ、八右衛門は巨利を博し藩へも莫大な運用金を納め、藩財政の確立に役立った。当時南洋各地から持ち帰ったと伝えられる品々は、高佐の肥塚家などにも珍藏され、江津、都野津辺の人々もこれに加わったと伝えられている。

しかし、この偉大な構想も僅か数年で露見した。薩摩藩の密貿易を内偵するために、天保7年(1836)の春、山陰道を通った間宮林蔵に感づかれ、その通報を受けた大阪西町奉行の隠密の探索によって摘発され、同年夏、橋本三兵衛と八右衛門が捕えられたからである。三兵衛も八右衛門もすでに覚悟のうえのことであり、三兵衛は妻子を分籍して別家を立てさせ、八右衛門も妻を離縁し、実家の長浜の若松屋に帰らせて子供は大阪へ養子に出していた。

藩主も幕府も極度に狼狽した。浜田では岡田頼母、松井凶書の2人が藩の責を負いそれぞれ自刃して果てたが、その年12月、その他の関係者に対しては幕府からそれぞれ判決が下されたが、三兵衛、八右衛門の2人に対しては死罪が下された。八右衛門は29歳の男盛りであった。元藩主康任も責めを負った。即ち周防守を改めて下野守とし、永蟄居を申し付けられ、時の藩主康爵は元保7年(1836)9月、浜田城を離れ奥州棚倉に移った。

この竹島事件は、ただ単に浜田藩や会津屋八右衛門の悲劇にとどまらず、鎖国のもたらした悲劇の一つであり、当時盛んであったとみられる密貿易も鎖国の壁にさえぎられた国内資本にとって、止むにやまれぬ動きであったというべきであろう。しかし、開国に踏み切ることによって幕藩体制がもろくも瓦解することを恐れていた幕府は、一部の開国論者や知識層の意見に関心を払いながら、翌8年(1837)2月21日に「浜田藩、無宿八右衛門の竹島渡航は吟味の上厳罰に処したので、今後異国渡航の儀は重き御制禁に付き竹島は勿論のこと遠洋渡海は致さないように」という触書を、全国高札場に掛け鎖国の再認識を行わせている。

(6) 海商一代と「海に生きる浜田」

八右衛門のこの壮挙が浜田に与えた心理的影響は大きいものがあることは、後世浜田を論ずるときに忘れてはならないことである。「港浜田」「対岸貿易浜田」は、天保初年(1830)に、雄々しく発足しているのである。そして僅か数年間であったが、この雄大な海上交易が浜田城下の商業経営に大きな刺激を与えたことも見逃してはならない。昭和11年12月、海商八右衛門の壮挙を讃えるため、松原鱒山の突端に時の内閣総理大臣、海軍大将岡田啓介の揮毫により記念碑が建立されている。そして碑文の中に「偉なる哉八右」「導け八右」「あやかれ後世」と記されていることは余り記憶にないだろう。浜田の民謡にも「海商一代」として、心ある人に歌われているその一節を紹介する。

「海商一代」

- (1) 揺らぐ灯明にかしわ手打てば
あすは船出の血がさわぐ
海の勝負にいのちをかけた
姓は会津屋名は八右衛門
親爺ゆずりの男の男
- (2) 移る時代の夜明けを待たず
落ちて消えゆく流れ星
藩の御用を世の人のため
かおるその名は花たちばなど
今も浜田の松原岬

(7) 松平右近将監の入国と城下町浜田

松平周防守康爵転封の後を受けて、徳川の親藩大名である松平右近将監齊厚が上州館林6万石より浜田に所替を命ぜられ、正式に城の受け渡しが終わったのは天保7年(1836)9月27日である。右近将監の家は6代将軍家宣の弟松平清武に始まり、齊厚の祖父武元は松平周防守康福と共に幕閣に列し、老中として30年の長い間在任した家柄である。

当時右近将監家の重臣達は、財政的にも海のない館林よりも海に臨む浜田への移封を実質的に加

増であると喜んでいましたが、その反面、斉厚は山陰という僻遠の地より山陽の福山への移封を望んでおり、養嗣斉良が將軍家斉の19子なのを頼りに江戸大奥へ嘆願していたが成功しなかった。しかし浜田藩も取返して禁を破ってまで海外貿易をするくらいであり、決して他所目で見ると程財政は楽ではなかった。

当時浜田は飢饉に喘ぎ、多数の餓死を出し、一刻も放任出来ない状態であったので、その対策として備荒貯蓄を考え天保8年(1837)9月、社倉を設けて「永康倉」と命名し、扁額を作って各蔵々に掲げさせ、備蓄米の徹底を奨励した。斉厚にはひとつの願いがあった。それは「右近将監」の家格を上げたかったのである。そのため巨額の運動費はいるし、その上転封のときの莫大な費用が残っていたので、藩は山積する負債に苦しみ、遂に無加印の銀札を濫発するに至り、藩の信用度を失墜し、政情も不安定であった。

望みをかけていた養子斉良は夭折するし、斉厚自身も天保10年(1839)若死する。その後讃岐高松藩から迎えられた武揚も、次いで尾張藩の支封高須から入って藩主となった武成も共に政道に励み、仁政を布くために日夜努力したが何れも短命に終わり、藩の財政はますます苦しくなるばかりだった。そこで家老安芸織部真利は銀札掛河鱈監物らと相謀り、当時実学派として名高い肥後の横井小楠に教えを乞い、弘化3年(1846)、産業資金調達のため浅井村庄屋河上甚九郎ら4名を京都、大阪に派遣し金策に当たさせたが、情勢は厳しく主命を果たせなかったため河上甚九郎はその責めを負い自刃した。そのことが洛中に広がったため、「石州人の義理固さ」に感じた知恩院らの金策に成功し、ひとまず急場をしのいだ。

武成は弘化4年(1847)9月、23歳で亡くなったので藩は喪を秘して水戸藩主徳川斉昭の10男で15代將軍慶喜の弟であり、武成の従兄弟でもある当時6歳の十郎磨(後13歳で元服し武聡となる)を、同年12月養子に迎えた。武聡は父水戸烈公に似て真摯でありその志は水戸学統によって固く、藩政は武聡が幼少だったため、主として政務は家老の織部真利、財政は銀札掛の河鱈監物が当たった。当時の藩の政務は財政問題であると言ってもよく、河鱈監物に重い責任がかかる。2人はかつて斉厚が考えていた経済両面政策を練り直し、積極的には産業を盛んにして藩利を増し、消極的には緊縮政策を励行して質素を旨とし、節約を徹底する途を講じ、武聡を迎えて本格的に財政再建の施策を進めることにした。

産業振興の主なものは植林、石見半紙の奨励、鉄山の開発などが挙げられる。植林について見ると柿木山、大麻山をはじめ、山林の大規模な植林を積極的に奨励し、匹見の自然林を活用するため道路の改修や舟運の便を図っている。石見半紙(椿半紙)の主産地は美濃、鹿足郡一円と那賀郡東部の山間部で、大阪に紙問屋を開くなど石見半紙の発展に寄与すること大であった。領内で板紙生産は年2万石、盛んな時は5万石に及び、「浜田藩の禄高は6万石だが実際は10万石ぐらい」と世間から噂された。

鉄山の開発については主として砂鉄であるが、邑智郡においては良質なものがたくさん採取され、浜田でも美川一帯で山小鉄、日脚、津摩では浜小鉄がとれ、盛んに製鉄を行ない経済的に藩の財政を温かくした。その他畳表、陶器及び瓦、櫛の植林と蠶製造等をその他に応じて奨めた。全般的には養蚕も大いに奨励した。

こうした一連の藩財政難克服の諸施策を推奨すると共に、数度にわたって質素節約の励行のため儉約会を発し、矢継ぎ早に触書を出したが実効は上らなかった。藩の首脳は憤りと焦慮のあげく、自らを戒めるため役向きへの音物、饗応を戒め、冠婚葬祭の節約等微細を極めた節約書付けまで出し

ているが、効き目がなかった。藩は民心の離反と財政危機に立ってどうにもならないところにまで立ち至っていた。その上、藩主武聡は安政元年(1854)、13歳で元服したが、もともと病弱で文久元年(1861)、20歳を最後に参勤交代も出来なかったようで、21歳の時、佐倉藩堀田家より婦人を娶ったが、そのころ京では尊王援奏派三条実美らの七郷落ち、蛤御門における幕府と長州藩の戦いは始まっており、すでに明治維新の息吹が見られていたのである。

(8) 城下町浜田の終焉

長州藩追討の朝命を受けた幕府は、元治元年(1864)7月24日石州口より萩、山口を攻撃する追討軍として浜田、松江、鳥取藩等を定めたが、長州藩の3家老が自刃、藩主が謝罪をしたので一旦は撤兵を命じた。しかし長州藩内ではその後高杉晋作を中心とする主戦派がこれに抵抗し、紛争が続いたが遂に勝って主戦派に統一されたので、幕府は再び追討軍に出兵を命じた。今度は各藩とも消極的であり、特に尾州、紀州、薩摩、備前等の雄藩はこぞって再征に反対した。こうした情勢の中で、幕府は長州征伐を強行することに意を決し、石州口は福山藩を主力として浜田、松江、鳥取、津和野藩が加わり、紀州藩徳川茂承が総指揮の下に攻撃態勢を整えることになった。しかし浜田藩主松平武聡の心は揺れた。長兄は15代将軍慶喜であり、次兄である鳥取藩主、岡山藩主は共に長州軍の再征に反対していたからであった。

浜田藩は命により慶応2年(1866)5月、物頭岸静江を藩境扇原関門の守備を命じた。一方、長州藩高杉晋作を中心とする主戦派は薩長同盟を結び兵備を整え、石州口の総指揮は村田蔵六(後の大村益次郎)が執り、奇兵隊を先頭に第2次征長の戦端は切って落とされた。6月になると福山藩が続々と浜田、益田に到着し、その動きは日々にあわただしさを加えてきた。石州口では16日になって長州軍の主力部隊が高津川を渡り、横田村に達し、浜田藩主に対して書を送り出師の理由を明らかにした。

申入れの内容は丁重で、浜田藩をあくまで壊滅することは考えていなかったようである。長州軍は更に兵を進め、藩境に迫り関門を突破しようとしたが、関守岸静江は応戦し、壮烈な戦死を遂げ後世に名を残した。その後の石州口付近の戦況は幕府の連合軍に利なく、足並みが揃わず多数の死傷者を出し、幕府軍の大敗に終わった。幕府軍は長浜熱田まで退却したため、城下は大混乱になり、人々は戦争の恐怖におののいた。

長州軍はこの間再三にわたって浜田藩に書を送り再考を促したが、藩主武聡は長い間病床にあり、藩の去就はなかなか決せず徒らに日々を送った。7月に入り長州軍は再び行動を開始し、13日から16日にかけて大麻山、雲雀山の攻防をはじめ、美川の内村、内田一円で砲戦が続き浜田城下までとどろいた。人々は動揺して生気なし、特に16日の長州軍の攻撃は激しく、紀州兵、福山兵は浮き足立って崩れ去った。事態がいよいよ急を告げたので重臣達は密かに停戦の申込みを協議し、17日、河鱈監物が潜行して、周防の長軍本陣(大谷庸介氏宅)に行き停戦の申込みをした結果、長軍はその折衝に応じて一応停戦した。監物は長州軍の城下町通行について折衝したが、なかなか意見がまとまらず時間を要した。一方、城中においても17日、城の運命を決める最後の会議が重臣数名で秘かに開かれた。病中の武聡は夫人と共に出席し、席上藩主夫人は武聡と共に城を枕に死守することを主張した。用人生田精は病主や夫人と共に籠城しても戦闘の決意が鈍る故、藩主を城外に移して後に守城決戦すべきであることを唱えて衆論をまとめた。

武聡も夫人も涙を流してこの練言に納得し、その日の夕方密かに城を出て、松原湾を離れたのは

18日の夜明けに近かったという。7月17日のこの会議は、封建浜田に制度上の終りを告げるための最後の歴史的会議になったわけで、武聡25歳であった。

守城決戦と決まって改めて具体策を練るための会議が18日開かれたが、藩主退城のことが薄々知れると議論が沸騰し、他藩の協力なく籠城は無謀な戦いであるとの和戦論が強くなり、衆議は一転して「城と侍屋敷を焼いて一同浜田を去りやがて再起をはかる」ということに決まった。それからの混乱、一抹の寂しさが浜田を覆う。誰れが火をつけたか突然、天主が黒煙を上げ始めた。浜田城焼失は18日午後2時とも、4時過ぎとも言われているが、元和5年(1619)吉田重治が築いた亀山城も炎上し、248年間続いた城下町の終りを告げたのであり、余りにも悲惨な出来事であった。

浜田町誌によれば藩主武聡は松原湾を離れる時、舟の中で藩民の身を思い「病中の自分を斬って首を海中に投げ棄てよ」と言って聞かなかったと記されているが、水戸烈公の血を引いた武聡公のためにもっと変わった敗戦処理はなかったものかと惜しまれる。

作州鶴田に移った浜田藩士の「浜田会」須藤さんの発行による「浜田藩雑記」によると、7月18日城が炎上した頃浜田藩齋藤十郎次が長州軍の和平解決の回答書を携えて、長浜村福井浜付近を浜田に向かって急いでいたことが記しており、浜田城炎上がもう1時間でも遅れていれば、浜田の運命も変わった方向になっていただろう。誰が火を付けたか、命じたか分からないが、後世浜田のために残念でならない。

慶応4年(1868)1月2日の鳥羽伏見の戦いは、上野彰義隊と共に幕府最後の抵抗であったが、激戦の未遂に幕府軍は敗退し、新政府軍の勝利は決定的となった。この戦いには浜田藩も隊長佐藤鎮太郎以下50名参加したが、これは藩を貧困のどん底から救い出し、名門松平右近将監家を復興、更正しようとする最後の非常手段でもあった。城代家老尾関隼人が責任を追って自決したので、朝廷から特別の計らいで作州の地鶴田2万7千石余りが与えられた。現在作州鶴田に浜田藩士関係者により「浜田会」が設立され、会誌を発行し、浜田藩雑記を編さんするなど旧君臣の情誼を伝え、浜田市との交流が行われている。

3節：浜田藩落城から浜田県誕生まで

(1) 長州軍預り時代(慶応2年～明治2年)=4年間

慶応2年(1866)7月19日(落城の翌日)、南国隊長佐々木力也らは浜田に入り「長州支配」を宣言する。当時、幕府は石州口の大敗で全く威信を失い、翌3年10月、將軍慶喜(武聡の兄)は大政を奉還し、徳川300年の幕を閉じて新しい明治を迎え(慶応4年9月明治と改元)、天皇新政の統一的改革が始まった。これから明治2年(1869)8月までが長州預り時代の4年間であり、浜田にとってはその精神的意義が極めて重大であった。その一つは「落城」という思いがけないことで、全国のどの藩よりも一足早く封建から解放された点である。しかも、突如として混迷の裡に封建の支配力がなくなったので、「藩民の苦闘の結果でもなければ、期待していたことでもなかった」。もう一つは「落城の後に長州軍という別の支配力が入って占領下におかれたため、自主性のない浜田が生まれたことになる」。この2つの点は後の浜田の動きをたどるうえで見逃してはならない点である。

浜田に入った長軍は、石見においても旧天領の大森と浜田藩を合わせて支配し、浜田に民政官をおいた。初めは民衆に対しては「寛恕収攬」を旨としたが、落城の翌8月に西原井組のものが長州軍に要求を差し出すことで長州軍との間にトラブルが起き、それが大騒動となり、民衆が黒川中芝酒

屋付近に集まったため、長州軍は遂に発砲して鎮圧する事件があったためその後は警戒するようになった。後黒川村が落城により焼野原となり、無秩序になった浜田の状態を見ていち早く立ち上がり、焦土復興と秩序維持に乗り出したので、長州の民政所がこれを褒めて柿木山の一部を黒川村に与えたのもこの時代であった。

明治2年(1869)5月になって長州人佐藤寛作(後信寛と改める)が民政官として浜田に赴任した。その年の秋は凶作であったため、8月長州預かりを解き大森県とすることに定められたにもかかわらず、10月、長州軍が浜田を引き揚げるまで彼は凶作対策に努力した。そして本格的な凶作対策は大森県に移されることになった。

(2) 浜田県の誕生と新生浜田の息吹

明治2年(1869)8月、大森県が置かれ、隠岐が管轄に入った。本庁を大森町、浜田と西郷には支庁が設けられ、ここに新しい政治が始まった。翌年1月になると大森県を廃して浜田県が生まれる(県庁は現郵便局のところ)。所管はそのままで本庁が大森から浜田に移り、県名が変わっただけである。県知事は大森県以来の真木直人が任ぜられ、県会として佐藤信寛(民政官佐藤寛作が改名して信寛となる)が任ぜられ、明治9年まで在職、県の統治に専念することになる。浜田県になり、本庁が浜田に転じて数カ月後に異動が起った。世に前田騒動と言われている。

◇前田騒動とは

浜田藩は突如侍社会が壊滅して残された武士は失業し虚脱状態になった。中には新政治への不満を抱いているものが多数いたが、民衆にも新政府のやり方が朝令暮改で頼りなく思われていた。浜田は、敗戦による自暴自棄に加えて凶作に襲われて民心が動揺していたので、これらのことが原因となり前田騒動となったのである。

首謀者は前田誠一という浪人で浜田の宿屋に宿泊中、県庁から危険人物と見なされ早刻立ち退きを命じられたが、病気のため出立することが出来なかった。ところが1月13日晚、突然早鐘が鳴り出したので火事と思い、大勢の野次馬が飛び出して見ると、前田誠一が大橋の裾に立ち上がって新政府の不当と官憲の横暴を叫んで演説を始め、遂に同志、町民と共に県庁を襲撃し占拠した事件である。江津に難を逃れた真木県知事は、態勢を整え反撃して県庁を奪回し、首謀者前田は自殺してこの騒動は収まった。前後に大田付近や益田でも暴動が起きている。

この前田騒動は仮令一浪人の暴挙とは言え、固く結ばれた同志と町民を連れていたことは、新政に対する単なる反抗ではなく相当な強さを持っていた。浜田県政の今後は楽観を許さないものがあつたことは見逃してはならない。県庁では直ちに凶作による窮民救済に乗り出し、救援米の下げ渡しなどを行ったため人心も落ち着いて来た。

全国的な廃藩置県は明治4年(1871)7月14日を期して断行されたが、明治維新の直轄地(長州軍預かり)であった浜田県は、この廃藩置県に先立って出来たもので、新しい地方行政のモデルであり、県庁は新しい政治体制にかなう執行機構を定めるのに特に苦労したようだ。津和野藩は、全国的な廃藩置県に1月余り先立って明治4年6月25日に浜田県に合併され、同時に隠岐は島根県に所管換えになり、浜田県は元津和野藩庁の建物を解体、浜田に移築して新しい浜田県庁舎が完成した。

浜田県権令には佐藤信寛が県令より昇任せられたが、その後何回も機構改革を行なって県制の体制を整備するとともに、藩政時代より奨励していた石見半紙の生産を中心に産業の振興を促し、また

他に先駆けて会議を起し、民衆を民主的に行動させるため、明治5年(1872)浜田県民会議を設立して議員を選任し民意尊重の途を開いた。末端行政機構として大区、小区の行政区を設け、大区に正副区長、小区に正副戸長をおき、のち郡役所、大区、部を設けるなど浜田県独自の行政改革を行って、人心の収攬と民政の安定、産業の復興などに努力した。

明治維新は大きく日本の社会を変ぼうさせ、浜田にもその影響が現れた。明治5年から小学校・師範学校の開設、浜田新聞の発行、浜田警察署、郵便局、病院の設置があり、新町、紺屋町、蛭子町等には商店街が形成されたのである。

浜田県は明治9年(1876)4月、島根県に合併され浜田に支庁がおかれた。このような状況の中、新しい政治と文化が逐次滲透して浜田の動きが軌道に乗って来る。しかし、浜田人が新時代として政治的にも経済的にも自覚したのは明治10年～12年、三菱汽船から大阪商船が浜田港(瀬戸ヶ島)に寄航し始め、明治28年(1895)、浜田港が特別輸出港に指定されて神戸税関出張所が設置され、次いで同32年(1899)、開港に指定されたところであった。これが契機となって視野が拡大し「海と浜田」のつながりが多方面に成り立つようになり、かつて港が繁栄を極めた古き時代(周防家時代及び八右衛門)が甦り、文化的にも伸張を見せる。

この機運を更に高めたのが明治31年の浜田歩兵第21連隊の広島からの移転であり、大正時代の国鉄山陰線の全通である。これにより、浜田の海陸による交通開発への関心が政治的にも経済的にも高まり、やがて大浜田市の実現を促す精神的基盤となる。

4節：浜田歩兵第21連隊あり、全国に勇名をはせた(明治31～昭和20)

明治31年(1898)、国防上の必要から浜田に歩兵第21連隊が広島から移転することになった。当時、浜田港(瀬戸ヶ島)は明治32年、貿易港として指定を受け、神戸税関出張所が設置されて大阪商船の寄港地として港界隈は活気を呈していたが、それに加えて連隊が移転したため、広島～浜田間の建設道路工事をはじめ、兵舎、練兵場、射撃場、衛生病院その他の施設や建築工事が急ピッチで進められて、浜田は連隊ブームに沸き返った。浜田の街は浜田城の落城後30余年振りに生氣を取り戻したような感があった。爾来、朝日町一帯が商店街として繁栄を見るようになった。

浜田連隊の徴兵区域は石見全域のほか簸川郡、飯石郡で戦争末期一時松江地区も浜田連隊に入隊する時期があったが、そのため面会日は家族達の往来で浜田の街は特に賑わった。

移駐以来、北清事変、日露戦争、満州事変、支那事変、第二次世界大戦に参戦し、その間数多くの戦死傷者等を出しながら、全国に「浜田連隊」の勇名をとどろかせたのである。日清戦役における勇敢なるラッパ手木口小平の銅像や、第二次戦争中軍歌で「浜田の兵隊、戦(行軍)に強い、強いはずだよ波子の浜、波子の浜辺で鍛えた腕(足)だもの」を、三瓶行軍の途中歌い、士気を鼓舞したことも昔の夢物語りになった。

昭和20年(1945)8月15日(1945)終戦となり、セラム島の「ホニテ」において、8月25日の軍旗拝授記念日の日の最後の連隊長佐々木慶雄大佐により、軍旗を焼き光栄ある浜田歩兵第21連隊は遂に終りを告げたのである。第21連隊は広島から浜田に移駐以来約半世紀(47年間)にわたって浜田の経済を潤し、連隊があるが故に石見地方の中心地として政治、経済の面で力をつけ、街を賑わしたが、連隊が無くなったことにより朝日町商店街をはじめ淋しくなっていた。

5節：水産基地として、政治・経済・文化の中心地として栄えた

(1) 浜田港と大陸との交易

明の史書に石見は銀と銅を産する（大森銀山のことを指している）、石見の港には長浜、浜田などのあることを記している。また朝鮮の申叔舟という人の著した書には素晴らしいことが記してある。室町中期（1447）に石見の豪族周布和兼が朝鮮の李朝と貿易をしていたことで、今から約537年前のことである。緒口は朝鮮の海岸船舶が日本海で難破し、乗組員が流れ着いたのが石州長浜で、周布家はこれらをねんごろに取り扱い1か月滞在して元気を回復、朝鮮へ帰るとき和兼の父兼貞は書を李朝世宗に呈するとともに刀、舟木朱紅、胡椒、面盤などたくさんの土産品を贈っている。

これに対し世宗は謝意を表して翌年大護軍を遣遣し、日本の漂民左衛門三郎、蔭次郎を送還して様々な礼物を届けて来た。そのお礼として周布家から色々な物を送ると、世宗はまたお礼返しに珍しい物を贈ってくるというふうに、爾来双方の交歓が始まったのである。世宗実録によると、貿易船は天然の良港・長浜湾から出発することと記してある所からも、当時私貿易が活発に行われ、長浜湾頭が活況を呈したことは十分に考えられ、主なる輸出品は長浜の刀剣で輸入品は織物類、人参、珍材、陶器等であったようだ。

約380年余経って天保初年（1829）、会津屋八右衛門が松原湾を基地として、竹島、朝鮮、中国等と密貿易を始めたことになるが、その後徳川の鎖国時代が終わって明治32年になり、ようやく浜田港（瀬戸ヶ島）が正式に開港場となり、神戸税関浜田支署が設置された。そして、内国航路大阪商船の寄港をはじめ、明治35年（1902）からは朝鮮、浦塩航路の浜田寄港が始まり、同44年、浜田港修築5ヵ年計画で整備を進め、大正7年（1918）になって対朝鮮貿易の実績も伸展したので、対岸貿易期成同盟会を結成して基地拡大を計画した。その後港勢も一進一退を辿り、加えて港湾設備の貧弱さと後背地の立地に恵まれないため、貿易発展に踏み切れなかった。

大正10年（1921）、浜田駅が営業開始になり、やがて国鉄山陰線開通とともに、商港としての浜田港も急速に衰え大阪商船も廃船になった。浜田が天然の良港を持ちながら、「海に生きる」ためには商港の大型整備と恵まれた後背地を作り、商港の抜本的発展策を講ずることと合わせて、水産基地としての施設整備と漁業の発展をはかる以外に道はない。当時、日本は支那事変から第二次世界大戦へ拡大の一途を辿り、国防の見地から昭和17年（1942）から長浜地区に港の修築工事が始まったが終戦となり、同24年、開港閉鎖の寸前に陥ったが、その苦難を切り抜け、同32年（1957）、遂に猛運動の末「重要港湾」の指定を受け今日に至る。

(2) 浜田漁港は明治以後漸次水産基地として脚光を浴びる

吉野朝時代（1334）には瀬戸ヶ島が漁場であったと伝えられているように、浜田の漁業は古くから瀬戸ヶ島、浜田浦、松原を中心に行われていたが、せっかくの天然の良港と漁場を持ちながら、技術と施設が乏しかったので長い間小さな漁村に過ぎなかった。明治39年（1906）になって県立水産学校が設立され、大正、昭和となって水産試験場や水産補修学校が建設され、その上近海に好漁場を控えているという立地条件に恵まれていたので、水産業も発達し着目されるようになった。何ととっても昭和7年（1932）、浜田漁港修築工事が完成し、施設整備がなされてから、漁業基地として脚光を浴びるようになったと言えよう。

遠洋漁業の進歩と共に大型底曳船が多数建造され、さらに出雲船団等が昭和8年ごろにかけて大挙浜田に進出して、この地を根拠地として活動を開始したので水産業は一大飛躍を遂げた。しかし、

その後大型底曳船の大部分は第二次世界大戦による徴用で海底の藻屑となり、漁業は衰微した。戦後漁民の増産意欲によって資金資材など困難な隘路を開いて、代船建造を強力に推進したので漁獲高は増加の一途を辿り、昭和22年130万貫、23年250万貫、24年300万貫という戦前に劣らぬ活況を取り戻した。同年第三種漁港の指定を受けて、25年9月には浜田漁港を基地とする大型底曳船団は25統に達し、毎月の平均45万貫（年540万貫）へと躍進し、33年には22年の16倍にも飛躍的に増加したので、施設整備の必要に迫られ、荷揚場、魚市場の拡張、臨港貨物線の延長、製氷施設の整備、無線局の設置等、漁港施設整備をするにつれて、県外船も浜田に集結するようになり、漁港は活気を呈し、併せて缶詰、かまぼこ、干魚等の水産加工業の振興により、「水産浜田」の名はいやが上にも高くなり、昭和44年（1969）に「特三漁港」の指定を受け今日に至る。

（3）廃藩置県以来、実質的に石見地方の政治、経済、文化の中心地として栄えた

浜田は明治4年の廃藩置県により石見全域を行政区域とする浜田県の県庁の所在地として、産業の振興と小学校、警察署、郵便局、銀行などの整備により商店街も出来、次第に石見の中心的立場が固められた。明治9年浜田県を廃し、島根県に合併後、浜田支庁、郡役所が置かれ、石見の中心地として裁判所、税務署、県立中学校、女学校、水産学校などが設置され、浜田港の開港、歩兵第21連隊の移駐があり、大正、昭和にかけて山陰線の開通、県立女子師範学校、市立実践女学校、水産試験場の設置を見て、浜田は名実共に石見の政治、経済、文化の中心地として活気を呈した。浜田人の心の中には落城から長州軍預かりという混乱期の中で、政治的、文化的な活動への憧れがあり、経済的に傑出したいという希望があったので、その表れとして明治、大正、昭和の時代にかけて数多くの人材が傑出した。

明治	国学者	藤井宗雄（浜田市鍋石出身）
明治～大正	文芸評論家（演劇活動）	島村抱月（金城町出身裁判所勤務）
大正～昭和	政治家（商工大臣）	俵孫一（浜田市真光町）
昭和	文化勲章（冶金学者）	俵国一（浜田市真光町）
昭和	政治家（文部大臣）	大達茂雄（浜田市真光町）
昭和	水産功労者	丸川久俊（浜田市錦町）
昭和	文化勲章	橋本明治（浜田市田町）

『浜田藩追懐の碑』の建立

1：建立のいきさつ

浜田藩の碑と言える石碑の現在地を見ると、藩庁所在地である浜田には城主歴代碑のみで、殉難者あるいは藩に事績のあった人の碑はない。これは浜田藩の地が長州軍の侵入、不法占拠の後長州の預り地となり、大森県・浜田県成立後も長州閥に支配され、明治も中期から連隊の駐屯する所となり薩長藩閥の締め付けのひどい地域となっていた。浜田の旧藩士をして長州征伐時の殉難者を顕彰したい考えがなかったわけではないが、やはり浜田藩を語るに大きな声が出せなかったのも事実である。最近になって藩所在地浜田に藩の碑がないのはおかしい、建てられて然るべしとする考えが起きてきた。

(中略)

碑建立の動きを一つの行動に移されたのは土井博氏である。浜田藩の碑建立の議は観光協会役員で賛同を得、市長及議員筋等にも賛同を得ることができた。土井氏の発議された趣意は「いまEQ ¥* jc2 ¥* "Font:M S 明朝 " ¥* hps10 ¥o¥ad(¥s¥up 9(ここ), 茲) に明治以来 120 余年の歲月の流れる中に、浜田藩政を偲び、先人を思慕し、浜田市の礎となられた方々を顕彰したい」とされ、対象として長州征伐、伏見の役、江戸上野の役の戦死者を考えておられた。

(中略)

碑の中央を飾る撰文はく司馬遼太郎氏に依頼することになった。

(中略)

司馬氏は歴史小説家として当代随一の人である。浜田との繋がりは『花神』のときで、この地にも何度か来られている。あげて頂いている誼もある。

(後略)

2：建立時の広報

さる平成元年(1989)9月、浜田城山の浜田護国神社本殿北側に「浜田藩追懐の碑」が建立された。その碑文は歴史小説作家として著名な司馬遼太郎氏の執筆である。

(中略)

司馬遼太郎氏は、NHKの大河ドラマになった著作(花神)の中で第二次長州征伐(石州口の戦い)を記述されており浜田の歴史にも詳しく、碑文の原稿は、司馬氏の石見の風土や石見人への思いが偲ばれる貴重な資料であり、この度公開するものです。

(後略)

「浜田藩追懐の碑文」

<p>石見国は、山多く、岩骨が海に ちらばり、岩根に白波がだぎって いる。 石見人はよく自然に耐え、頼る べきは、おのれの剛毅と質朴と、 たがいに對する情のみという暮ら しをつづけてきた。 石見人は誇りたかく、その誇る べき根拠は、ただ石見人であるこ となのである。 東に水田のゆたかな出雲があり、 南に商人と貨財がゆきかう山陽道 があり、西方には長門・周防があ って、古策策謀がそだち、大勢力 の成立する地だった。 石見はそれらにかこまれ、ある 者は山を耕やし、ある者は砂鉄や 銀を探り、或る者は荒海に漕ぎ出 して漁をして、いつの世も倦むこ とがなかった。 浜田の地に城と城下がつくられ たのは、江戸初期であった。幕府</p>	<p>浜 田 城</p>	<p>は、この城をもって、毛利氏とい う外様藩に對するいわば最前線の 牙城とした。 以後、藩主は十八代を経、城は 二百四十八年つづいた。幕末、西 方の長州藩が革命化して、幕府の 規制から離れた。 長州軍は時のいきおいを得、ま た火力と軍制を一新させ、各地で 幕軍を破った。 ついには浜田城下に押しよせた。 浜田藩は和戦についての衆議がま とまらず、さらには二十五歳の藩 主松平武聡は病臥中であって、 曲折のすえ、みずから城を焼いて しりぞいた。明治維新に先立つ二 年前の慶応二年(一八六六)のこ とである。 いま、城あとは苔と草木と石垣 のみである。それらに積もる風霜 こそ歴史の記念碑といっている。</p>
--	----------------------	--

司馬 遼 太郎

石見の国読本

〈益田編〉

益田の歴史と伝統を学ぶ

1 節：先史時代

●時代の概観

日本に国家が成立したのは今から千数百年前のことで、それより以前の数千年間は、原始的な生活がささやかに行われていた。当時原始的な挙動の中で、後世の基礎を形づけたものは少なくはない。社会が発展した経路を正しく掴むためには、原始人の生活を回顧してみる必要がある。

わが国の原始的な社会では農耕作業はまだ発生しないで、狩猟と漁労で生活するという低い文化の状態が長い間続けられていたが、やがて紀元前2～3世紀のころから農業生活が始まると、急速に大変革が起こり、ついに国家生活へと向かっていった。

このころの益田市は、そのあけぼのを物語る黎明時代であり、さきに安富の王子台から縄文式と弥生式の古土器を発掘したことで、時代の古さが知られる。次いで木部の井元、高津の吹上げ、旧日赤病院付近からも弥生式の土器を発掘している。これらの発掘事実から、この当時の安富族や井元族、高津・乙吉族の生活状態が大よそ理解されてきている。

●県内及び益田市の遺跡

県内の弥生式遺物の発見で、単独に出土した地点は百か所ほどあり、今後もそれが増えるだろうと想像される。安富の王子台は縄文式遺跡だが、弥生式の前期及び中期の土器も出土している。これは前述のように高津川流域の相当広い沖積地の遺跡として注目される。

弥生文化はまず西日本に始まり、東北へと広がるが、その発生は九州と考えられている。島根県下で弥生土器が発見された所は60数か所に及び、そのうち石見国内でこの前期の土器を出土した所は、仁摩郡仁万、益田市安富、木部及び乙吉である。これらの遺跡の中に簡単な木製農具もあり、その発見地が稲作のできそうな低湿地や海岸であったことが注目されている。

2 節：上古

●時代の概観

紀元前3世紀ごろから出現した弥生文化では大陸から金属器が伝来したが、住民生活に活かされるほどではなかった。農業が始まってから社会の内部に支配関係が生まれ、各地に小国群が続出した。やがて3世紀ともなると多くの小国を従えた邪馬台国が出現し、やがて4世紀の初めごろまでに大和朝廷によって国土が統一され、国家が誕生した。

しかし、この朝廷の支配勢力はそれほど強いものではなく、地方の豪族は従来通り、それぞれの地方を支配したまま朝廷に従属するに過ぎなかった。このような状態は7世紀半ばまで続き、豪族たちの生活や文化は急に向上して、壮大な古墳を残したので、この3～4世紀から7世紀にわたる時代を古墳時代とも呼んでいる。

●県内及び益田市の遺跡

この時代の益田市では鶴ノ鼻、片山、蔵ノ溢、長迫の地から須恵器を蔵する古墳群が発見されており、中でも久城の須久茂塚と乙吉の小丸山の両古墳は、世に知られた前方後円墳である。この時期、小野族が小野に移住し、春日族が益田染羽に留まり、櫛代族が久城の丘陵を本拠に時代とともに奥部へも移住し、ついには益田市や美濃郡に広がる時代である。

今日の石勝神社は春日族の、櫛代賀姫神社は櫛代族の、小野天ノ多祁阿豆委居命神社は小野族の、それぞれの祖神を祀った社である。豪族達は各々が移住をし、地方の開拓に従事し古墳を残した。

それらは石西文化の源流をも示している。なお安曇族は海岸部に移住して漁業に従事した。またこの期に益田三宅には官庫である屯倉が設けられた。首つまり稲置が長としてこれを管理していたもので、三宅は久城や染羽に次ぐ古い文化を物語っている。

3節：古代（白鳳・飛鳥時代）

●時代の概観

7世紀の中ごろ、わが国では大化の改新が行われ、中央の豪族は隋唐の律令制度を模範とする中央集権国家を実現することに成功した。この国家は古代国家の初期の段階である大和國家に比べると全国の農民を直接統治する、より強力な国家であった。ここに天皇を中核とする古代國家が確立し、中央豪族は貴族と呼ばれるにふさわしいものとなった。

しかし、この律令制度を実施するとなると農民の負担はますます過重になり、意外にも早くその基礎がぐらつき始めた。また、8世紀の半ばには公地公民に反した有力者による土地の私有が起き始め、やがて都が平城京から平安京に遷り、9世紀に入ると次第に私有地が一般化し、荘園制度が急激に発達していった。しかし、律令の國家が保たれた期間は比較的短かったものの國家力が集中発揮されたという点では、目的は一応達成されたと言える。と同時に、貴族の活発な活動が展開され、華やかな天平文化が誕生した。

●当地の概観

都から遠く隔たった益田でも次第に文化の兆しが見え始め、大化の改新を経て、奈良朝から平安朝にかけいよいよ平原部に文化の波が及んだ。中でも吉田平野の全域にわたる開拓の歩みは著しく進展した。大化の改新により公地公民の建て前から屯倉の御料田は廃止され、班田収授の法に従って、もとの屯倉の地を中心に条里制が布かれた。藤原宮時代に上遠田の坂ノ上並良は並良堤を築造し、灌漑の便をよくして遠田の住民を救った。

春日族から柿本人麻呂が戸田に生まれ、晩年石見の国府に長として赴任し、ついに石見の鴨山で死去した。戸田や高津の柿本神社は人麻呂と関係をもつ神社である。先述の遠田の坂ノ上並良は並良堤を掘ったが、同族の京春は石見の国司麻田陽春から薫陶を受け、医師となった。その妻とも思われる額田部ノ蘇提売は、離縁後久しく独身生活を送っていたが、その間貯えた私財を厚生福祉に投じて多数の人々を救済した。この善行が朝廷に聞こえ、全国18人中の1人として表彰された。

●柿本人麻呂

歌聖と讃えられる柿本人麻呂は、その出生地があきらかでない。一応、近江説と大和説、それに石見説の3説があるが、津和野の国学者岡熊臣によると、石見国美濃郡小野郷戸田であると明記している。また、柿本家と縁のある綾部家によると、大和に居住した柿本家が石見へ下ったとき、これに従って美濃郡小野郷に住み、ここで生まれた一男子が人麻呂であったと記し、人麻呂の死後、その出生を記念するために今日の戸田柿本神社が建造されたと言われている。

一方、「万葉集」を通じて人麻呂をみると、青壮年時代は大和に住み、朝廷の内舎人（宿直役）として仕え、天皇の行幸や、皇子の行啓の時にはこれに従従し、彼独特の和歌を詠じて慰めていた。晩年の人麻呂は石見の国府に赴き、三等官である杖の役を勤め、班田収授のため班田使として石見各郡の郡家（郡町）へ出張した。しかし在庁数年、班田収授などの事務で益田へ出張中、当地の鴨

山(鴨島)で辞世の歌を遺して永眠した。

●美濃郡の出現

大宝元年(701)に大宝律令が制定されてから古代国家の完成をみたが、この時、国・郡・里の地方制度の実現により美濃郡が生まれた。「石見外記」には「三野とは此処に、大農、美濃、小野と、大中小の三野ありしをもて、遂には一郡の読名とせしにやあらん」と説かれている。

美濃郡は八郷に分割され、益田郷、ツタ気郷、大農郷、美濃郷、小野郷、山前郷、都茂郷、山田郷となっている。以上八郷のうち、当市の属村は奥部の山田郷を除き、他の七郷のいずれかが属している。

4節：平安時代

●時代の概観

桓武天皇は都を京都に移し平安京と名づけた。天皇は奈良時代の末、乱れかけた律令政治を改革しようとして班田収受を励行した。また勘解由使を置いて国司の交替を厳しく監督させた。しかし、時代が進むにつれ、律令制度を励行することは困難になってきた。貴族・寺社等による土地私有は著しくなり、逃亡したり、戸籍を偽る者が増えたため、班田制の実施は益々難しい状態となった。口分田を私有化したり、貧しい農民から土地を買い取ったりして、広大な土地を所有する者が増えた。中には私有であることを明らかにするために、土地に自分の名を付ける者もあった。このような土地を名田といい、その所有者を名主といった。しかし名主たちは、自分の力だけで土地の権利を守ることはできなかったため、中央の有力な貴族や寺社に私有地を名目だけ寄進し、その保護によって土地の保全を図り、実質的な所有権を保持しようとする者が現れた。

例えば益田氏の「皇嘉門員惣処分状」などがそれである。寄進を受けた貴族や寺社が本所となって、名主や豪族は荘官に任命される場合が多い。荘官は荘園を管理し、本所・領家に年貢を差し出した。荘園は国家に租税を納めることを原則としたが、本所・領家は種々の理由を設けて、田税免除の特権(不輸権)を得て、さらに検田・徴税に当たる役人が荘園内に立ち入るのを禁止する特権(不入権)を得るようになった。

●地方の概観

地方の政治が乱れ、国家の軍事・警察が無力となったので、国の役人や荘園の荘官・名主たちは土地を守り勢力を広げるために自ら武力を蓄えた。こうした状況の下に武士が発生したが、土地をめぐる国司と荘官との争いが止まらず、そのために武士の成長が早められた。平安中期には藤原氏が政権を独占していたので、一般貴族の中には中央の政界で出世することが出来ず、国司となって地方に下り、そのまま土着する者が少なくなかった。

その中でも有力な者は地方の武士の信望を得てその棟梁となり、強大な武士団を形成した。桓武天皇から出た「平氏」と、清和天皇から出た「源氏」はその代表的なものであった。

石見においては藤原氏から出現した御神本氏、後の益田氏が一国の名門として、石見全域に活躍した。都茂丸山銅山が発見された時、遠田の坂ノ上(沢江)京春の玄孫是護は遠田の人夫を引き連れ、真髪部ノ安雄の下に属して採銅に従事した。この時皇護は、遠田にある菩提寺の安養寺を丸山に移した。そして丸山神社を丸山銅山鎮護の社として祀った。

淳和天皇の天長2年(825)、並良堤が切れたので坂ノ上伊宗らが修理し堅固になったが、さらに坂ノ上知範によって再修理された。益田川口にあたる中須の辺りには、処々に五福寺の大伽藍が建立されていった。後一条天皇の万寿3年(1026)5月23日、突然襲った大津波に益田の沿岸は大災害を受け、多くの社寺が流失した。この津波により益田市内はもちろん飯浦・小浜・遠田・木部の諸地も大きな被害を被った。そして、柿本人麻呂を祀る柿本神社も流失した。醍醐天皇の延長年間、当益田市内の5社が「延喜式」に載せられた。そして承和10年(843)、美濃郡が分割されて鹿足郡が生まれた。

●坂ノ上皇護と都茂丸山銅山

都茂丸山銅山は都茂大字山本の奥旧安養寺の所在地にあった。任明天皇の承和3年(836)11月、朝廷では石見国に命じて、しっかりした百姓4人を選び採銅の技術を学ばせ、彼らの力役を免じたことが記されている。これは石見の国司として藤原行繩がいた時代である。

朝廷は寛平年間、勅命を下し、木工少属で従七位上紀朝臣真房、史生で従八位真髪部安雄らを丸山に派遣して採銅の模様を検察させた。安雄の朗報により丸山銅山へは諸方から鋳夫が集まり、大いに賑った。

清和天皇の貞観年中の石見は、新羅の国から来冠があったという噂に人心は動揺していた。このような最中の同5年、美濃郡海岸に新羅人の漂着があった。漂着は津田の唐人塚ではないかと推定されている。漂着した30余人中死者14人は塚に埋葬し、生存した者に対しては国司時成が食を与えて放した。その中に帰化を希望し定住した者もいる。貞観19年(877)、国司大野鷹鳥は新羅に対する石見海岸の警備を嚴重にさせた。

●万寿の大津波

後一条天皇の万寿3年5月23日の真夜中に、高津・中津沖の石見潟が一大鳴動を起こすと同時に、鴨島が陥没し、大津波が襲来して、石西沿岸の各村に大損害を及ぼしたという。この大津波は、明治5年にマグニチュード7を記録した浜田地震の時の津波以上のもので、石西の海岸に沿って発生した大断層地震と考えられ、その規模と被害の大きさが想像できるものである。

当時上遠田には、坂ノ上(沢江)利兵衛・喜兵衛の父子、芝家の右兵衛らがいた。彼らはこの惨状から立ち上がり、率先して災害後の復旧に努力した。そして彼らの尽力は報われて、美田を回復し、以前の平和を取り戻すことができた。その後この大津波に懲りた右兵衛は、家を流失した住民にも住居を小高い丘の上に改築するように勧めた。

●神社の建立

石見国はこのころの活躍が隣国の出雲に比べて貧弱な感があるのは否定できない。その主な原因は地勢と交通の便によるものである。しかし中国地方の近隣と比較すると、これとは全く反する現象を示している。

延喜式の式内社数は出雲187座、石見37座、安芸3座、周防10座、備後17座、備前78座、備前26座、紀伊31座であるが、これを見ると山陽に対して優位を占める37座という数は、石見の上古時代の形勢がどのようなものであったか、想像するのに難しくないところである。式社の数の多少は地方民族の政治的勢力を計り、民俗活躍の有無を知る好個の標準となる。従って上古の石見文化は隣境の長門・周防・安芸・備後・備中にひけをとらないものであったと言える。

●荘園の成立

益田における荘園制度は他地方と同様に明確ではないが、中央貴族の荘園経営と同じことが地方豪族の場合にも見られた。郡司として地方に下り、そのまま土着した中央貴族など、在地有力者と云われる者の内には、班田農民から地主になった者もいた。彼らは在地の農民に耕地の請作をさせて、自らは土地の所有者として成長していくのを常道とした。

これら地主を中心に奈良時代の郷里制にかわる新しい村落制が発達しつつあった。彼らが組織の単位となって、その上に地方豪族の土地所有、例えば安富の安富飛驒守、横田の横田左京進、橘光延、そして各寺院、あるいは中央貴族の土地所有の関係を生じたのが荘園なのである。

●武士の発生

平安の末期ともなると各地方の名主は荘園の秩序を守り、他からの侵略から自己の荘園を防衛するため、自分の子弟や召使たちに武芸を習わせた。このため名主の武力は次第に増大し、ついには他人の土地を侵略するほどに発展した。

こうした状況から、いつも武士の棟梁と仰がれたものは中央では立身できないので、勢い不満のあまり地方に下って国司に甘んじ、任期が満ちてもその地方を去らず、やがて土着して地方の豪族と結び、土地の侵略に汲々とする貴族やその子孫に仕えることとなった。このようにして、地方に武士が生まれ、地方の治安は一段と乱れ生活の不安が高まっていった。

●益田氏の石見下向

益田の文化は益田氏の移住により、一躍石見文化の中心地として精彩を四周に放った。益田氏は藤原鎌足の出である。鎌足七世の孫に忠通が出て、忠通九世の末に定道が出た。定道は鳥羽天皇の永久2年(1114)6月、前任者・藤原貞仲の後を追って石見の国司となって、当初那賀郡伊甘郷大浜の三宅に居を定めたが、任期が満ちて辞任後も上府村御神本に土着し、姓を御神本と改め、名を国兼と称した。

国兼が石見下向の際、大谷知房と章房の父子は共に上府に到着し、しばらくここに逗留したが、知房は波子村を領して波子氏と称し、章房は上府に留まった。また藤原親重も国兼とともに石見へ下向した。以来、御神本氏(後の益田氏)は、平安期の後期から中世の末まで美濃郡益田に本拠を定め、その子孫は石見のほぼ全域に亘って繁栄した。したがって、益田氏一族を別にしては、石見の中世史は語れないと言っても過言ではないほどになった。

第5節：鎌倉時代

●時代の概観

12世紀の終わりに鎌倉に幕府を新たに開いた源頼朝は、古代的な公家政権に対抗して武士独自の政権を握った。わが国の封建制度はこれより遅れて源平の制覇から鎌倉幕府の設立のころに芽生え、南北朝の内乱を通じて次第に成長発展した。鎌倉時代はまだ公武2つの政権が固く維持されており、武士の荘園侵略も激増したが、なお古代からの公家政権は、強大な寺院と結んで伝統的な勢力を持ちつづけた。

文化もまだ伝統的な色彩が濃厚であったが、武家政権の出現を反映して随所に革新的なひらめきを見せている。平家の追討に参加した御神本兼高は、その功勞をもって建久年間、石見の守護代として石見の大部分を領し、ついに那賀郡の上府から益田の地に移った。そして、御神本の旧姓を捨

て新たに益田の姓に改め、七尾山に城を構え、石見の一国ににらみをきかせ覇を唱えた。これから室町期の慶長年間、その末孫・益田元詳が長州の須佐へ転封するまでの17代、410余年の間、益田は主として益田氏の庇護の下、石見の中心地として繁栄をきわめたのである。

この期、益田家は一族を石見の要所に分封した。三隅、福屋、周布の大宗がそれである。その後も子孫とともに分封し、宇治、多根、丸茂、大草、遠田、仙道、波田、安富、乙吉、菖蒲の諸家が益田市、美濃郡の間に拠城をかまえた。

建長2年(1250)4月、益田兼時は執権北条時頼の命を受け、材木と糧食とを京都の災害地へ送り、弘安4年(1281)の蒙古来襲の時は、支族である多根兼政を鍋島に、末元兼直を岩崎((今の浜田外の浦)に出張させて賊軍万一の襲来に備え、自らは本城である七尾城にいて、飯浦、鍋島、久城、唐音、岩崎(浜田)の支城を守備した。

弘安の役後、吉見頼幸は蒙古襲来の際の戦功により、石西の二郡に新補として5百町の地をもらい、能登国からはるばると移ったが、永仁3年(1295)、さらに津和野の三本松城に拠った。このため飯浦、高津等の城は吉見氏の有に帰し、子の長幸は長野荘高津城により、吉見家北辺の守備に任じた。その他長野庄内には斎藤、横田、内田、虫迫、保賀、領家、城市の諸氏が地頭として介在し、互いに錯綜して勢力を競った。

後醍醐天皇が一度隠岐から伯書の船上山へ潜幸のとき、諸国の武士は諭旨を奉じて立ち上がった。この時、高津城主高津長幸は父・吉見頼行の命により吉見頼繁とともに兵を遠く長府に進め、ついに悪戦苦闘の結果、中国探題北条時直の館を陥れ、武名を四隣にとどろかせた。一方、七尾城の支族益田兼衝は、足利尊氏の招きにより武家方軍に馳せ参じて京都へ上がった。

弘安5年(1282)、益田の妙義寺が創建された。また万福寺の前身である安福寺は、正和2年(1313)、住僧随音によって天台宗を改めて時宗の道場とした。

●上府時代の御神本氏の遺跡

那賀郡上国府八幡宮は初代御神本国兼が建立したものである。伝説によると彼が国司として石見国へ下向の際、たまたま重病を患い、ために石見への赴任が延引したので、鎌倉鶴岡八幡宮に祈願したところ、病勢が急に回復に向かったので下向の途についた。御神徳のあらたかさを痛切に感じた彼は土着後間もなく、鶴岡八幡宮を上府に勧請し、岡潔氏を神職として迎えた。国兼の死後、この末社として御神本神社が祀られた。この神社は白口の地に建立され、白口大明神とも言い、益田氏の総氏神として崇められた。

●御神本氏の益田移住

御神本兼高は石見の押領使となった。文治の勲功により領土の安堵を得た彼は、建久3年(1192)、上府の地を去って益田に居を移した。益田庄、長野庄は、益田氏が従来から営々として開拓した私領であり、同家所領の中心地をなしたからである。益田の地は、守備上自然の要害をなす絶好の地であり、近く石見随一の平野を控えている関係上、将来の発展にも有望かつ至便であり、移住の当初、乙吉村の鳶ヶ山に仮城を築いて一時これによった。

●七尾城の築城

兼高は翌建久4年(1193)年3月、七尾山に城郭を築いてこれを主城とした。七尾城は人工的な築城ではなく、むしろ自然の天険を利用の上、縄張を定めた山城である。七尾山は遠く望むとき、山上に七つの尾(峰)を有するので名付けられたものらしい。ここからは益田や吉田の平原が一望の下に見下ろされ、敵情を四顧に望見される絶好の位置を占めている。

●蒙古の襲来

朝鮮、中国、交跡、占城を連合した蒙古の襲来は、わが国未曾有の一大国難だった。弘安4年(1281)、元軍の大襲来に際し、賊船は長門の近海室津(豊浦町)にも押し寄せたとの風聞があり、この長門の沿岸続きにある石見が、今後襲来を受ける可能性があったことは言うまでもない。

中国探題は、特に長門と隣接する石見海岸の防御を焦眉の急とした。そこで有力な石見地方の豪族である益田兼時は、一族の三隅、福屋、周布3氏の協力を得て、美濃郡から安濃郡に至る石見全沿岸の地所を選定の上、計画的に防備に当たらせることにした。この時、向横田村首勇城主石川吉右衛門就恒も益田兼時の命により、その防備に当たった。

第6節：吉野朝時代

●建武親政の崩壊と南北両朝の対立

幕府の有力な御家人である足利尊氏は、新田義貞、名和長年、高津長幸らとともに力をあわせ、遂に北条氏を亡ぼした。鎌倉幕府が亡びると後醍醐天皇親政の下に公武一統の新政府が始まった。しかし、天皇の意図は、延喜・天曆時代の国司制度を目指す古代政権の復活にあり、「公武一統の政治」を理想としたもので、政治の中心は公家に置かれ、武士はその実力に相当する地位が得られなかった。

こうした新政府の内では、公家と武士の反目が次第に溝を深め、しかも朝廷の武士に対する論功行賞の不公平なども相伴って武士の間には新政に失望し、武家政治再興を望む者が多かった。この情勢をいち早く見通した足利尊氏は、武家政権の再建を目指して建武2年(1335)ついに反乱をおこしたので、建武の新政はわずか2年の短命で崩れ去った。足利尊氏は持明院統の光明天皇をたてて征夷大將軍となり、京都に幕府を開いて建武武目を定め、武家政治が復活した。これにより先の後醍醐天皇は、大和の吉野に朝廷を移したので、ここに南朝(宮方)と北朝(武家方)の対立がはじまった。

●石見における2派の抗争

石見においては益田氏が宗家と庶子家に分かれて抗争し、この2派に他氏が各々ついたので紛糾が拡大していった。さらに他国からもこの両者に応援参戦するなど、ますます紛争の度は増した。石見の歴史中この期ほど民族のエネルギーを発散させた時代はない。建武2年(1335)～康永2年(1343)までの参戦者は南党28名、北党41名を数える。

南北の両朝は武力で抗争したが、南朝の側は次第に振るわなくなった。しかし足利方でも一族の内紛が続き、諸国の武士もこの争いに乗じて、その所領を拡大しようとして互いに争った。しかし幕府はその基礎がまだ固まらず、南朝を圧倒するほどに力が及ばなかった。このような動乱が半世紀あまり続くうちに、武士たちは地域ごとに団結するようになり、諸国の守護がこれらの武士を統率するようになった。

3代将軍足利義満のときに、有力な守護勢力の均衡を足場に幕府の権力は一応安定した。そこで義満は南北の和睦を図り、明德3年(1392)、南北両朝の合体が行われ、足利政権の国内統一が完成した。

南北争乱中石見の戦乱舞台は、初め益田、長野の両荘内で熾烈をきわめたが、後期になると戦場は那賀郡に移った。しかし正平年間上野頼兼が石見の地を去って他国へ転じてから一旦静まった。

ついで足利直冬が石見に来てから三隅城を中心に新たな争乱が起こり、直冬の死後新しく大内弘世が石見守護となり、南党の主将三隅家を懐柔してから、さしもの石見も戦乱が鎮まり、弘世の斡旋により南北の合一が実現した。半世紀にわたる戦闘も全国一様に収まった。

●益田下本郷波田原の田数注文

永和2年(1378)、「石見国益田本郷田数御年貢目録帳」とほぼ同じ頃作製された「益田本郷波田原田数注文」という資料がある。前者は名寄帳で、その中には本田、新田、佃、正作、公田等の区別の記載が見られ、後者の田数注文は、名前とその面積が記載されており、それらの名が「本百姓名」と「間人名」に分けて記載されている。

注目すべき点は、本百姓と区別される「もうと(間人)」の存在が明白に形を現わしていることである。益田下本郷波田原においては相当の「間人層」が存在し、その人たちの耕作面積は五反前後に集中している。間人は本百姓に対し小百姓をいい、あるいは名主に対して名子ともいった。いわゆる作人で、百姓層の株を構成する階層に属し、一方、下人、所従ほどの隷属性は持たないで、半ば独立性の強い、上層の過程にある階層に属するものとみなされている。概して間人層の田数規模が5反前後に決まっていることは、間人の独立性がやがては可能となり、それに小名層への上昇過程にあることを示し、中で間人でありながら1町歩以上の規模を有するものは、経済生活においてももはや本百姓と変わるところはないと考えても支障はなかろう。

間人層の規模にしても本百姓のそれにしても著しい差異がないことは、益田下本郷の内部における農民が、階級の分化を遂げながら次第に均等化していることの一種の表われと見ることができる。

●石見の国司と守護

宮方の地方職制は国司、郡司をそのまま踏襲していた。その反面武家方は守護、地頭によって統制されていた。地頭職はすでに不可欠の社会機構となっていたので、宮方においても、これを度外視する訳にはいかなかった。従って同じ土地でありながら、宮方と武家方との双方から其々認証されている荘園支配者は対立し、土地奪回の争いは自然に激烈をきわめ、実力を貯えた者は、自力を持って自分の土地を確保するほかはなかった。

建武3年(1336)、足利尊氏が九州から東上の折、石見に残しておいた上野頼兼が守護として武家方の中心勢力となって活躍するや、宮方は新田義貞の一族、義氏を石見に派遣して対抗させたが、尊氏が光明院を擁立して北朝の天子を奉じ、渋谷重棟を石見の国司に任じたので、南朝方は日野邦光を石見に送った。このため石見においては、南朝の国司日野邦光に対して北朝の渋谷重棟、北朝の上野頼兼に対して新田義氏がそれぞれ相対立することとなった。

第7節：室町時代

●室町幕府と守護の台頭

將軍足利義満は京都の室町に花の御所と呼ばれる荘厳な邸宅を設け、ここに幕府を移したので、足利政権は室町幕府と称された。義満は山名、大内などの強大な守護を抑え、公家や寺院などを威圧したので、幕府の権威は高まった。この間幕府の組織も鎌倉幕府の例にならってほぼ整えられた。

南北朝の時代から武士の荘園侵略はますます激しくなったが、その先頭に立ったのは守護であった。守護は守護請や半済法を利用して荘園を侵し、国内に所領を広げた。それはまた配下の武士たちの荘園侵略を助け、国内土着の領主(国人)たちと封建的關係を結び、彼らを家臣(被官)として組織

していった。こうして守護は一国全体にその支配権を強め、次第に大名として成長していった。彼らは守護大名と呼ばれ、その支配地を領国または分国という。このような守護大名が出現したのは、彼らが郷村を基盤として成長しつつあった国司や荘官を抑えることに成功したからである。それも軍事的に強大である場合を除き、多くは幕府勢力を背景としていた。従って武力的な基礎は弱く、また所領も完全に支配し得るものではなかった。そして、これらは応仁の大乱においてどんどん没落していった。

守護大名は、領国内に守護領国制を展開するに当たり在地の地頭、荘官、有力名主といった国人層を被官として把握しなければならなかったが、それは容易なことではなく、常に彼等の向背に悩まされた。このような守護の弱小を隠すためには、中央権力である幕府の接近が必要であった。具体的にいうと、將軍署名の感謝状や安堵状を自己の被官に与えなければならなかった。これを守護の求心性と呼んでいる。

一方、南北朝、室町期の地頭、荘官、有力名主たちは各地に小規模な領主制を展開するようになったが、このような小領主を国人または国人衆という。石見では、益田、周布、三隅、小笠原、佐波などがそれで、彼らは自己の勢力を拡大するために守護大名の被官（家来）となったが、その場合あくまでも自己の領主制を守護大名に易々と把握させるわけにはいかなかった。石見には伝統的な在地土豪の益田氏や、その一族が勢力を張っていた。こうした有力な国人を把握するためには、「守護使不入」とか、「臨時課役免除」という懐柔策が必要であった。

守護大名は次第に領国の独立体制を進め、幕府の統制に従わなくなった。6代將軍義教のころ、永享11年(1439)鎌倉の足利持氏が背いたので、義教は持氏を討ち亡ぼした。これを永享の乱という。嘉吉元年(1441)には嘉吉の乱が起り、播磨の守護赤松満祐に將軍が殺されてから幕府の威信は失われていった。

●応仁の乱と益田氏の動き

幕府の力が弱まるにつれて幕府の内部でも重臣たちの争いが起り、8代將軍義政のころになると、細川勝元と山名宗全(持豊)がそれぞれ勢力を競った。諸国の守護大名や武士も自己の地位を守るため、両勢力と結びついた。そのような状況の下に將軍後継問題と畠山、斯波両氏の家督争いをめぐって応仁元年(1467)、応仁の乱が起こった。東西の両陣営に分かれて戦いは京都を舞台に11年間も続けられ、都の大半は焦土と化し、これはやがて地方へも波及していった。

このころ12代益田兼世は明德、応永の役において大内義弘の下で泉州堺に戦った。14代兼理は永享3年(1431)、大内盛見のために大友氏と戦い、筑前深江において盛見と前後して戦死した。15代兼亮は宝徳、享徳のころ、大内氏に属して兵を伊予に進め、寛正年中には畠山義就を河内に攻めた。ついで応仁の乱にも上洛し、山名宗全に属して戦い、勇名を京洛にとどろかせた。16代貞兼も父と共に兵を中央に進め、細川勝元の軍と戦った。ついで彼は内道頓と防・長・石で戦い、これを討滅した。

17代益田宗兼は大内義興に従い、將軍義植に対し軍功を奏し、のち石見、出雲で転戦した。18代尹兼は永正8年(1511)、京都の船岡山に戦い、大永7年(1527)には大内義興のために、尼子氏の属城・芸州瀬野の鳥子城を攻めた。応永年中、益田久直は朝鮮と交易をし、領内の今市は貿易で賑った。兼亮の時代は文化が最も発達し、桂庵玄樹、南村梅軒らの来訪があり、近世朱子学の新註を鼓吹した。ついで画聖・雪舟が訪れて、崇観寺の住職となり、万福寺・医光寺に庭園を築造した。彼は乙吉の東光寺で入寂した。

●倭寇の横行

室町期になると倭寇と呼ばれる海賊船が横行して、支那や朝鮮の沿岸を侵略した。倭寇は九州沿岸から瀬戸内海方面にかけて最も多く出現し、長門、石見、出雲の日本海岸、紀伊半島、大阪湾の一带に出没した。

島根県では寛正元年（1460）、出雲の倭寇が明の寧波を侵して帰ったと言われている。国家間に正式な通商協定が結ばれていない場合、私的な対外商業活動は、相手国の政府から「逡」扱いをされた。倭寇とは「倭人侵憲」の意から来たもので、明人や朝鮮人が用いた呼称であるが、日本では海賊または強盗といった。

当時の裏日本の航路は、長州の肥中から出雲の宇龍、能登の輪島、佐渡の小木に停泊した後、秋田に向かうものであった。そして高島の場合、西航の時は高島沖を航行し、東航の時は灘側を通ったのである。益田七尾城主益田兼理の応永年間、これらの海賊の中には孤島高島を根城にして、近海を航行する船に積まれた貨物を掠奪するものがいた。

●段銭の徴収

段銭とは、朝廷や幕府において多額の費用を要する場合、幕府が全国または国郡を限り田畑一段につき課税したもので、家屋の棟ごとに賦課する「棟別銭」と同じ性質の課税である。当時、幕府の財政は御領所と呼ばれる直轄領の収入を主とし、必要に応じて諸国の守護や地頭に経費を賦課する建て前になっていた。御領所からの収入だけでは経費の充当ができない場合に以前から行われていた方法である。

応永14年（1407）12月、沙弥素明から入沢土佐入道へ宛てて益田越中入道周兼（秀兼）の段銭徴収に関する文書が提出された。この文書は「段銭の徴収が近年増大して来たので、甚だ困っている。就いては、この度の要求額は低減して欲しい」という、益田氏から幕府への要望である。これに対し幕府が「では所領の面積を調査しよう」と回答した点に、暗に調査されては公認の田地よりも広面積になるだろうという脅かしが感じられる。こうした傾向は当時石見全体に要求されていたものとみてよい。

●朝鮮貿易

室町時代の島根県内の通商港としては美保関が第一にあげられ、その他宇龍、杵築、平田、白瀉、安来、羽根、馬路、大浦、温泉津、浜田、桜井津、江津があり、いずれも国内の通商港として地方の物資を集散していた。

応仁元年（1467）、益田藤兼の支族藤原久直が朝鮮の世祖と交通した根拠地は奴可とされている。奴可は益田荘内、高津川の河港の中須を指すが、実際は今の今市であつたらしい。貿易品は高津の刀匠の手になる刀剣や、都茂丸山から産する銅を主としていた。石見からは蘇木、丹木、朱紅、硫黄、面盤、胡椒、蘇芳（紫の染料）、象牙の類を輸出したものと思われる。

これらの品は南海諸国の特産物で、日本の商人が琉球におもむいて買ったものを中国や朝鮮に転売するという中継貿易品である。輸入品は銅銭が多く、後年には生糸、絹織物、木綿、金欄、綴子、書籍、虎皮、豹皮などが首位を占め、その他白人参、蜜などもあった。この貿易を実際に請け負った今市の土倉、三原屋らの金融業者は、7割に及ぶ利益を得て巨富を積んだという。朝鮮貿易は紆余曲折の後、文禄元年（1592）まで続いた。

●益田、三隅間の紛争

正長2年(1429)6月、益田、三隅両氏の間には戦端が開かれそうになったので、幕府は僧満済に命じて両者の意見を聞き取らせた。永享12年(1440)、なお在京中であった益田兼亮は、益田氏中の有力な庶子家である三隅信兼を相手に、上京滞在中にもかかわらず確執を続けていた。このことによって石見の豪族内には相当な紛糾が巻き起こされたようであるが、その原因については究明されていない。

この両者の紛争は、一時的に沈静化の方向もあったが、その後京都において再び益田兼亮と三隅信兼の親睦が破れ、その確執の一方ならぬことがついには右京大夫細川持之の耳にも達した。そこで細川持之は山名中務大輔に両家を和解させ、その家人も石見へ帰国して親交を深めるように命じた。万一この処置に反抗して依然として確執が続けられた場合には、最初に手出しをした方を罰するという嚴重な執達状を公布している。その後、応仁の乱に当たり益田兼亮と貞兼父子は、山名正清や大内政弘に味方して西軍に参加したが、三隅氏はこれに対抗して東軍に加わっている。

●山口と益田の文化交流

文明年間前後、石見文化特に益田文化が山口文化から大きな影響を受けたことは否定出来ない。当時の山口文化は、どういう訳で高い文化性を示していたのであろうか。

元来大内氏は周防の国を中心として中国の西辺に勢力を保持しており、支那、朝鮮に最も近接する関係上、地理的な利便を受けて大明国の勘合符を独占していた。従って明商韓客が常に山口を往来したので、商工ともに開け、大陸文化輸入の重要な門戸となり、その繁栄はむしろ京都を凌ぐほどであったのである。

この文化の地である山口から出たのが近世朱子学の始祖桂庵玄樹であり、その他桂庵の学問を大成させた岐陽方秀や竹居正猷などの学僧たちである。大内氏はこれらの学僧を大いに保護したので、他国からも山口を慕って来訪する者が多かった。大内氏と益田氏の関係は、吉野朝期の太田弘世以来、長い間親密に結ばれて来た。

明德以前すでに益田兼見は大内弘世に従って長芸の各地に転戦し、益田兼理は大内盛見のために筑前に出陣して、盛見の後を追って深江で戦死した。そのほか多数の益田氏一族が大内軍に加わって戦うなど、益田氏は常に大内氏の勢力範囲にあって行動を共にし、時には守護代も勤めていた。こうした関係から、山口文化が益田に流れて来るのは当然のことであった。

●雪舟の石見来訪

画聖雪舟は、その晩年に石見を訪れ、しかも乙吉の東光寺において死没した。雪舟が石見へ来遊した根本動機は、彼の放浪癖からくるものが第一で、益田氏の招聴は彼が石見を訪れてのち、第二次的に起こった原因ではあるまいか。丁度戦国乱離の時代であったので、彼はなるべく戦乱の地を避けて、平和な地を選んだのである。

石見は京都から避遠の地ではあるが、山口から僅か2～3日の行程に過ぎない。石見は岩石の美に優れ、ことに雪舟の山水画題に絶好の風趣を提供してくれる。彼が石見に魅了されたのもこうした理由が潜んでいる。

彼は国府を目指して進む石見路への途中、まず吉見領の鹿足郡木部谷村、龍頭山昌谷寺の傍にある磨矢(摺屋)谷に入り、そこに草庵を建てて暫く滞在した。更に東道した彼は、美濃郡梅月村に入り、聖清庵に留まっていた。同庵を立ち去った彼は高津、益田、三隅を通過して周布大麻山の尊称寺に

登り、巨岩で豊んだ雄大な庭を眺め、次いで浜田の近郊にある高田山玉林寺に立ち寄り、庭園池畔の漁樵庵に留まり筆をふるった。

雪舟はこうして国府の地に入り、さらに和木村（江津市）の小川邸に落ち着き、同家に滞在中、同家の裏に庭園を造ったともいう。

第8節：後期室町時代

●時代の概観

一般に近世といえば織田信長が元亀元年（1570）、その覇権を握った時に始まり、信長に次いで秀吉が政権を握った安土桃山の時代から徳川幕府の創立を経て約300年後のその滅亡に至るまでの間である。地方史では、毛利氏が出雲、石見を征服した時に始まり、やがて慶長5年（1600）、関ヶ原の役後、浜田、津和野の両藩、及び石見の幕府直轄領の成立を経て、その解体に及ぶ期間を指す。しかし今ここでは便宜上、関ヶ原の役までを記しておく。

応仁の乱後、数十年にわたる乱世の間に弱小大名の多くは倒され、比較的少数の強大な大名が各地の覇権を握る戦国大名の時代となった。彼らのある者は京都に上り、朝廷や将軍の権威を借りて全国を平定しようと志した。その機運に乗じ、競争者に先んじて成功したのが尾張の織田信長で、その偉業は豊臣秀吉に継がれた。

天正元年（1573）、信長が将軍足利義昭を追放したので、名目だけとなっていた室町幕府は滅亡した。しかし、天正10年（1582）、明智光秀の反乱により信長は本能寺で倒れた。秀吉は直ちに光秀を討ち、大阪城によって諸国平定の兵を進め、最も有力な大名徳川家康と和し、全国の統一を完成した。秀吉の死後諸將の不和に乗じ、家康は石田光成、小西長行らの反対派を関ヶ原に打ち破り、征夷大將軍となり江戸に幕府を開いた。

この間、益田七尾城主益田藤兼は、陶晴賢の反乱軍に組したが、晴賢敗戦のため毛利元就に降った。以来、藤兼は毛利氏のため忠誠を励み、出雲の尼子氏との戦いに参加している。ついで、子の元祥が跡を継ぎ、文禄2年（1593）、朝鮮の役に参軍した。慶長5年（1600）、関ヶ原の役に毛利輝元は西軍の主将として大阪城にいたが、吉川広家と益田元祥とは毛利の敗北を予見して東軍に内応したので、西軍は大敗し、毛利氏は辛うじて防長の2国を保った。この時、益田元祥は毛利氏に従って400年も続いた益田の地を去って長州の須佐に転じた。天正年間、石勝神社と久城八幡宮とは益田藤兼・下祥の父子によって再建され、真宗の台頭と共に泉光寺、興順寺などが建立された。

●尼子・大内の争い

享禄元年（1528）12月、大内家では義興の死後、義隆が跡を継いだ。先に大永6年（1528）、7年の両年、大内、尼子両家の争乱は遂に浜田天満原で大激戦を引き起こしたが、間もなく平和に帰した。ところが天文7年（1538）、大内義隆は、従来から益田、三隅両家の紛争の根源であった美濃郡の都茂、丸茂、匹見の3か所を三隅隆周から益田尹兼へ譲渡させ、隆周の次男隆信と尹兼の女（藤兼の姉）とを結婚させることによって今後一切益田家からは言いがかりをつけることなく、親交を結ぶよう調停させた。

しかし、三隅に対する益田の圧迫は決して終止符を打った訳ではなく、益田氏はずいぶん三隅氏を亡ぼしている。天文9年（1540）8月、尼子晴久の兵は、大内義隆の手に帰した石見銀山を奪取し、さらに石西の地に触手を伸ばそうとして那賀郡周防の地にまで攻め寄せ、井野村を襲った。そのため

に益田七尾城は大内氏の北の護りの立場におかれた。この時、三隅隆周の家臣三浦兼実は刈袖口において尼子の軍を撃退した。尼子軍は遁走に当たり大麻山に火を放ったので、別当寺である尊勝寺は灰燼に帰した。

●益田・吉見の交戦

天文22年(1553)11月、吉見正頼は陶氏に反抗し、三本松城及び阿武郡嘉年の勝山城に拠って兵を挙げ、周辺の属城を警戒した。そこで従来から継続されていた益田、吉見両氏の単なる前哨戦は、さらに陶、毛利氏の対立を複合させて、いよいよ本格戦に突入することとなった。11月13日、三本松の城外において戦闘が開始され、数回にわたる戦いが継続されることとなった。次いで大内義長の軍は吉見氏の支城吉賀、墨(隅)及び下風呂谷を連続して打ち破った。この時陶晴賢は長囲の計を取り、三本松城の西南鉢ヶ坪城の南、長石の国境に当たる山頂、枳ヶ嶽に陣地を布き、三本松城を眼下に見下ろして吉見軍を悩ませた。そのため三本松城は下瀬山城と御嶽城との連絡を完全に遮断され、全く孤立の状態に陥った。天文23年5月のことである。

●益田氏、毛利氏へ降伏

弘治3年(1557)、大内義長の自刃により大内家は断絶の形となった。ここで益田藤兼は大内義長に殉じて決戦を続行するか、あるいは毛利氏へ降伏するか岐路に立たされた。この時藤兼は「大内氏が存在すれば武士としての義理もあろうが、今や同家の断絶をみるからは仕方あるまい。吉川元春の勧告もあるので、これに従うにこしたことはない」と考え、三隅城に迫っている吉川元春と福屋隆兼に頼って毛利の幕下に属したいと希望した。

そこで吉川元春と福屋隆兼とが藤兼と毛利との和議の成立を進めることとなった。吉川元春は釜出(鎌手)の坂か、あるいは津田の地まで進出し、そこから内藤新左衛門かあるいは口羽通良、赤川元房かを益田へ使者とした。益田からは藤兼の代理として元祥が本多伊織を伴い釜出の坂(あるいは津田)に出向き、直接降伏の内意を告げたものらしい。

●三隅氏との戦い

1. 浜田石川の合戦 天文21年(1552)、三隅城は益田藤兼が併合するところとなった。三隅家15代城主隆繁は城主とは名のみで、全く益田氏の言うがままに動く状態に陥っていた。その上益田氏の背後には石見の一州を威圧する毛利氏がいたので、三隅城内では形勢の衰えをどうすることも出来なかった。

周防左近将監晴氏は、三隅隆繁、御神本左衛門、大矢則重らと謀って連合軍を組織した。彼らは居城への敵の攻撃をいたずらに待たず、敵の来ないうちに浜田へ押し寄せて那賀郡星城や鷹ノ巣城を奪回し、そこで毛利氏を食い止めようとしたが、これらの城は吉川監物に落とされた。その戦況は「浜田町史」中、「浜田石川の合戦」に詳しく記されている。激戦数合の後、周防、三隅の連合軍は城の維持が出来ず、周防鷹ノ巣城へ退却した。

2. 周防鷹ノ巣城ノ攻略 吉川元氏の毛利軍は時を移さず周防城に迫り、幾重にも取り巻いて攻め立てた。周防晴氏の一族郎党はよく防戦したので、毛利軍中の安保大和守、武田豊後守、相良遠江守らの火攻めも功を奏しなかった。しかし、城中の三宅備中ノ守が毛利軍に内応したため、毛利軍に降ったことは「石陽軍見聞記」に記してある。城中の三隅国定、三浦膳正らの奮戦は凄じいものがあったが、形勢の不利はどうすることも出来ず、主将周防晴氏は割腹し城は落ちた。三隅国定は

重囲を脱して、三隅の高城へ帰陣した。

3. 四ツ山の落城 一方において熊谷伊豆守、大友豊後守、佐々田盛時の軍は美濃郡朝倉の四ツ山城へ攻め寄せた。四ツ山城は高さ240mの天険城で、四ツの峰からなり、本丸は一ノ岳に、出丸は四ノ岳にある。三隅家譜代の臣須懸忠尚はよく防戦した。

四ツ山城の戦況に関しては毛利軍の熊谷伊豆守、大友豊後守、佐々田盛時ら4～500騎に攻められたことが「石陽軍見聞記」に詳しく記されている。城中の加藤民弘は500の兵を率いて敵方の佐々田盛時らと数度の激闘を交えたが、城中は一面の戦火に見舞われ、城将須懸忠尚は割腹した。須懸氏の滅亡後、四ツ山城は益田氏の所有に帰し、田川源八が留守役をしていたが、大屋形村馬ノ谷の城主杉森氏久のために攻められて討ち死にした。

4. 三隅高城の攻略 茶臼、四ツ山の両支城を屠った毛利勢は破竹の勢いで三隅城へ迫った。益田勢の武将らは仙人岡に陣取って形勢をうかがった。たまたま毛利軍の大部隊が芸州方面へ移動したと聞いたので、三隅軍は城外に打って出て、仙人岡の益田軍へ向かって突入した。益田軍は一時たじろいだが、これを追い、退けて三隅城に迫った。

ことに福光の戦いに勝を奏した吉田元春が、急激に大軍を率いて大手の木戸に詰めかけ城中に切り込んだので三隅国定も奮戦を続けたが、討死し、城主三隅隆繁も切腹した。

●朝鮮征伐と益田氏

国内を統一した秀吉はそれだけで満足せず、明を打とうとして朝鮮王に案内役を命じたが、朝鮮王は快くこれに応じなかった。そこでまず朝鮮を征伐し、その余威で明国を攻略しようとした秀吉は、諸国に命令して朝鮮征伐の準備をさせた。

翌文禄元年(1592)、肥前の名護屋に本営を設けた秀吉は、ここに移って郡司を采配し、中国、四国、九州の諸大名を朝鮮へ向かわせた。中でも中国の大半を併有する毛利輝元、小早川隆景、吉川広家の力を頼むことが最も大きかった。輝元、広家の軍は、文禄元年(1592)4月、釜山へ上陸し、直ちに釜山城に立てこもったが、その後開寧に在陣し、続いて五月京城に攻め入った。

京城に近い開城に留まって守備をしていた広家、元祥の軍は開城から退き、碧蹄館において明将楊元、李如松らの軍を徹底的に破り、斬首は6,000人余に及んだ。朝鮮征伐は以上の戦いをもって一旦休戦に入った。この役を文禄の役という。石見の近海からは水軍としてこの役に従軍したものが多数あった。当時、美濃郡海岸の船舶は一旦高津港に勢揃いして小早川水軍の配下に属して、朝鮮に向かったものらしい。津田村には大網講と呼ぶ地引網があって、この講の漁夫たちが漁船を調達され、朝鮮へ渡航して海上輸送の任についた。

●関ヶ原の戦と益田氏

慶長五年(1600)5月、関ヶ原役の際、西軍の将師毛利輝元は五奉行衆と会議を催した。その結果、まず近江国勢多の渡しを切断し、東軍の行路を塞ぐことに決定した。そしてその兵を駐屯させる営は、毛利氏によって築造することとなった。そこで毛利輝元は益田元祥をその任に当たらせることにし、元祥は輝元が差し向けた相杜下総守元縁と共に勢多へ向けて進発した。

また輝元は益田元祥に向かい、勢多普請の使命は西軍にとり全力を注ぐ必要のある大事であると通達した。そこで元祥は1,823人の手兵と120頭の軍馬を率い、備えの具として轍27本以下のものを揃えて勢多へ向かったことが文章として残されている。

●益田氏の政治

益田氏の政所は御土居の別館にあった。この別館は西の半分を益田氏の邸宅に当てていた。役所としては邑政堂があった。政治は執権職の五家老によって代行され、奉行の下には侍大将、軍奉行、足軽大将、小荷駄奉行、武具奉行、馬廻、医師、茶坊主、執筆等の段階があった。事務を執る執事には妙義寺や勝達寺の学僧が当たっていた。また、邑政堂の傍に貢米の収納を取り扱う蔵方がおり、そこには御米方詰所と御米方量所があり、事務担当の量り方がいた。そして金工を扱う細工小屋があり、染羽の地には面積2畝歩の材木蔵があった。

室町時代的美濃郡は白上郷、飯田郷、益田本郷、津毛郷、東仙道郷、多根郷、匹見郷、河縁郷、浜辺郷の諸郷に分けられ、現益田市内には白上、飯田、益田本郷、多根、河縁、浜辺が入っていた。

●坂崎氏の津和野入城

津和野藩は厳密にいうと慶長6年(1601)、坂崎直盛の就封によって始まる。しかし、津和野城は関ヶ原役の後、約1か年にわたって徳川幕府の直轄領として大森銀山奉行の支配を受けるが、慶長5年、彦坂小刑部が奉行として大森に着任し、翌6年、次の大久保石見守(長安)と交代する。その所領地域は確実な文献史料を欠くが、概ね次の鹿足、美濃両郡知方と推定される。

吉賀上・中・下領の全部⇒吉賀川流域野々上・中領の全部⇒津和野川流域

野々下領の大半⇒津和野川流域長野荘(美濃郡内)の大半⇒高津川の西域

これらの地域はその内部に幕府直轄領を囲んでおり、やがて東部は浜田領と共に複雑な接触をもつことになる。

●津和野城大改築

直盛の入城後1か年に実施した検地によると、初めて町屋の中心地域としての「本市」が出現し、中世の山城のどこでも見かけるように津和野においても山下、上市、片河(側)、中市、下市などの市場集落が次第に近世の城下町へと形成されてゆくのであるが、津和野の場合はかつての西の大手を東の搦手と交替させることと密接な関係があったことを無視することはできない。それは町割りが城郭工事と関わったからである。

第9節：江戸時代

●幕府体制と世界の情勢

織田信長、豊臣秀吉によって進められた封建制度の事実は、江戸幕府の建設によって大成せられ、堅固な政治組織として幕藩体制が出現した。封建制度の進展につれて成長して来た封建的主従関係は、主君に対する家臣の絶対服従とまで進展した。

士農工商の身分制度が確立し、その間の差別待遇が厳守された。現物で納める租税制度が成立したので農民の持つ耕地や衣食住に対する統制が強化され、彼らに最低限度の生活を営ませることが治農の根本となった。これらの封建的な機構を守るために朱子学が官学を採用され、教化方針に基づく文治政策が布かれた。

このように封建制度がいよいよ強化されて行く日本の事態に反し、欧州の諸国では英国に名誉革命が勃発、北米における植民地の建設が急がれた。東亜においては明が滅んで清が満州から起こり、中国の新しい支配者となった。

日本においても18世紀の前後ともなると鎖国の制約を破って諸産業が次第に発展し、商品流通

の拡大に伴い、都市の繁栄があり、町民の台頭が目ざましくなった。特に全国経済の中心となった大阪辺の上方都市では新興町人の活動が目ざましく、彼らによる最初の町人文化である元禄文化がおこった。

●益田市の概況

益田市のことを考えると、益田・吉見の両氏が一度石見を去って他所へ転封されると、元益田領だった市内の東部に位置する吉田、益田、豊川、安田、鎌手、真砂の諸地区は、北仙道と種の2地区を除いて浜田藩領の治下に属し、西部に位置する高津、豊田、高城、中西、小野、二条、美濃の旧名長野荘は、真砂（一部）、北仙道、種地区とともに津和野藩の治下に入り、益田、高津、横田、大草、桂平には、それぞれ両藩いずれかの代官所が設けられた。

今まで400年の間城下町として繁栄した益田も一度城下町としての使命を浜田に奪われてからは急激にさびれ、今まで全国を舞台に活躍した益田氏の雄大さは消えて、一地方的な地域にその活動範囲は縮められ、小成に安んじようとする情勢となった。この衰運を見かねた右田宗味は地元民に諮って六斎の市を開き、新しく商工都市としての基礎を固め、将来の発展を図ったので、益田の酒、醤油、高津の鮎、乙吉のかぶ、中須の南瓜は遠田、津田の石見畳表とともに地方の名産として遠近にうたわれた。また海岸部の海産物と並んで奥部の大草、山折、豊田等、津和野藩内の村々では製紙やはぜの実を盛んに産出した。また白上焼や喜阿弥焼きの製品も逃すことのできないものであった。

亀井氏が津和野藩主となってから高津の川尻を新たに掘り割って自領内に引き入れ、ここに蠟座、釜屋、紙蔵、粉部屋等を設けたので、この一帯は工業地区として面目を改め、すべての製品は藩船によりここから海外へ搬出された。遠田に住む国東治兵衛は、浜田藩の間仕事取調係に登用され、美濃郡内に石見畳表の製織を指導し、紙すきを奨励した。彼には「紙漉重宝記」の著書がある。

その他長嶺喜左衛門の幡龍湖の疎水、右田三郎右衛門の旧高津川埋立工事、僧願長の白上雁丁用水池の施設、中井両平の飯浦人形道の敷設、および大庭又三郎の木原、大滝水路の疎通などがあり、地方の開発に資する点が多かった。文化方面では蛸阿坊、蘭阿坊らの俳句、方円斎の狂歌、釈南領、奥龍、大巖、さては寺井西陵らの漢学、釈無着の漢詩、金山雪崖の彫刻等が最もすぐれている。

慶応2年、長州征伐が起これ、当市は長州軍と幕府軍との戦火に見舞われ、万福寺は阿鼻の巷と化し、浜田藩扇原関門の守長岸静江国治は藩境を固く守り、悲壮な最後を遂げた。

●亀井政矩の津和野入城

因幡（鳥取県）鹿野城主亀井政矩は4万3千石をもって元和3年（1617）、津和野に移封されてきた。しかし未だ30歳に足りない若年であり、治世の不安定な元和期の初めにおいて、国替えの決定をみた元和3年には種々の難問を直感したに相違あるまい。津和野城ともなれば山方であり、知行4万3千石の不足分は是非、浦方で欲しいものと切望するが、舟着きをどこに求め得るかが問題である。大部分が知行の悪い山方が占めるであろう。よってその封地を益田（現益田市）以東に求める才覚が必要であるとして、松平周防守ら諸方面へ働きかけている。

政矩は一旦津和野城入城の後、常に「津和野領」について諸般にわたる政治の計画を進めていくが、一方では密かに城替要請の計画を進めている。それは何よりも入城後、「城の所在悪し」ことを痛感し、津和野を棄てて、日本海を望む地点を選ぼうとすることにあったらしい。しかし、福島正則が広島城除封という事件から改易となり、政矩は病をおして広島へも出向いたが、自らは帰城静養をし、ついで8月、幕府の命により伏見へ行く途上落馬し、それが原因で30歳で京都で没した。津和野入城

後以来わずか2年目のことである。

津和野藩でも地方行政の整備には周到な配慮を払った。鹿足一郡、美濃半郡、那賀、邑智2郡は飛地、それが幕領、浜田領と錯綜した所有分布という地域性にかんがみて17組、次に見る寛永検地(1637)で14組に分けて、それぞれに代官を置き、その下に都合114人の庄屋を配した。庄屋には自作の役田を与えてその所得とさせ、その支配下の百姓から人別年中3日あて、無償労力の提供を定め、これを庄屋の「三日夫」と称した。

●多胡兄弟と産業開発

亀井氏の祖茲矩以来、亀井氏の一統には経済的手腕に長けた血が流れている。かつて茲矩が政治・経済の中心からはずれた因幡鹿野という山陰の僻地にあって小国の城主でありながら、地の利を得た島津、鍋島らの諸大名を向こうにまわして御朱印による海外貿易で巨利を得ていた。茲矩の姉の子多胡真清およびその子の眞益、真武、真蔭の3人の兄弟が産業振興にふるった経済的才腕によって、亀井家に莫大な藩幣の蓄積をみるのである。多胡家3兄弟のうち眞武は藩主茲親の実弟矩致を養子として家督を継がせ、多胡姓を改めて亀井姓を称させる。

主水畑 眞益は家老に就任すると領内の地勢から米穀の自給自足に不安があると確認し、田畑開墾による米穀の増収と、山地を利用して楮、檀、漆などの農業生産に重点を置く産業開発を計画し、着手の第一歩として模範を示した強硬推進地を「主水畑」と伝えている。

紙専売仕法 藩の抄紙はすでに奨励されていたが、効果が上がらなかった。眞益は正保3年から寛文5年にかけて紙産業に素晴らしい発展を遺した。抄紙奨励の根本策として楮植付けのためにあらゆる手段をもって資金援助を凶ったり、紙商人には賃銭を与えて強制的に買上げ、これを「御上荷物」と称して藩専売とし、藩財政の重要な財源とした。

●教育投資と人材の輩出

天明5年(1785)、9代矩賢は父矩貞の意志を継いで、藩校創設という教育投資に踏み切った。この計画はすでに矩貞によっても企てられたが、次のような打ち続くはなはだしい財政窮迫に妨げられてその都度挫折した。

宝暦3年(1753)6月、領内大洪水による田畑被害6千3百石余。

宝暦5年(1755)8月、領内大暴風雨による粒家7百軒、田畑被害2万3千500国。

宝暦5年(1755)7月、城下火災、14百59軒全焼。

安永2年(1773)3月、城下火災、14百24軒全焼。

天明六年(1786)4月、城下堀内に校舎が落成し、矩賢は養老館と名付け、津和野藩の藩学はスタートを切り、それ以来明治の初めまで人材の養成が続くのである。

●幕末から維新へ

元治元年(1864)7月、幕府は長州征討令を発した。慶応2年(1866)、長州軍が幕軍を打ち破ったことを教訓として、兵制を改革し進退、操縦とも敏活な西洋式銃隊に改め、その銃も最新式のものとして決定した。開国論者も全軍を根底からくつがえす兵制改革に満足した。

津和野藩は長州征伐から鳥羽伏見の戦い、さらに征討大総督の錦旗の守護と兵を進めながらも、この幕末維新の動乱に一発の弾丸も撃っていないのである。防長征討令の発令後、藩主茲監はすぐに藩庁に藩士全員を非常召集させ、令達書を詳しく説き聞かせ、防長征討の朝令はもとより奉ぜざるをえないが、こと重大であるため全藩士の意見を徴した。長州軍も城下を避けて通過し、益田へ進

撃した長州軍は浜田、福山両藩兵を打ち破った。

第10節：現代

●国の情勢

明治維新は王政復古という形式で現われたが、新政の方針は5か条の御誓文に示してあるように新時代の要素を内包していた。このころ欧米列強の動きが影響し、日本の国情は早急な富国強兵の必要性を促された。明治の政府は何をおいても従来の封建制度を撤廃し、天皇の権威を確立するよう努力したが、廃藩置県の後は一層専制的な性格を濃厚にし、各方面にわたって西洋文明の輸入に努め、文明開化の諸政策を推進した。したがって国家の権威を高めることに汲々とした政府は、かえって国民から不満の声を聞くようになった。

こうして立憲政治の確立を求める国民各層の動きが活発化し、その動きはやがて憲法の制定や国会の開設を行うことを決め、諸般の準備が進められた。自由民権運動は政府の弾圧と内部の分裂によって揺らぎ、次第に衰えていったが、時代の推移を考えた政府は、大日本帝国憲法を發布し、帝国議会を開いた。しかし、大多数の国民はなお参政権を持たず、政党政治の発達はやや遅々として進まない状況にあった。

日本の近代産業は明治初年、殖産興業の段階を終えた後、紙幣整理による経済界の安定とともに発展の軌道に上った。日清戦争の勝利によって朝鮮の市場を確保した資本主義は、早くも繊維工業を中心とする第一次産業革命を経過し、次いで満州に進出しようとする露国と戦って勝利を得た。これによって第二次産業革命は完了し、わが国の資本主義はここでほぼ成立した。欧米の先進資本主義と対抗して、急激に成長した日本経済は、戦後いちやく金融独占資本主義の形成に進み、一部の大資本の優位が築かれるとともに中小企業の没落が激しくなった。

第一次世界大戦は、帝国主義の段階に入った列強の争覇戦であった。この大戦に参加した日本は、東洋の市場を独占し、米国と共に一躍債権国に転じた。それとともに大資本による大規模な経営が進み、財閥の産業と金融に対する支配が進んだ。戦争の惨に懲りた世界各国の間には、平和の確立と軍備の縮小を熱望する声が高まり、国際連盟が創立された。

第一次世界大戦を通じて日本国民の間にデモクラシーの機運が広まり、社会運動も米騒動の一揆を契機として一応の進展を速めた。この間に国民が多年要望した普通選挙が実施され、文化にも新しい動きが反映した。

軍部と右翼の勢力は、昭和初年からさまざまな手段で軍部独裁の体制を築く一方、満州事変と日華事変を通じて大陸支配の体制を確立しようとした。その時、独伊のファシズム勢力と結んでさらに大規模な戦争である第二次世界大戦に突入し、太平洋戦争の口火が切られた。しかし、広島と長崎に投下された原子爆弾の威力に、日本は無条件降伏をした。敗戦を転機として、荒廃した国土から立ち上がった日本は平和な民主主義国家として再生することとなった。

●益田市的情勢

益田市を見ると長州征伐をきっかけとして明治維新が訪れ、当市内の各地区は明治12年、美濃郡として益田、安田、鎌手、種、豊川、真砂、北仙道、中西、豊田、高城、小野、二条、美濃、吉田、高津の1町14か村となった。明治20年、町制を布いた益田町にひき続いて高津村が大正11年に、吉田村が昭和9年に各々町制を布き、昭和16年2月、3町は合併して石見町となった。

さらに昭和18年7月15日、益田町と町名を改め、益田駅を中心に商業が発展し、大和紡績を

加えて商工都市として繁栄の機運に向かった。昭和27年8月1日、近隣の7か村を合併し新たに市制を布き、第1次益田市の発足を見るに至った。市の人口は4万2千余人、面積は197平方キロ余、面積の広大な点では県下第一、人口の点では松江、出雲に次ぐ県下第3位の都市として生まれたのである。

昭和30年3月25日、当市は周辺の5か村を第2次吸収合併して、大きく地図の色を塗りかえた。このために人口は5万6千人、面積は300平方キロに膨れ上がり、従来の美濃郡21か町村は、北部海岸の当市と奥部美都町、匹見町とに三分された。その後政治、産業、文化の各面にわたって当益田市は急激な発展を遂げるに至った。

むすび

本市誌は遠く原始の社会から筆を起こして現代社会に到達するまでの益田の変遷をたどってきた。つまり、豪族の支配下に栄えてきた原始古代の社会状況に始まり、武家が支配した封建秩序の社会に及び、近代都市が実現するまでの足跡を尋ねてきた。

この間政治上の跡付けを見ると、少数の豪族による専制の往時から武士の封建的時代を建設し、近代の民主政治が実現するに至る長い年代をたどっている。経済上の見地では、農業を主体とする経済生活から手工業や貨幣経済の発達時代を経て、近代の資本主義経済の体制に至る過程を述べることになり、また社会の上から見ても上層の支配階級を中核とする世代から近代の社会形成へ到達するまでの道程を述べたものである。

その間、しばしば戦乱を体験しながらも、郷土の祖先たちは、よりよい社会の建設を目指してきたのである。われわれは、こうした祖先が遺した積み重ねの上に現代の生活が存在していることに深く思いをいたさなければならない。

益田市の文化は、こうした政治、経済、社会の発展と切り離して考える訳にはいかない。ある時代における文化の様相は、その時代の社会状況に起因することが強く、それはさらに前時代の種々相を受け継ぎながら、しかも当時の特異性を露見したものである。数千年も続いた原始社会の文化は、今日から考えると稚拙そのものではあるが、それも当時の原始人が営々として産み出した尊い体験からきた文化財であり、それなりに独特の色彩と、文化的な意義をもったものである。こうして統一国家が出現して、大陸の先進文化を積極的に吸収摂取した結果、中央部の日本文化は白鳳、天平と急速に展開を早めた。当市では柿本人麻呂においては、別に影響するところはなかった。

次いで平安期の唐風文化も僻遠な当市だけにさほどの影響をうけなかった。武士が政権を握った鎌倉時代になると、貴族文化の伝統に武士生活を反映した新文化が現われ、室町時代に及んで大成された。当市では益田氏が拠城したため、この方面に精彩を放った。一方、この時代には庶民の間に現われた文化が上層社会にも混入し、洗練を受けた。そこで庶民の間にも文化が広く普及し、封建的統一の支配が実現したころには、天ノ石勝神社に見られる桃山の豪華が芽生えた。

江戸時代に入ると経済的発展に伴い、一般の農民や町民、特に町民の間には新鮮な性格を持つ、いわゆる町民文化が出現した。江戸時代文化は鎖国下の封建文化であったので、外来文化の影響を受けることは稀で、日本独自の性格をもっていた。明治維新後の日本文化は、急速な変化と発展を見せた。それは欧米諸外国の文化を自発的に吸収し、その強い影響の下に発展しはじめたのである。そして政治や経済の面における近代化と相まって、日本近代文化の発展と普及は、国民のあらゆる階層を対象とするものになった。

わが国における外来文化の摂取は、どこまでも無批判に模倣して来たのではない。日本の社会に適合する外来文化のみを摂取して、よくこれを消化し、日本独自の文化創造に力を発揮してきたのである。

石見の国読本

〈大田編〉

大田の歴史と伝統を学ぶ

1 節：石器時代

人類の出現はおよそ400万年前にさかのぼると言われ、日本列島が今のよう形になったのは、1万年前のことだとも言われている。信じられないようなことだが、大江高山はおよそ200万年前の火山群だし、三瓶山にしても2万6千年も前に火山活動が起こったらしい。町のあちこちで見うける火山灰の黄色がかった土は、このころ噴出したものが積もったものである。

●先土器時代の遺物

三瓶山が活動したといわれるころから新石器時代は始まるが、それ以前を旧石器時代と呼び、人間の出現からおよそ99%以上にあたる長い期間を旧石器時代としている。そのころの石東地方がどうだったかは、まったくナゾにつつまれて分からなかったが、昭和24年(1949)、群馬県の岩宿で旧石器時代のものとみられる打製石器が見つかったから日本でも旧石器時代があったことを示すことになり、松江市や瑞穂町に続いて匹見町新槇原遺跡でも、先土器時代の遺物が発見されている。

●縄文時代の風土

原始的な方法で、狩りや漁をしたり木の実を採取したりした人々は、やがて粘土をこねて土器を作ることを知るようになる。ここから縄文時代が始まる。島根県内の縄文遺跡の分布は、100か所以上にものぼっている。範囲は日本海沿岸から中国山地の奥にまで広がっており、石東地方では三瓶山の裾野や三瓶川の流域の河岸段丘の上であることが注目される。これは秋の栗林やその他の実も多く、狩りにも都合がよかつたろうと想像されている。

縄文後期には人口の増加で、山麓一帯に人々の生活が広がった。仁摩町では縄文遺跡は6か所、いずれも海岸部の砂丘や河川から発見されているが、詳細は未調査である。馬路町内では鳥居原遺跡と久根ヶ曾根遺跡があり、いずれも標高5～15mの砂丘上に存在し、縄文土器のほか石斧、石鍛、石錘などが発見されている。仁万町内では、潮川沿岸で発見された善興寺橋遺跡が縄文遺跡と認められている。

2 節：弥生時代

●弥生時代の遺物

縄文時代の終わりころには採取生活も行き詰まり、朝鮮南部で発達した稲作農業が北九州方面に受け入れられ、弥生時代の前期にその影響が広がったものとみられる。日本海に流れ出る川は運び出した土砂で平野を作っていき、その平野が農業を営むのに恵まれた環境を作っていった。大田・長久、浜田・周布、益田・安富などがそれに当る。これらの遺跡からは木製の鍬や鋤、打製・磨製の石包丁などが出土し、同時に貝や魚や獣の骨なども一緒に見つかっている。中期以降になると瀬戸内海地方の影響もみられ、分布範囲が広がって中国山地など山間部にも遺跡が認められるようになる。

●弥生時代の石東地方

大田市長久町土江、延里に遺跡があり、仁摩町では8か所の遺跡が発見されている。中でも川向遺跡は県内でも3例目という円形杭列遺構があり、水稻耕作に必要な木製農耕具を製作する施設と考えられ、同時に多量の木製農耕具、弥生土器や石器が出土している。仁摩町では沼地を耕作し、周辺の小高い丘に専門的技術集団がいて、山陰の顕著な拠点だったと考えられる。また、石東地方

ではまだ出土していないが、浜田市上府遺跡で発見された銅鐸は日本海西限にあたり注目されている。

3節：古墳時代

ピラミッドをしのぐ大古墳が大和地方や私たちの郷土でもたくさん造られた。古墳は当時の豪族の墓である。古墳の中から出てくる遺物を手がかりに、古代の歴史を調べると、日本が統一に向かっていったころの様子や氏姓制度の社会の様子などを想像する材料がある。

●4～6世紀の古墳

出雲・石見地方での古墳の代表は、安来市荒島町の造山古墳であろう。飯梨川流域の平野は水田耕作にも適しており、有力な豪族も成長したと見られている。この古墳では1号墳が底辺60 m、2段に築かれた墳丘の高さは10 mもあり、さらに周辺に4つの古墳がある。それ以後、5世紀に造られたと見られる古墳は、4世紀のものよりはるかに多く、また大型化されてゆく。特徴があるのは出雲地方のものには方墳や前方後方墳が多いが、日本の古墳には円墳が多く、朝鮮半島では方墳が多いことから出雲地方と大陸文化のつながりが想像される。

このころになると、斐伊川、神門川のような大河の湿原でも治水の技術の進歩に伴って農業生産が安定し、豪族はその豊かな農業生産を背景にして、強大な支配者に成長しただろう。6世紀になると、大型古墳は松江の意宇川、出雲の斐伊川、神戸川流域に限られるようになり、この地方に2つの古代勢力が存在していたことが想像される。また、この2大勢力がどうなっていたのか、大和朝廷との関係がどうからみあったのか、古事記をひもといてみたい。

●石東地方の古墳

石東地方では、あまり多くの古墳は発見されていない。主な分布地は浜田市や邑智郡の高原方面、大田市、仁摩町など、いまでも水田地帯となっているところである。石見は山に囲まれた地形で、生産の進歩は急には進まなかったと見られる。特例なものの一つあげてみよう。

・明神古墳(仁摩町)

この古墳は、仁万平野の北東の明神山の尾根上に位置し、仁万田台が一望できる場所にある。古墳の発見は古く、江戸時代の石見銀山代官が発掘したという記録が残っている。規模は直径20 m、高さ3 m以上の円墳と推測される。中に家形石棺があり、須恵器や鉄器のほか金銅装太刀などがあり、築造時期は6世紀の後半ごろと考えられる。

●伝承に基づく石東の夜明け

日本の神話は出雲を舞台とするものが多いと取られがちだが、石東の海岸にも古代の神々や海に向こうからすばらしい人がやって来たという伝説がいくつも語り継がれている。

・スサノオノミコトの石見上陸

あのオロチ退治で有名なスサノオノミコトは、高天原から新羅国に行かれ、そこから日本に帰られることになったが、着かれたのは五十猛の韓浦(大浦)に上陸されたとなっている。

・大国主命・少彦名命と静乃窟

静乃窟は静間町の垂水山の北側にあり、美しい魚津港が開けている。そこには大国主命と少彦名命が国土経営をされたとき、仮宮とされたと伝えられる二神が祀られている。2人の神は人や動物の

病気の治療法、また薬師山には薬用植物の栽培を教えたといわれる。海の向こうから先進的な神々が来て農業や文化を教えたこの石東は表日本だったのだろう。

・物部神社と郷土

物部氏の人たちが静間川を遡り鳥井の明神山の裾で船をつないだ、のちに物部神社が創建され、ここに「一の鳥居」ができた。物部神社の後ろ八百山にある古墳は、同神社の祖神「宇摩志麻遲命」の神墓とされ、物部神社の創建は515年とされている。いまでも大祭には、塩くみ岩から海水を供えるなど石見国一宮として人々の信仰を集めている。

4節：奈良時代

西暦710年、平城京ができ上がった。これより先、日本最初の銅銭「和銅開ホウ」が作られ、道路も東北や秋田まで開拓され、山陰道も重要な交通路として波禰駅・詫農駅などが置かれた。また、遣唐使などで唐の文化が取り入れられ、学問・文芸、仏教・寺院建築なども始まり、波根町で発見された「天王平廃寺跡」からもこうした文化が当地にも伝わったことが想像される。聖武天皇は741年に国分寺・国分尼寺の建立を命じ、島根県では出雲、石見、隠岐の3か所に建てられた。天平年間には律令政治も動き出し、農民も兵役や調庸物の運搬、税の負担に耐えかね浮浪、逃亡が増えた。

政府は農業生産を増大させるため耕地面積を増やそうと「三世一身の法」や「墾田永年私財法」を出し、土地公有の原則を破ってしまった。

●律令政治と地方の政治

大化の改新によって中央、地方の政治の仕組みや法律が整えられ、都からの国司の下で、地方の国造は郡司、里長として地方政治にあたることになった。こうした中で国司がいて地方政治を行う所を国府といい、石見の国府は浜田市国府地区（初めは蓮摩郡仁摩町字御門にあった）に置かれた。

それぞれの国は4等に区分され、国司の員数にも差があったが、安濃郡は8郷で石見の中では大きな郡であり、郡司は土着の豪族の中から任命され、現在の大田市長久町稲用に郡家（役所）があった。また、漚摩郡は6郷で5等級中の4等級に属していた。

●山陰の宿駅

中央集権のため、都と国府の間は緊密な連絡が大切で、山陰道は丹波から石見国府に至る山陰道で連絡された。「延喜式」での石見の駅は、伊甘（石見国府）⇒江西⇒江東⇒樟道⇒詫農⇒波禰の6駅であった。税（庸・調）を都へ運ぶ農民もこの街道を通った。大田市の波禰駅（波根町）は石見の東端、雲石の境にあったので重要な駅であった。

●班田制と農民の生活

701年、大宝律令の実施で重要な柱となったのは、土地制度と税制を整え経済力を持つことであった。そのためには、班田収授の基礎となる戸籍の整備と条里制を定めることであった。土地を平等に分け与えるために、田地の1段を単位として碁盤目のように地割がされた。この条里制の遺構は、条・里・坪などの地名を使うので、石東地方では大坪、柳ヶ坪等が残った。

●仏教のひろまりと神の信仰

・国分寺・国分尼寺

聖武天皇は741年に国ごとに国分寺と国分尼寺を1寺ずつ置くことを命じ、国庁に近い位置に

建立された。石見国分寺跡は浜田市国府町下府の海岸に近い丘陵の金蔵寺の境内にあり、国分尼寺は国分寺跡から東300mの位置にある。また仁万に国分寺震震神社があることから、石見国分寺は元はこの地にあったことが考えられるが、布目瓦は見つかっても寺院跡はない。

・天王平麿寺

昭和44年、波根町天王平の台地(砂丘)の10m下から発見されたもので、奈良時代の寺跡が姿を表わしたことは意義深い。創建の年代についてははっきりしないが、塔柱新礎石(塔の柱の下に置く大きな石)を基壇の下に置く方法、さらに礎石の中央に設けられた方形の舍利孔から奈良時代前期のものと同認められる。

仏教は朝廷や豪族のあいだで厚く信仰されていたが、「出雲風土記」から200年ばかり後になってできた「延喜式」の神名帳では、国社として石見国34社が記されている。

5節：平安時代

都が平安京に移される30年前、平城京で太政大臣であった恵美押勝は、競争者となってきた僧侶の道鏡に対抗して乱を起こして敗れた。その1年前、763年に出雲地方で事件が起きた。国の正倉(倉庫)が誰かの手にかかって焼けるという神火事件である。時は流れ、新都平安京になって約90年、今度は石見でも国庁が襲われる事件が起きた。平安時代は律令政治の公地公民制が急速に崩れていく時代で、摂関政治と呼ぶ貴族政治、貴族の政権争い、拡大していく荘園、政権を取り返そうとする院、その乱れの中での武士の起こり、農民の成長変化などに現われてくる人々の姿がある。

●平安遷都ごろの農村

奈良時代も終わりのころの784年、桓武天皇は山城国長岡京へ都を移すことを決めた。それまでに、寺社や軍役に出て働かされ、疲れきった農民たちが、また働きに駆り出される不安におののいた。794年の遷都のときには、出雲地方から数千人もの人々が仕事をさせられた。その上、701年から200年間に31回もの飢饉が起き、当時の農村の人々は苦しんだ。

9世紀の延喜式によると出雲地方約1万ha、石見地方約5300ha、隠岐650haの水田は、現在の約3分の1程度である。こんな中で飢饉があり、農民は苦しむ。苦しい農民は班田を捨てて逃げ出し、浮浪者や雇われ者になって富豪のもとで働いた。「三世一身の法」「墾田永年私財法」によって、中央貴族や寺院、豪族は土地を開墾して私有地を増やし、律令政治は足元から崩れていきつつあった。農民は団結して、律令政府に池や溝を掘る要求をして、勝つようになるまで成長もし、郡司も農民と結んで国司と対立していくという変化が見られる時代だった。

・神火事件と俘囚の反乱

神火事件は8～9世紀にかけて全国的にみられるが、出雲地方は特に多い。続日本紀には「病死者や凶作が続き、その上に神火がおきて正倉が焼けた。これは国司や郡司が神さまの心にそむいた祟りである」と書かれている。おそらく最初のころは郡司の職をめぐる「いやがらせ」であったろうが、終いは郡司も一緒になって火をつけ、税の帳簿や年貢の置き場所をなくする狙いがあったのだろう。俘囚とは、蝦夷の反乱で敗れて降伏し、とりこになった人々のことである。意宇、出雲、神戸の3郡では、この人々の反乱が起こった。苦しい労役に反抗して立ち上がったものだろう。

●石見の荘園

荘園は8世紀の後半から800年の間、日本の各地に分布していた。貴族、寺社、豪族たちが競って山野を開拓して荘を拡大し、国司の力がなくなると、荘園は有力な中央の貴族、寺院に寄進され、

不輸不入の特権を得て半独立国のような荘園へと変化していった。石清水八幡宮の例でみると、1072年、荘園整理令のときは出雲には1か所もなかったが1158年には8か所にも増加し、石見では適摩郡の大国保に1か所ある。

●平安時代の仏教一円城寺・高野寺一

平安時代、最澄と空海に始まる天台、真言の山岳仏教が起ると、その影響が地方にも広がった。平田市の鐔淵寺が天台宗比叡山延暦寺の末寺になった。僧侶になれば農民のような苦しい負担が免除されていたので、志願者が多く、その勢力も急速にのびたものであろう。

三瓶町野城の円城寺もこの時代に始まり本尊の千手観音像は、僧行基の作だと言い伝える。温泉津町井田の鏡向山の中腹に真言宗の高野寺がある。この寺は弘法大師が開いたと伝えられ、唐草文様の珍しい「ぼん鐘」や、江戸時代の飢饉の様子を記した古文書などがある。

6節：鎌倉時代

1184年に源頼朝から石見国の御家人に与えた下文に「石見国の御家人は、押領使・藤原兼高(のちの益田氏)に従って平家を追討せよ」とある。源氏方につき、鎌倉幕府と結びつきながら勢力を張った石見随一の益田氏や地頭として勢力を持っていた久利氏などの武士団によって、郷土も封建支配の仕組みが次第に整っていったと考えられる。'

●源平合戦と郷土

「一の谷の合戦で、平家方に味方した武士、出雲では塩冶大夫、多久七郎、朝山記次、横田兵衛維行、石見では案主大夫、横川郡司・……」と源平盛衰記に記されている。郷土の武士が源平合戦にどのようにかかわったかを各種の資料で調べてみると、出雲部は平氏に、石見部は源氏に味方する者が多かったと考察されている。石見部が源氏に組みしたのは、豪族化していた益田氏との関係で容易に想像される。このようにして合戦後、出雲では守護としてやってきた佐々木氏が、石見では最初から源氏方であった益田氏が勢力を伸ばしていった。

●郷土の守護・地頭一石見の益田氏

・益田氏の発展 永久年間(1113～17)、藤原定通は石見国司として那賀郡井甘郷に住みつき御神本国兼と名乗る国兼の曾孫・兼高の代までに土地の開拓や買取り、国の土地を私有化して地方豪族となり、本拠を益田荘へ移し益田氏と名乗る。鎌倉初期には石見国を支配する。

・益田氏の領地 鎌倉時代初期には美濃郡、那賀郡、遭摩郡、邑智郡、安濃郡を治む。領地としては、西の鹿足郡を除く石見全域に分布していた。領地を増やした方法としては、益田氏が国衙役人の地位を利用して国衙領を私領化していったり、頼朝と親交があった九条兼実を通じて頼朝に味方して更に発展したと推測される。

・益田氏の石見守護説 益田氏は合戦後、石見国を支配するほど発展したが、石見国の守護名は鎌倉期の史料から出ないことから実質守護であったろうとの推測と、守護代の肩書きで実質的に守護の務めをしていたと推測する人もある。

●出雲の守護・佐々木氏

平氏に味方して敗れ去った武士団が多かった出雲部へは守護を命じられた佐々木氏がきた。佐々木氏は、弟や一族を地頭として配置し支配するという方法をとり、益田氏とは異なっている。佐々木氏一族の支配地は惣領の塩冶氏と合わせ、八束、簸川、能義、松江、出雲、安来の三郡三市にま

でまたがる521町に及ぶ広大なものであった。

●郷土の地頭・久利氏

久利氏はもと清原氏と言い、通摩郡久利郷を拠点に勢力を張った武士で、11世紀半ば以降久利郷の郷司となっている。久利氏は国衙役人である郷司の地位を利用しながら、久利郷を私領化しつつ、さらに支配を広げ、12世紀の後半には、久利、仁万、雨河内の3郷の領主となっている。また当時の地頭には、鳥井、大家西郷、波瀬、井尻、川合吉永など7人が挙げられている。

●文永、弘安の役と郷土

蒙古の2度にわたる襲来は幕府や人々に大きな不安をかきたて、西国の御家人に対して異敵への警護を指令し、3度目の襲来にも備えて、1281年に18の砦をつくったと記録されている。

石東地方では、○五十猛町大浦○鳥井長笠ヶ鼻○静間町弓辺・長久町の的場○温泉津町などに砦が作られたと記されている。今は地名となっているが、弓の練習場や防塁、櫛島砦などが設けられたと伝えている。

7節：室町時代

1. 隠岐に流刑された後醍醐天皇

13世紀ごろから鎌倉幕府の支配が緩み、関東の御家人も惣領制の解体で力を失い、幕府への不満が深く静かに広がっていった。後醍醐天皇は「神国日本の政治は天皇がやるべき」との考えで討幕計画を立てかけたが、1324年に発覚し失敗、1331年にも再度計画が失敗し、1332年に隠岐島へ流刑された。

後醍醐天皇は11か月間島におり、隠岐を逃れて名和長年を頼りに伯耆の船上山にこもった。そこで天皇が討幕の運動を起こそうとすると、県内の武士は幕府を捨て天皇に味方した。大山寺から多数の僧兵や出雲の守護などのほか、石見からは三隅兼連、佐波顕連など4,000人近くが集まった。これは同時に、この後59年間の南北朝の動乱の幕開けの時ともなった。

2. 南北朝の争乱時代と郷土

後醍醐天皇の討幕運動の知らせは、全国の北条氏に反対する勢力を力づけた。その動きに幕府は驚いて足利尊氏をさし向けたが、尊氏は幕府を裏切って天皇を助け、京都の六波羅探題を襲ってうち破った。鎌倉は新田義貞によって滅ぼされ、幕府はわずか2か月の戦乱で141年の歴史を閉じた。

天皇は播磨で楠木正成に出迎えられ、1333年京都に入るが、その先発隊は出雲国の守護たちであった。田舎の一守護から一躍、天皇の有力な武將に成り上がったのである。しかし、旧幕府系の武士は不満を募らせた。こうした中で北条氏の生き残りの兵が鎌倉で新政府に反乱を起こした。それを鎮めるために足利尊氏が鎌倉へ向かい、鎮圧の後、天皇に反対し反乱を起こした。天皇軍は新田義貞と出雲の塩冶高貞を差し向けたが、塩冶高貞は足利尊氏に寝返り、天皇軍を破って尊氏とともに京都を占領した。京都の合戦で名和長年は戦死し、足利尊氏も一時は敗れて九州へ去るが、1336年、再び京都に攻め入り、後醍醐天皇は吉野に逃れ、これから56年間、日本国中が乱世に入るのである。

●足利尊氏に反抗した石見の武士

足利尊氏の弟直義と高師直の対立で直義は師直に勝つが、そのあと尊氏に殺される。ところが尊

氏のやり方に反対した尊氏の子直冬は父を憎み、兵を挙げた。直冬は長門(山口県)の探題の長官で、石見の益田氏の分家・三隅兼連と邑智郡の地頭・佐波顕連を率い、1350年、江川で幕府軍と対戦した。しかし敗北し、顕連は戦死し叔父の佐波胤連は大田に逃れ、大田城山に砦を築き永禄年間まで続いた。

1353年、足利直冬が南朝に味方することになり、石見の益田兼見、因幡、伯耆の山名時氏と手を結び、尊氏を京都から追い出すが、2か月後、尊氏が反撃し、三隅兼連は戦死、直冬は安芸へ逃れてひっそりとすごした。

3. 守護大名～「六分一衆」～

山名氏は、室町時代の守護大名の中では京極、赤松、一色らとともに四職と呼ばれ、全国で指折りの大名となる。南北朝時代には足利直冬の反乱に加わり南朝方に味方したが、1362年、室町幕府の足利義詮の誘いに乗って幕府側に寝返った。山名時氏の死後も幕府について活躍し、1379年には和泉、出雲、備後、隠岐の守護に任命され、全国66か国のうち11か国を自分の手に治めた。山名氏が幕府につくと出雲地方の武士はすべて幕府側につき、やがて56年間、南北朝の動乱は終わりを告げ、室町幕府は天下統一を果たした。

4. 下克上

●大内義弘の応永の乱

1399年(応永6年)、周防、長門、石見など5つの国の守護をしていた大内義弘が、恩賞問題で不満を持ち、和泉の堺に5,000の兵でたてこもって応永の乱を起こした。出雲、隠岐の守護だった幕府方の京極高詮は、幕府側で出雲(赤来町)の地頭・赤穴常連らを加え、大内側には津和野の吉見弘信、益田の益田兼世らの石見武士が加わって合戦を起こしたが、突然、石見200騎が大内軍から離れて幕府側に寝返ったため、大内軍は1か月で敗れた。

●姉小路尹綱の反乱

1411年(応永18年)、飛騨の国司・姉小路尹綱が反乱を起こした。幕府は出雲の守護・京極高光にこれを討つように命じた。京極高光は赤穴弘之(赤来町、赤穴荘の地頭)、邑智郡の土豪・佐波幸連ら2,500の兵を連れて反乱を抑えたが、佐波幸連は恩賞が少ないと怒り、赤穴弘之と連れ立って出雲の国へ帰ってしまった。守護がいかになめられていたかを示すものである。

5. 戦国の世

●尼子氏のおこり

尼子氏は出雲・隠岐の守護代として能義郡広瀬町の富田城にいたが、3代目尼子経久の時、幕府の統制からはずれ命令も聞かなくなったので、守護代の職を奪われ富田城を追われる。しかし、16世紀に入ると勢力を大きくし、出雲周辺の地を勢力下に治めたので、石見の国にも強い圧力が加わってくる。

1521年、尼子軍は石見に兵を入れ、大内氏との間で大乱戦が始まるかにみえたが、12代将軍義晴の仲介で正面衝突は避けられた。このあと、尼子経久は毛利元就を味方にして安芸の銀山城で大内軍に大勝し、出雲、隠岐、石見など11か国148万石を支配し、戦国の世で風雲のごとく勇気と知恵で全国トップを切って戦国大名にのしあがった。

●大内氏と毛利氏

1540年(天文9年)、毛利、大内氏の連合軍と尼子氏の大合戦になった。5万の大軍の尼子

氏は赤来町から大和村都賀、羽須美村口羽を通過して江の川上流から広島県に入り、毛利氏の郡山城を攻めた。毛利氏は巧みな作戦で尼子氏を破り、これ以後尼子氏は大きく崩れていく。1542年、今度は逆に大内義隆と毛利元就の連合軍が、尼子氏の本城・富田城を攻めたが敗退し、尼子氏は一時的に勢いをもち直して久利城や石見銀山を取り返し、広島、岡山県境まで追った。大内義隆はこの戦いで勢力を弱め、家来の陶晴賢に殺されて大内氏は潰れ、1555年には陶晴賢も毛利元就に滅ぼされ、毛利氏は山陽で大勢力となった。

●戦国時代の石東地方の動き

島根県内の戦国時代は、尼子氏の成長と没落そのものであり、石東地方の動きも尼子氏、毛利氏等の対立の一コマとして、途切れ途切れの様子を探ることができる。

(1) 戦国時代の久利氏

久利氏は終始大内側についていた。1540年(天文9年)、久利城を攻めてきた尼子の兵に対しよく戦い、これを防いで感謝状をもらったり、1541年、大田で尼子軍と戦った記録もある。1543年には富田城を破った尼子晴久が石見に進軍し、久利郷を全滅させ久利氏は大内氏のもとに逃げた

(2) 石見吉川志と尼子氏

石見吉川氏は14世紀初頭、石見国邇摩郡津淵村(温泉津町)の地頭となった吉川経茂を祖としている。温泉津の山間部を本拠としていたが、海岸部へ勢力拡大の過程で福光城に本拠を移した。1581年の羽柴秀吉が因幡攻撃の時、4,000人と兵と農民と共に鳥取城にたてこもり、5万の秀吉軍を相手に戦ったが、経家は最後に味方を助けるため切腹して果てた。35歳であった。

(3) 物部神社と大内氏

1542年1月、大内義隆は石見銀山を取り戻すため、3万の大軍で山口を出発、4月に川合の物部神社に詣でて戦勝を祈り、「了戒の太刀」を奉納、この刀は明治43年、国の重要文化財に指定された。

6. 石見銀山

●石見銀山の開発

石見銀山は1526年、博多の商人神谷寿貞が出雲国で銅を買うため日本海を航海中、南の陸地がピカッと輝くのをを見て船頭に聞くと、「あれは銀峰山です。清水寺という観音様を祀った寺があり、その霊が時々光を発する」と聞かされた。信仰の厚い寿貞は温泉津港に船を泊め、山に登って観音様に参ったとき、足元に鈍く光る石の塊を見つけた。これが「石見銀嶺山清水寺天地院縁起」に記されている銀山発見の伝説である。

寿貞は山師・三島清右衛門と3人の掘子で採掘を始め、露天掘りで採掘した鉱石を博多に送って精錬したが、7年後の1533年、中国の灰吹法の技術を取り入れて現地で精錬を始めた。

●石見銀山の争奪

中国地方に活躍した大内、毛利、尼子氏が三つどもえの戦いを銀山を中心に繰り広げた。戦国時代の争乱で戦った戦国武将たちは、遠くに出て戦うには食糧やその運搬に多額の軍資金が必要だった。石見銀山の銀鉱は良質で、1539年には年500枚(約9,000万円)を掘り出し、質量ともに日本一の銀山となった。1562年には年5,000枚(約9億円)に伸びている。

大内氏は、銀山を守るため矢滝城を築いた。しかし、川本温湯城にいた小笠原長隆の軍に奪われた。

2年後、大内氏は銀山を奪い返したが、尼子経久は大軍を差し向け銀山を攻めた。石見の武将小笠原、三隅、益田氏などが尼子に味方したため、大内氏は銀山を手放したが、さらに2年後の1589年、また大内氏が返り咲き銀山を所有した。しかし、次の年、尼子晴久が毛利元就を攻めている時に小笠原氏がスキをついて銀山を奪っている。

●忍原(新原)の合戦

1556年、毛利の武将吉川元春が大森に進軍してきた。銀山の山吹城、矢滝城には尼子氏の刺鹿長信、高畑遠定がいたが敗北。1558年、毛利元就は石見勢3,500騎で城を攻め苦戦のとき、尼子晴久が援助して15,000の兵を差し向け赤名と銀山を攻撃し、尼子軍は川合町忍原で毛利軍と対戦して、1,000人以上を討ち取って山吹城を奪い返した。

●毛利軍の山吹城への総攻撃

毛利氏は一度の失敗に懲りず、翌1559年、温泉城を包囲した。尼子晴久もこれを助けるため援軍を出したが、江川が大雨で渡れず引き返し、温泉城の小笠原氏は毛利氏に降伏した。毛利氏は銀山の最後の砦、山吹城に総攻撃をかけた。城を守った本庄常光は強力で、3日間で5,000人からの死傷者を出したが、毛利氏の誘いで本庄氏は城をあけ、日本一の銀山は毛利元就の支配となった。

●温泉津の発展

温泉津が確認できるのは1558年の毛利元就の連署状写である。また、このほかに浜田や波根、長浜、須津、中津など、すでに中国でもその名が知られた港として賑っていた。その後、16世紀の銀山発見により銀の積み出し港として発展を経て、毛利元就の支配の時代を迎える。元就は、温泉津港が良港であり水軍の根拠地になることから港口に鶴の丸城を築いた。やがて石見銀山と結びつき、大きく発展する素地が培われていくことになる。

7. 室町時代の産業と文化の発達

石東地方では「市」の大規模なものが発生している。彼岸市がそれである。1584年、薬師堂が完成してから毎年薬師市が開かれるようになり、大田周辺から竹や馬などを出して販売した。また1585年ごろ、小笠原氏の進めで田植囃子をまとめ、神社の祭礼等で現在も引き継がれている。

8節：安土桃山時代

室町時代の末期(戦国時代)には外国との貿易・国内の交易が盛んとなった。この時代の主な港は石見には波根、大浦、馬路、温泉津、江津、桜井津、浜田、長浜があった。これらの港に出入する船は北国船、因州船、但州船等であったが、これらの船に入港税をかけ、領主の重要な収入としていた。今の波根駅付近は、波根湖(現在は干拓田)と外海との通水路になっており、波浪の害から土堤を守るために柳が植えられたりした(現在の柳瀬である)。今から250年前、久手～柳瀬間に切り通しを作り外海と通じさせた。これを掛戸と呼んでいる。波根港は大津に変わってだんだん繁盛し、港と奥部へ続く道路でほぼ現在の町並みが出来た。

温泉津港は、戦国期には銀の積み出し港であり、銀精錬のための木炭や労働者の生活物資を集積する拠点として賑った。また、波路浦には「唐人が浦」と呼ばれる地名も残っており、外国人も居留したと思われる。当時の薩摩藩主島津義久の弟家久は1575年、温泉津で1泊し、各地の商人武士と会っている。当時の薩摩は、南海貿易の重要な基地であり、石見銀山と深く関わっていたと考え

られ、当時の石見銀は東南アジアの貿易の花形で、温泉津はその銀貿易に関わる国際的な側面をもっていたのではないかと考えられる。

1. 豊臣秀吉の統一事業と石見銀山

豊臣秀吉も石見銀山に目をつけ、この銀を利用しようとし毛利氏との協同経営にしたが、実際は秀吉の支配の下に置かれていた。毛利輝元が京都に行く時、金銀錢を50余隻の船で運んだという記録が残る。天正年間には銀の生産が多くなってきて、秀吉の元には1年間に2000~3000枚が届けられたという。この銀が秀吉の権力と富の基礎となり、桃山文化を生み出したり、朝鮮半島への軍事進出に必要だった戦争費用を石見銀がまかなってきたともいえる。

2. ポルトガルの東洋貿易と日本銀

●南蛮貿易と銀

ポルトガルは16世紀から17世紀の半ばごろまで東アジアを中心に植民地貿易を発展させる。東インドから胡椒などを輸入し、リスボン港に荷揚げして、ヨーロッパの商人が売り出した。しかし、ポルトガルの弱みは東洋の品を買うために銀がないことだった。そこで、中国の生糸を日本へ持ち込み銀に換え、アジアの商品を買う。その中心が石見銀だった。17世紀の初めには世界の銀産出量が400トンで、石見銀は200トンが海外に出たと推測され、いかに石見銀山が世界的に重要であったか推測されるものである。

3. 石山本願寺と郷土

1531年ごろから50年間は銀山をめぐる争奪の際中で、大内、小笠原、尼子、毛利の攻防が繰り返され、1562年(永禄5年)に毛利の手に落ちた。天下統一をめざす織田信長は、一向一揆の本拠地である石山本願寺(現在の大坂城付近)に築城を考え移転を迫ったが、1570年、本願寺の蓮如は退去命令を無視し、決戦を覚悟して門徒に立ちあがることを訴え、前後11年間に及ぶ石山合戦がはじまった。

石見門徒も軍勢や銀を送っている。大森西性寺4世・善可は従軍中に戦死、大森安養寺の法祐は石山にたどり着いて13年間籠城参戦したが討ち死にした。

4. 細川幽斎(1534~1610年)と郷土

細川幽斎は安土桃山時代の武将・歌人。豊臣秀吉が九州平定するとき、居城の丹波の田辺城を出て山陰沖を航行し秀吉の陣を見舞い、仁万に上陸の後、石見銀山を訪ねている。

9節：江戸時代

●概要

江戸幕府は全国を250余りの藩に分け、強力な中央集権的政治を行ったが、幕府自身全国の4分の1という広い直轄領(天領)をもち、巨大な財力を蓄えた。郷土は、石見銀山を中心とする天領に属し、奉行9人、代官50人によって約260年間支配された。

信仰面ではキリスト教禁止令で信仰の自由は絶たれたが、郷土には信者がおり、密かに信仰は続いた。また、この時代は災害や凶作の連続で暮らしはつらかったが、その生活難を切り抜けるために、新田の開墾や新作物の栽培をしたりしている。一方、武士のむごい支配に対し、農民は百姓一揆で反抗し、町では打ちこわしが起こっている。

17世紀半ば過ぎになると、幕政が安定し、産業や文化も進み、富を持つ町人中心の元禄、化政

文化が栄えたが、商業の発達は自給経済を壊し、幕府は財政難に陥った。幕府は再び幕政の改革を図ったが不成功に終わった。19世紀になると外国からの圧力も強まり、江戸幕府の政治は国内外とも行き詰り、明治維新を迎え、近代国家へと移行するのである。

1. 江戸時代の郷土

- ・1600年(慶長5年) 関ヶ原の戦いで豊臣氏が敗戦し、山陰地方から毛利氏の勢力は一掃され、出雲、石見、隠岐は江戸幕府の直轄天領と幕府の指図でおさめる藩になった。
- ・1601年 大久保長安に2万石が与えられ、石見銀山の初代奉行となった。当時、石見は6郡(邇摩、安濃、邑智、那賀、美濃、鹿足)に487か村があった。石見の西部、津和野では坂崎出羽守が鹿足、美濃のうち3万石の領主となった。
- ・1617年(元和3年) 因幡国鹿野城から移った亀井正矩が4万3千石の藩主となった。
- ・1619年(元和5年) 古田重治が那賀、邑智、美濃3郡のうち5万石の領主に着任したので石見は3分された状態になり、江川以東の石見銀山周辺や美濃・鹿足内の鉱山所在地4万5千石が江戸幕府直轄の天領となった。
- ・1675年(延宝3年) この75年の間に銀山奉行は8名が交代した。
- ・1866年(慶応2年) 長州軍の石見進出により最後の代官・鍋田三郎右衛門が陣屋を捨てて逃げるまでの190年間は、37名の代官が銀山経営を中心に天領支配にあたってきた。

天領支配のため、石見銀山大森に奉行所(のち代官所)を置き、代官以下数人の役人と地役人が行政事務を担当した。大森では、地方役所のほかに銀山経営を専門に担当する銀山方役所が置かれた。天領区域内には、口留番所12か所、海辺見張番所7か所などが設けられた。天領内での変動はたびたびあり、1643年から1682年までは安濃郡20か村が吉永藩となったり、広瀬藩領であった飯石郡が1685年から5年間天領になったこともある。

2. 吉永藩時代の大田

1643年から1682年の40年の間、加藤内蔵之助明友が安濃郡を支配した。明友は当初陣屋の候補地を大田村大沢としていたが、水質の関係から吉永辰山(現在の稲荷山、善林寺付近)と定め、会津若松42万石時代の家臣の中から選んだ154名と共に移り、吉永藩が形成された。藩主明友は40年間に1度しか帰藩していないと伝えられるが、小藩であったことから藩財政の確立に努力を傾け、土地制度の改革や殖産政策をおこなった。

- 1670年、伝染病で領内の牛が死亡。種牛を購入して三瓶原に放牧、各村に分け与えた。
- 浮布池を利用して鯉の養殖を開始、3つの水門から下流の灌漑用水の確保に努めた。
- 桐、はぜ、柿、梅、漆などを荒地に植付け、植林も奨励した。
- 各地に溜池を作り灌漑用水を確保、静間川を改修し堤防を造り、洪水を防止した。
- 飢饉に備え米麦の貯蔵、その他交通路の整備や一里塚を築くなどの政策を実施した。

江戸幕府ができて40年、幕府は諸藩の動きに厳重な監視を怠らず、法度違反等の理由で所領を没収、あるいは、改易移封をして將軍独裁を強化する方針で臨んでいた。

3. 石見銀山の繁栄

近世初頭の「石見国銀山旧記」には、次のような記録がある。

『慶長の頃より寛永年中の大盛、土稼の人数20万人、1日米穀を費すこと1,500石余、～中略

～されば銀山近き津々浦々へ四方の大船競い繋ぎ、五穀の類は謂ふに及ばず、和漢の珍器重宝に至るまで多く集まり来る事、恐らく日本の内、此銀山に勝るまじと申し伝えたり。』

こうした銀山の盛況は、銀山経営に天才的頭脳を持った初代奉行大久保長安の手腕と、山師安原伝兵衛によってもたらされたものである。特に銀山の繁栄に貢献したのは釜屋間歩の発見で、釜屋間歩だけの銀の生産は月に600貫に延び、1年間の運上金は3,600貫(約14トン)にもなった。1603年(慶長8年)、家康の招きで長安とともに安原伝兵衛は伏見城にのぼり、家康は着ていた「道服」と「扇子」を与えた。「道服」は1968年に国の重要文化財に指定された。

●銀山経営のしくみ

石見銀山をはじめ各地の鉱山は幕府直営を原則としたが、産出高の少ない鉱山は山師個人の経営に委ねることが多かった。幕府直轄の鉱山に対しては、「山礼53ヶ条」という法律で特権と保護を与え、鉱山に対する藩権力の介入を許さなかった。幕府直営の鉱山を「御直山」といい、山師個人の経営する鉱山を「自分山」とよんだ。

「御直山」と「自分山」の間歩の変遷表をみると、御直山の数も時によって変わっているが、自分山と違って直営であるから公費をもって掘り続けることができた。自分山は収支を度外視してはやれないので、休山するものが多かった。文久のころ(1860年)は、御直山7坑、自分山7坑、合わせて14坑だけが働いている山として記録されている。

●銀山労働者の救済制度

「佐渡の金山、この世の地獄」と言うような残酷物語は、石見銀山にはほとんど残っていない。銀堀に対しては、「銀掘御取囲」として「家族人別へ1日1人に米2号5勺つつ生涯召付けられ候」と、労働災害に対する家族扶助料が支給されたり、また「湿気石粉油煙の毒気受け」保護を要する者に対しては「御勘弁味噌」が与えられたり、その他「子供養育米」の制度や極貧者に対する救済が行われ、労働力が少なくなることを防止する対策がとられていた。

●大阪納めの経路

こうして精錬された銀は1か年の出来高をまとめ、1包505匁ずつ梱包し、徳川將軍家の葵の紋の荷札をつけ、牛、馬1頭に2個ずつ背負わせて次の道順で輸送した。

大森一堂原一別府一小原(粕渕)《銀付替え昼食休み》、一浜原一九日市《泊り百姓夜中御番》
酒谷一赤名《川原にて銀付替》一室一布野《馬くたびれ候時は布野にて銀付替》一三次《迫旦》
一吉舎《昼食休み》一甲山《狸》一《御調川原にて銀付替・昼食休み》一尾道《泊り船積み》
一鞆一白石一水島一下津井一大島一牛窓一室津《御銀船に積替》一網干一飾磨津一高砂一明石一須磨一兵庫一西ノ宮一尼ヶ崎一大阪川ロー伝馬橋一高麗橋一大阪御銀蔵。

大森から約30里、陸路最短距離がとられている。この輸送は、すべて沿道各村の負担でなされ、大名領内は赤名より備後三次までは松平佐渡守、三次より尾道までの陸路および尾道より播州室津までの海路は松平安芸守、室津より大阪安治川までは酒井雅楽守というように、沿道の名主に責任を負わせた。このため沿道の各村々は、人足や牛馬の供出をはじめ警備、接待などかなりの負担をさせられた。このことから、赤名峠を越す近在の21か村の村方は負担に困り、広瀬藩主や代官所へ訴えたり、争議にまで及んだ。この助郷役が、沿道農民にいかにか大きな負担となっていたかを知ることができる。

4. 天領支配と検地

大名とその家臣団の生活を支えた基盤は農村からの年貢納入であった。「農は納に通ずる」から封建支配者は、いつでもどこでもどうすれば年貢収入が増加できるかに最大の関心と努力を払った。そこで領内の土地を耕作する農民の名前と年貢額を決定する検地を実施した。

銀山領における検地は、1602年ごろから大久保長安によって行われ、「大久保縄」とか「石見検地」と呼ばれ、伊奈備前守忠次の「備前検地」と並んでこれ以後、徳川幕府が実施した全国検地の基準になるものといわれる。長安の検地では太閤検地の基準を改め1間を6尺1寸としたことから石高を増す結果となり、農民負担が増加した。そのため検地に対する農民の反対や抵抗も強かったといわれている。1村全体の田畑に対する検地は、大久保石見守、竹村丹後守のときだけしか行われなかったが、新しく開墾した田畑には、新田検地がその後も実施され年貢の徴収をはかっている。

5. 農民統制と地方政治

●村のようす

農村を支配する仕組みを地方制度といい、天領では村方支配のため代官所に地方役所を置き、庄屋、組頭、百姓代など地方三役を通じて年貢徴収を主とした地方政治にあたった。また、村内に五人組が組織され、年貢米の納入等すべての面で連帯責任をとらされた。年貢の基礎になるものが村高で、地租改正後の地価にあたる。村高決定のために田、畠、屋敷を一筆ごとに測量して、その面積を出し、その地味、水利等を調べて村高を決めた。

●農民の負担

農民の負担は、物成（本百姓の年貢）、小物成（雑税）、夫役（労働奉仕）などがあった。農民は収穫高の半分を自分の収入としていた。石東地方では8割も納めていた記録がある。ただし、これは土地を所有している本百姓だけで、残りの水呑百姓などは収穫の8割までを本百姓に納め、手元に残るのは数日分しかなかった。しかも年貢米は粒の揃ったのを納めなければならず、口に入るのは小米や雑穀等であった。

●生活の統制

農民の負担は重く、生活のすべての面で厳しい取り締まりを受けた。「農民べからず集」ともいべき72か条からなる「五人組前書」には次のように書かれた。

一つ、百姓衣類の儀は、庄屋妻子共絹紬木綿これを着るべし、平百姓は布木綿の外着るべからず、……。

一つ、田畑屋敷山林等永代売買御停止に候、……、

また、石見の農民は、実際の自分たちの生活を百姓でありながら米の飯が食べられず、水腹で朝の一番鶏から夜遅くまで働き詰めで、働き通した百姓の生活を書き残している。

●寺請制度

江戸幕府は、封建的な社会秩序維持のため切支丹を禁止した。そのため取られたのが寺請制度であり、人々はすべてどこかの寺院の檀徒とならなければならなかった。婚姻、奉公、旅行等にはかならず檀那寺の寺請証文が必要であった。これに関連して、宗門人別改帳がつくられた。大田市に残る「五人組前書」の第5条に、「毎年宗門帳を三月までに差し出すべく候」と明示し、檀那寺別に人別を記録し、役所に差し出させている。

6. 伊戸平左衛門正明と享保の時代

銀山領の19代目の代官伊戸平左衛門は、「芋代官」「芋殿様」と呼ばれている。平左衛門が石見銀山、備中、備後の代官に着任したのは1731年、西日本一帯に広がる享保の大飢饉の最中で、各地に百姓一揆が起り始めていた。

平左衛門は領内を見て村々が貧窮していることを知り、私財を投げ出し、領内の豪農、米穀商、薪炭商など物持ちから義損の名目で金を徴収し、他国から米や雑穀を仕入れて窮民の援助に努めた。ところが1732年、天候も悪く害虫の発生から西日本一帯にかけて飢え死に者10万9千人にもなる状態となった。

この年、平左衛門は薩摩の泰永という僧侶から薩摩芋の話を知り、「どんなやせ地でも育ち、常食できる」ことを知って苦心して薩摩から種芋百斤(60キロ)を手に入れ、海岸の村々へ配って栽培を勧めた。やがて石見の芋は中国地方全域に広まることになる。

7. 天領政治のいきづまりと百姓一揆

貨幣経済が発達し、自給自足の経済が崩れ始めると、幕府、藩では貨幣支出の増加をもたらし、年貢米の収入だけでは財政が苦しくなってきた。さらに18世紀前後から天災は130回を数え、大飢饉は21回にも及び、藩財政は困窮の極みに立った。

●天明3年(1783年)の大田騒動

1780年(安永9年)から毎年のように凶作が続き、田も畑も収穫がほとんどない大凶作だった。手持ちの米がなく、食べ物に不自由する農民は、彦兵衛など4名を粕戸町惣代に選び、大田南町目代孫兵衛に助けて欲しいと願い出た。

凶作で苦しむのは、神門郡大津(今の出雲市)、飯石郡三刀屋の農民も同じで1783年、ついに一揆を起こした。これを伝え聞いた大田の農民も2月1日、大田川原へ集まり、盛んにかがり火をたいて氣勢を上げた。町役人が提示した「米の安売り」にも反対し、午後6時過ぎから、粕戸町に4~500人の暴徒が集まり、商家や豪商の屋敷を次々に襲った。大森代官所から10数名の役人が到来し、代官川崎平右衛門の直書を読み聞かせて説得した結果、群集は引き揚げた。役人達は首謀者とみられる8人を牢に入れた。そこで、町の代表者が願い出て、この8人は釈放された。一揆が無血で終わったのは江戸時代の一揆の中でも極めて稀なことである。

8. 新田開発と交通

●波根湖の干拓

江戸時代の新田開発には官営と民営の2種類があった。官営には代官による「見立新田」、民営には「村請新田」、「寺社請新田」の種類があり、原則として開発後3年間は税を免れた。この地方の新田開発は31代の代官川崎平右衛門定孝の奨励により活発になったと思われる。平右衛門は、年貢を搾り取れば良いという幕府の考え方を改めさせ、農村の振興に努力した人でもあった。新田開発の主なものに波根湖新田、静間新田の開発があげられる。また、新田開発には2種類があり、「見取新田」とは、新田を開発しても耕地が悪い場合、反別を測り石高はつけず年貢を軽くする。「高入新田」は検地帳に搭載し年貢の対象となるものであった。

●伊能忠敬と郷土

幕府の天文方伊能忠敬が温泉津に来町して沿岸を測量したのは1806年6月であった。その時、忠敬は病にかかり自ら作業することは出来なかった。代わって幕府の測量技師・高橋作衛門の弟・

善助に測量させた。忠敬と善助は中島平佐衛門別荘に、その他のものはお茶屋に分宿した。一行は浜田で木星とその衛星が交食するのに合って観測し、温泉津ではお茶屋の庭に北極星の観測点を作り、ここより浜辺までの距離を測って緯度を測定している。

●水運の要所・温泉津

関ヶ原の戦いの直後、徳川家康は石見国7か村に禁制を布告して石見領有の意図を明確に宣言した。この禁制の意図としては、石見銀山支配のための日本海の高港の把握と江の川の水権の掌握が考えられる。

温泉津については、この禁制発令地7か村の中に福光村が含まれる。これは、瀬戸内の商人(毛利水軍)の勢力が浸透していた温泉津村を衰退に導くためであったと考えられる。その結果、毛利氏の勢力を一掃できたとみた代官は、銀山で必要な物資の供給地として温泉津村を蘇生させるため、1605年に「地銭永代赦免」(宅地税を永代免除)を公布する。

このような銀山奉行の計らいで温泉津の町場は急速に発展したが、17世紀中期から数十年間の銀山衰微と、銀の輸送が「銀山～浜原～尾道」経路に変更されたことにより、温泉津への船の出入は減少する。温泉津が再び発展するのは、1672年の「西廻り航路」の重要な寄港地に指定されたためである。「西廻り航路」で活躍した船が「北前船」で、固有な舟形をもつものでなく、北陸方面から西に向かい、瀬戸内海を経て上方に入る船を「北前船」と呼んだものである。

この船の活躍により蝦夷地の海産物が全国へ流通し、各地の「地船」による海上輸送が活発化し、各地で特産物が成長した。温泉津の特産物の瓦窯が近世末期から「はんど」(大きなかめ)などの丸物を生産し、「北前船」によって販路を北陸や東北まで広げていった。また、1700年代の後半には、石見の「たたら経営」が盛んになり、銑鉄の積み出しも盛んに行われた。その結果、温泉津は1700年代には石見第一の商業、交易都市として繁栄した。

9. 郷土の文化

●文化人

江戸時代初期、画の雪舟、歌の人麿とともに「石見の三聖」といわれた棋聖・本因坊道策がいた。中期以降は、頼山陽とも交わった佐和華谷、石見の左甚五郎といわれた通山貫満、生仏として親しまれた禅僧・仏乗、尊皇愛国・海防論を主張した林晩翠、石見の歌道を興した幸田草臣、石見の学問振興に尽くした恒松無事老などがいる。中でも俳人の中島魚坊は、大田の名医だった父の影響を受け俳句に親しみ、書は松花堂派を好む文人であったが、火災によって家産を失い、44歳のとき愛児を失い、無常を感じて仏門に入り魚坊と名乗った。魚坊は石見の俳人の中で全国に名を知られた唯一の人といってよい。

●教育

石見地方には寺子屋、私塾、家塾が多数ある。寺子屋には五十猛の円照寺、静間の浄教寺、大田の南の宮・北の宮の神宮寺であった円応寺、波根の善光寺、大恩寺、朝山の万福寺、阿弥陀寺、川合の物部神社、三瓶の高田神社などに開設されていた。私塾では、五十猛に生まれ頼山陽に学んだ林徳則が《晩翠学舎》をつくった。仁摩の泉善齋は京都で頼山陽に学び、帰国後《為山塾》をつくった。大田には恒松無事老の三男・恒松圭山がつくった《圭山堂》があった。家塾では大恩寺の積僧廓がつくった波根の《無可有観》があった。ここでは教科書を使い、仏教関係の学問や漢文、国文、天文学などを教え、遠くは四国や東海、北陸地方からも来校した。

大田生まれの古和は医学と教育の面で活躍し、仁摩に《古和塾》を開いた。元大森の役人であった井上拾翠は、川合の岩谷九十老の招きで川合に《恭安義塾》をつくった。

10. 第二次長州戦争と石見

1865年、長州藩は討幕派が実権を握り、再び幕府と決戦することを決意した。幕府も将軍家茂が江戸城を出発し、長州藩を討つことになった。

●戦争の費用を農民から集めた幕府

「將軍自身が戦争を指揮するのは初めてで、將軍の御恩にむくいるため奉公させ、百姓たちに強制的にわりあて、多額の金を出したものは苗字帯刀を許してもよい」と書かれた命令で、大森天領代官・鍋田三郎右衛門へ指令が出ている。石見で集められた金額は約5万両。そのほか、「村高千石につき5人」の人足も出すように命令されたが、農民は応じず、強制的に狩り出され、祖式から川本を経て広島へ行った。

●第二次長州戦争の始まり

1866年6月、幕府の軍艦が上ノ関の海上で大島に砲撃を加えたことから第2次長州戦争が始まった。浜田藩は6月9日に本隊を石州口に向けさせたが、長州藩は大村益次郎を指揮官として石州国境の横田口、高津口を突破し益田に進出した。浜田、福山藩は打ち破られ、益田は占領された。浜田藩の求めで松江藩は応援を繰り出し、7月1日には松江藩の軍艦が温泉津に着き、本隊と一緒に浜田へ着いた。7月16日、浜田、福山藩はまた負け、浜田藩は勝手に停戦交渉を進め、藩主は城内から逃げてしまい、他藩も戦意なく引き揚げ、浜田藩兵は城に火をつけて逃げた。浜田の亀山城はあっけなく落ちた。

11. 大森代官所の滅亡と百姓一揆

●百姓一揆

長州軍はなんの抵抗も受けず、天領の石見銀山へと進軍した。銀山の代官鍋田三郎右衛門は、7月22日夜、家来を引き連れて邑智郡の粕渕から岡山県の倉敷へ逃げてしまった。戦争のため物価が高まり、その上、代官がいなくなって大田の民衆の怒りが高まった。7月24日、400人の農民が集まり、地主や大商人に対する怒りをぶちあげた。そこから、恵比寿屋、静間の山城屋、五十猛の酒屋や大田長久の商家などを襲い、25日正午ごろ、鳥井の農民は解散し、その他の者は銀山を目指して久利の市原で長州の鉄砲に撃退され解散した。

1866年の一揆は東北から九州に至るまで全国に起こり、幕府の滅亡と新政府の成立を早める大きな原因になった。

10節：近代

明治維新は郷土にも大きな変革をもたらした。幕末からますます激しくなった百姓一揆の動きは、新政府のもとでも続き、小作争議などへと変化していく。また、新政府が打ち出す近代化の政策も次々に郷土で実行され、大森県の設置や浜田県への統合、学制に基づく小学校の新設、そして鉄道の敷設などめまぐるしく時代は進んでいった。

1. 廃藩置県

●大森県から浜田県、そして島根県へ

大森県は浜田県と石見銀山領、それに隠岐県を合わせて誕生した。それに併せて大森と浜田に置かれていた長州藩の民政方は引き揚げ、1869年10月に隠岐県の知事だった真木直人が大森県知事として着任した。1870年(明治3年)には大森県は浜田県と改められ、県庁所在地が大森から浜田へと移った。1871年には津和野藩の領地が廃藩置県でこの浜田県に組み入れられ、石見地方全体が浜田県となった。

1876年(明治9年)には浜田県は島根県と合併するが、鳥取県との合併などもあり、現在の島根県の範囲が確定するのは1881年(明治14年)になってからのことである。

2. 新政府の宗教政策

●切支丹の弾圧

明治政府のキリスト教に対する態度は当初幕府の政策を受け継いだものであった。津和野藩には特に信仰の厚い153人が集められた。彼らは真冬に池に投げ込まれるような拷問を受け、改宗を迫られる中で30人の殉教者を出した。毎年5月3日、津和野では「乙女峠まつり」が行われる。全国から集まったキリスト教の信者が乙女峠へ行き、そこでのマリア堂で殉教者の心を慰めるミサを行うのである。

●廃仏殿釈

1868年、「神仏分離の太政官達」によって、神社にいる僧侶に僧籍を離れて神官本来の任務に就くことを命じ、神社に仏像や仏具を置くことも禁じた。以後、神社と寺の間に争いが起こり、寺院、仏具、経文などの破壊運動が起こった。これを廃仏殿釈という。

新政府は神道を国教とする国の方針を明らかにして(1868年、太政官布告)、神道以外の宗教を圧迫した。このように、明治政府は真の意味での信仰の自由を認めていなかった。

3. 自由と民権をひろげる運動

明治政府は徴兵制度や地租改正など、新しい政治の布石を打ってきた。しかし、国民の側では期待したものが見られず、全国的にも一揆の数などは幕末以来一層多くなっており、民主主義の要求は高まっていった。

●戸籍簿と反対一揆

新政府の下で戸籍を作ることになった。それまでは寺院が宗門改めとして行っていた。僧侶たちは、新政府のやりかたに反対だった。現在大田市の長久町東用田の一向宗蓮教寺の僧らを中心に一揆が起こり、邇摩郡(大國)や邑智郡(川本)にも広がった。

戸籍簿に対する反対というだけでは百姓一揆にまでは至らなかったであろうが、「畑方上納四割増しの儀は承知せず」とか「戸長役人をかたきとる」など、農民が持つ新政府への不満の気持ちをとり、それも一揆の内容に持ち込んだことが三郡にまで広がった理由である。

●徴兵令や地租改正に反対する農民の運動

徴兵令に対しては1873年、能義、楯縫、神門(のち簸川郡)の3郡で、地租改正に対しては1874年、出雲、能義の2郡で農民の運動が起きている。竹槍やムシロ旗を掲げた一揆であった。特に徴兵制に対しては反対が強く、政府はたびたび命令を出したり、役人を出して説得にあたりせたり、自分から自主的に希望した者には褒美を出したりした。しかし、徴兵令にある免除規定を使った

形で徴兵をまぬがれようとする者は多かった。

●自由民権運動

自由民権運動は、新政府への不満や要求が大きな国民運動として盛り上がり、民主的な国の議会を開設することを目標に全国的な広がりとならび全国的な高まりをみせたものであった。

島根県では、松江を中心にした山陰自由党や、現在の大田市波根町を中心にした石陽自民党、益田の石見立憲自由党、那賀・邑智・美濃の石見立憲改進黨などの活躍が目立っている。

大田の石陽自民党では毎月党の会を開くほか、3回の自由懇談会を開くことにしていた。1882年(明治15年)には、「明治9年以来、全国中諸新聞の禁止・停止、あるいは各弁士の演説禁止などをとむらうため」といって、施餓鬼供養を行った。その日は小学校を休みにし、小学生を浜辺に集め、「自由政府」の赤旗と「専制政府」の白旗を奪いあう競技を行わせた。その他、地租改正条例の改定(税率を地価の100分の1へ下げる要求)の運動を盛り上げた。

●第1回総選挙

国民待望のわが国最初の国会が1890年(明治23年)に開かれることになった。当時の国会は「帝国議会」といわれ、貴族院と衆議院の2つに分かれていた。そして、衆議院議員だけが国民の中から選挙で選ばれることになっていた。

島根県でもこの年の7月、各地で選挙が行われたが、当時の有権者数は県の人口の約1%に過ぎなかった。この有権者の少なさは満25歳以上の男子で直接国税を15円以上納める者という制限があったからである。第1回総選挙の結果、1区から6区までの6名が当選した。

4. 明治初期の郷土の産業

当時の郷土産業はほとんどが単純な第一次産業であり、江戸時代の末期のころとあまり変化はなかったのではないと思われる。生産の背景となった人々の職業は、別表の「明治前期の各村職業別構成」表となって、残されている。

5. 農業の改良に努力した人々

岩谷九十老と安井好尚の2人はこの当時、農業生産の発展に尽くした人として忘れられない。安濃郡川合村の岩谷九十老は、日本経済が輸入超過で苦しいので、それを建て直す意見書を明治政府に出している。古い農業のあり方を改良し、地味や気候に合った商品作物の栽培として養蚕・製糸に力を入れ、副業として「い草」を導入して試作させたり、「こうり柳」を配って弁当行李、柳行李の作り方を広めたり、馬鈴薯を農民に勧めて農業経営を守ろうとした。

邇摩郡大国村の安井好尚も明治2年に桑苗を栽培し、蚕種を納入して養蚕に努め、大森県、浜田県の養蚕の世話係として普及に努めた。また農談会を開いて、新しい技術を広めたりした。東京で合理的、科学的な農業理論に触れて帰ってきた彼は、次々と農業の組織化を図り、新しい農業のしかたを広めようと努めた。稲作では福岡から指導員を呼んで指導させ、反当り38.24升と、従来の農法より16%も生産を高めたことが注目される。こうした農業改良事業に取り組んだのは岩谷や安井のような地主たちだった。2人はそのためにほとんど私財を投入した。

6. 学校の制度が整う

1872年(明治5年)の学制の発布で石見では浜田県に420の小学校区をつくることになった。

●授業料

満6歳になると学校に行かせることになったが、県下の就学率は1883年で56%だった。子

供たちが学校へ行かなかった理由の一つは、授業料であった。1か月1銭以上～50銭までで、学校ごとに家庭の経済力に応じて集めた。1901年(明治34年)、大森町の子供は15銭、その他から来る子供は30銭だった。1銭で米7合から1升は買った時代だったから、かなり高い授業料になった。

●大森小学校の歴史

大森は幕府の天領として文化の中心の江戸と直接につながり、明治維新のころには長州藩の支配を受けて時代の新風をいち早く受けた。明治2年には一時大森県ともなった。学制発布のあとすぐに生まれたのが大森小学校で、大田市の中では最も古い歴史を持っている。初めは寺子屋のようなものから始まったらしい。1873年、元の代官所を校舎とした。1879年、同じ場所に代官所の古い材料を使って校舎を新しく建てた。1894年(明治27年)の大森小学校の生徒数は204人で、就学率52%、1911年(明治44年)は330人で、就学率100%だった。

●大国英和学校

前述の安井好尚は1888年(明治21年)、邇摩郡大国村の勝音寺に私立大国英和学校を創立させた。設立の目的は、英語の普通科と漢文の歴史を教えることで、「知能を拡張し、以って他日、高等の学校に入る階梯たらしむるを目的とする」とある。英学を中心として将来を見通した人材養成を、彼はこの私立学校に託したものと思われる。

この学校に入学できるのは、満14歳以上または尋常小学校卒業生であり、終業年限は3年(後に、2年間の選料が加えられた)であった。授業料は1か月35銭とされていたが、学校経営は安井の自費に負うところが大きかった。

私立大国英和学校は1896年に閉校したが、当時この地方に英語による普通教育の私立学校が創立されたことはまさに画期的であったといえよう。

7. 日露戦争

1904年(明治37年)2月、ロシアに対して戦線布告し日露戦争が始まった。日本の作戦は、旅順港にいるロシア極東艦隊をくぎづけにすることから始められた。一方、ロシアはヨーロッパにいたバルチック艦隊を日本海に差し向けて戦況を逆転させようとした。1905年5月、日本連合艦隊は対馬海峡でこれを迎え撃った。日本海海戦で砲声は海を渡って石見地方にも聞こえたという。予期しない事件で当時の人々を驚かせた。

※5月28日、那賀郡都濃村の港にロシアのイルティシュ号が入ってきた。7,500トンもの巨艦が、舷側に3カ所もの大穴があけられ翌日早朝には沈没した。224人のロシア兵は武器を捨てて白旗を掲げて上陸してきた。

※28日の夕方、美濃郡鎌手村の土田港へウラル号の乗組員21人が漂着して捕虜になる。この海戦に勝利して、県下の町村は各地で戦勝を祝ったが、アメリカでのポーツマス条約の内容がわかると、人々の不満は高まり講和会議の内容に抗議する集会が開かれた。

8. 地主制度の確立

邇摩郡、安濃郡は石見地方でも1万円以上の地価をもつ大地主が最も多く集まっていた地方である。明治14年～23年、23年～40年の2つの期間に、土地を大きく手に入れる傾向がみられる。現在残されている「農商統計・農事統計」によると、明治以降のこの地域の農業生産は、地主制度という社会関係の中で行われていたことが分かる。地主たちは、参政権をもっていて政治にも参加できていた。

●小作慣行

小作制度は地主から耕地を借りるのが普通だったが、「勤メ小作」または「借家小作」と呼ばれ、家やその敷地も貸借する小作も20%はいた。地主に最も強く従属した小作農である。60%以上の小作料のほかに小作人は口米を1升から5升付けなければならず、種もみを地主から借りれば40%もの高い利子を払わなければならなかった。

9. 鉄道の建設

島根県下で初めて汽車が通ったのは1908年(明治41年)で、米子～安来間が開通した。その後、松江、出雲、大社と開通し、1915年(大正4年)、大田、1931年(昭和6年)11月に京都～下関間の山陰線の全線が開通した。1912年、小田～石見大田間の鉄道工事が始まった。田儀～波根間は特に難工事で、山の真ただ中を貫くのを避け、日本海岸にそって鉄道を走らせる方法を取った。なお、石見への鉄道開通には、大田市長久町の恒松隆慶代議士の努力があった。

10. 米騒動

●第一次世界大戦後のインフレーション

大正初期の社会は第一次世界大戦で好景気だったが、同時に物価が上がり、働く人々の生活は苦しかった。「月給取りなどの児童教育にまで及んで、中学校を中途退学したものさえ増えてきたのは、確かに生活難をうらがきしたものである」(大正7年7月:山陰新聞)と書いている。

島根県内の米騒動は1918年8月ごろからで、張り紙、投書、脅迫状など全県下で行われた。同13日には邇摩郡温泉津町、20日には邑智郡市山村、那賀郡浜田町、美濃郡高津村で、米屋や酒屋を打ち壊す行動が始まり、その後1か月間は米騒動一色に塗りつぶされている。

11. 第一次世界大戦後の郷土

●石見銀山の閉山

大正12年6月、石見銀山も不況の波には勝てず、静かにその幕を閉じた。神谷寿貞によって本格的に開発され、幕府の天領ともなり、大内、尼子、小笠原、毛利が取り合って戦い、江戸時代には佐渡とともに幕府の金蔵ともなった。幕末には深く掘っていくため地下水に悩まされ、地下から湯が吹きだし温度と湿度が異常に高くなって、ついに閉山せざるを得なくなった。

●恐慌と農村

農家の戸数は毎年減って、大正10年から昭和にかけて3,000戸も減っている。しかし、農業人口は1万6000人増えている。明治初期から近代産業の発展で、出稼ぎに出ている娘や、次男、三男が不景気の中で職を失って郷里へ帰ってきた。そのうえ、農産物の値段が大きく下がり、生活はいっそう苦しくなっていた。米は大正9年3月に1石当り50円15銭が、12月には25円13銭と半分にもなっていた。

12. 小作争議

第一次世界大戦後の農村は、米価の変動や都市に出た労働者の帰郷など大きな変化が起きていた。このころの農村は地主制度が強く、農民の半分は小作人で高い小作料を負担しなければならなかった。小作争議は1921年(大正10年)から嵐のように起こり、日本農民組合の強い影響を受けながら本格化していく。

●富山村の小作争議

富山村は山間の古い村で棚田耕作を続けてきた。当時の農家はすべてわら屋根で、部屋はむしろ敷きの板の間、小作農民は米すら腹いっぱい食べることができない質素な生活をしていた。地主は小作人をタダで使って棚田を開き、そこから高い小作料をとって利益を上げていた。農友会は、種米利子の撤廃から活動をおこし、全廃を勝ち取ったが、高い小作料問題は残っていた。1925年、村の争議は地域ぐるみの戦いになり、収穫米を納入せず地主との団体交渉を進めた。23人の関係地主のうち20人は小作料減額に応じたが他は認めず裁判所に持ち込まれ、最終的には小作料42%の減額を勝ち取った。こうした小作農民の動きが、やがて農地改革へと歴史を進展させることになる。

13. 若槻礼次郎と普選

●普通選挙法の制定から満州事変まで

若槻礼次郎は松江市出身の総理大臣である。大正から昭和に至る政党政治の時代に政治の中心人物として登場してくる。1924年(大正13年)、護憲三派内閣の内務大臣として普通選挙法の実現に努め、シベリア出兵、米騒動、原敬首相の暗殺など騒然たる時代の中、1925年(大正14年)普通選挙法は成立した。治安維持法の制定も若槻の仕事だった。若槻は2度内閣総理大臣になった。不況の中で極端な軍備の拡張を抑え、協調外交を目指したが、軍部からは「軟弱外交」と批判された。1931年(昭和6年)、関東軍は突然柳条湖を爆破、満州事変の口火を切った。軍の動きを止めることができないと悟った彼は、「政府の命令に従わせるには、連合内閣でなければならない」と主張したが、反対され辞職した。大正デモクラシーの時代から昭和にかけて、日本の政界に名を残した島根県の大政治家である。

●普通選挙法による第一回総選挙と島根県

1928年(昭和3年)、普通選挙法による第1回選挙が行われた。この普通選挙法では、満25才以上の男子に、納税額の制限なく選挙権を与え、30歳以上の男子に被選挙権を与えるというものだった。しかし、女子には全く参政権はなく、男子でも年齢の制限のうえに生活救済を受けている者、選挙期間の1年以上前から住んでいない者には権利がないなど、きわめて不完全な普通選挙法だった。しかし、これによって有権者は一躍4倍になった。

14. 戦争と生活

1941年(昭和16年)、太平洋戦争が始まり、次第に国民の生活を圧迫していくようになった。子供たちも小国民として、大人にひけをとらない銃後の戦力として扱われ、戦争の遂行に協力させられた。久手町の少年団活動を、参考にしてみよう。

- ◎貯蓄増強一戦費の確保につとめるもの。昭和18年・学童1人当り16円、20年は倍増。
- ◎桑の皮はぎ作業一学童1人当り1貫から5貫、代金は支払われ貯蓄にまわす。
- ◎開墾作業一増産活動、荒地や空地を借用して開墾。最初は甘藷栽培、後作は麦づくり。
- ◎勤労奉仕一応召家庭への労力援助。荒起こし、田植作業、刈り取り作業など。
- ◎製塩作業一砂浜に小規模塩田づくり、太陽熱で濃縮海水、製塩。

15. 原爆と終戦

1945年(昭和20年)、久手港沖で操業中の漁師が中国山地の向こうにキノコ雲を見た。それから3日後、大田駅着の列車で広島から300人の原爆被爆者が幽霊のような姿で大田駅に到着し

た。大田では広島陸軍病院が空襲を避けて移転する準備に入っていたときだった。被爆者たちは、焼け付く日差しの下で駅に敷かれたムシロの上に座っていたが、ケロイドの異臭にハエの大群。身体の水ぶくれの下にウジがわき、身の毛のよだつ光景であった。10日朝には10人、11日には40人余も死亡し、終争の15日までに99人が息を引き取った。

16. 農地改革の実施

占領軍は地主制度が日本の封建制の温床であると考え、民主化のために農地改革を命じた。日本政府は第1次農地改革を行い、不在地主の全所有地と5町(5ha)以上の在郷の地主所有地を小作人に渡すことにしたが、ソ連やイギリスの反対にあった。そのため、昭和22年～24年まで第2次農地改革が実施され、国家による買い上げ、売り渡し方式で不在地主の全耕地と1町(1ha)以上の在郷地主の小作地の強制買い上げが行われた。これは石東地方の農業の発展に大きな影響を与えた。こうして小作農は、農地改革によって自作農になり、耕作も安定していった。しかし、ここに生まれた自作農業は経営規模が非常に小さいものだったので、それが後で経営上の大きな問題を生じてくることになる。

17. 新しい学校制度の出発

1946年(昭和21年)8月に、内閣に教育刷新委員会がつくられて教育の民主化の方針が打ち出され、これに基づいて翌年3月、教育基本法や学校教育法などが制定されている。新学制では、6・3・3・4制の学校体系が生まれ、小・中学校を義務教育とした。現在の石東地方の中学校もこの年設立されたが、中学校は今までなかったため、小学校の校舎の一部を借りてスタートを切ったのである。中学校へはかなり豊かな家庭でなければ行けなかったため、新制中学校への期待は特に大きかった。またこの時始まった男女共学も当時は大変珍しがられ話題となった。

18. 石東地方の町村合併

島根県には1947年(昭和22年)に249の市町村があった。終戦後、地方自治法が制定され、市町村は国の下部機関から地域住民のための自治組織となり、行財政力を充実させなければならなくなった。こうしたことから市町村の規模の適正合理化が叫ばれるようになった。1953年(昭和28年)10月、町村合併促進法が制定され、全国的に町村合併が始まった。

●大田市制の実施

1954年(昭和29年)大田、久手、波根東、鳥井、長久、川合、久利、静間の8か町村が合併して大田市になった。さらに逐次合併は広がった。

◎1951年4月：大森と水上の両町村が合併して、新大森町が発足した。

◎1954年4月：佐比売、朝山、山口、富山の一部、計4か村が大田に編入。

◎1956年9月：大森、五十猛、大屋の3町村と祖式村の一部(宇祖式)も大田市に編入。

◎1957年の末：川本町から北佐木の一部が境界の変更で、大田市に編入。

大田の周辺では合併のもとになる自治体が3つ(大田、川本、温泉津)あり、そのどこを合併するか、あるいは独自の合併の道をとるか等について複雑な動きがみられた。特に大森町の動向が注目された。

大田市への合併をめぐる大森地区は大田市へ、水上地区は祖式、大代とともに独自の町づくりということで、住民の対立は深まり町議会も混乱したが、水上に隣接した祖式が大田合併へ傾いて、水上の方も態度が和らぎ解決に向かった。

●仁摩町制の実施

仁摩町は1954年4月、町村合併促進法に基づき、仁万町、宅野村、大国村、馬路村の4町村が合併して誕生した。合併前に問題となったのは新町の名称についてである。「仁摩町」「仁万町」の2つの意見で対立し、会合を重ねた結果、昭和29年3月、人心一新の意味から「仁摩町」に決定した。

●温泉津町制の実施

温泉津町合併の前段階として…、

◎1951年(昭和26年)に、福光村と福浦村が合併して「福波村」が誕生した。

◎1954年(昭和19年)4月、町村合併促進法の意図をたいして、財政基盤の強化と行政能率向上のため、旧温泉津町、井田村、湯里村、福波村の4町村が合併して温泉津町が誕生した。

石見の歴史年表—1

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
前約 1 万	草創期縄文	押型土器が流行。山間部から沿岸部に縄文「むら」が現れる。	
前 6,000 年	早期 前期	山陰各地の沿岸に縄文集落が誕生する。 瀬戸内、九州地方との交流が進む。山間部に交流拠点集落が現われる(石ヶ坪遺跡)	
前・約千年	後期	磨消縄文を施す土器が盛行。匹見盆地、神門川上流に大きな縄文「むら」がつくられる(石ヶ坪遺跡)	中国に青銅王国出現
	晩期	山陰西部で九州方面との交流活発。匹見盆地に大規模な「斎場」が営まれる(水田ノ上遺跡など)	中国春秋戦国時代
前約 400 年	弥生・早期	北部九州から日本海沿岸ルートと中国山地間で稲作農耕が伝わる。	
前約 200 年	中期	西部地域は北部九州や長門方面と交流が進み、拠点集落で玉作りが盛んに行われる。	
西暦 250 年	古墳・前期	石見地域の於保地盆地・益田平野にそれぞれ古墳が現われる(中山B1号墳、四つ塚古墳群)	
400 年	中期	石見西部に大型前方後円墳・大元1号墳が築かれる 石見中・西部で大型古墳が引き続き造営される。(丹花庵古墳、スクモ塚古墳、周布古墳など)	
500 年	後期	石見西部で最後の大型前方後円墳(小丸山古墳)。 相前後して石見中央部に横穴式石室の古墳が現われる(めんぐろ古墳)。 須恵器生産が県下各地に普及。窯業地帯が生まれる(浜田市日脚、益田市西平原など) 県下全域で横穴式石室・横穴墓の群集墳が盛行する(鷓の鼻・長迫・匹見和田古墳群など) 石見でも寺院が建てられる(教功寺跡、四天王寺跡、神門寺境内寺院跡、天王平廃寺跡、重富廃寺跡、下府廃寺跡など)	
707 年	康寧 4	出雲・石見など飢饉の甚だしきにより、諸社に弊はくを奉る。	645 大化の改新 701 大宝律令制定 710 平城京遷都 752 大仏開眼
758 年	天平宝字 2	出雲・石見国などに飛脚鈴各1口が与えられる。	
813 年	弘仁 4	石見国堂田が設置される。	
837 年	承和 4	石見国5郡の神社15社、初めて官社に預かる。	842 承和の変
843 年	承和 10	石見国美濃郡の一部を割いて、鹿足郡が設置される	
864 年	貞観 6	前年石見国美濃郡に漂着した新羅国の生存者24人に食料を与え帰国させる。	
866 年	貞観 8	新羅侵攻の情勢により、出雲・石見などの諸国、諸神への祈願を命じられる。	応天門の変
870 年	貞観 12	出雲・石見・隠岐など、新羅に備え警護を固めるよう命じられる。	
873 年	貞観 15	出雲・石見・隠岐などの諸国、兵卒を戒備し不慮に備えるよう命じられる。	

石見の歴史年表—2

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
874年	貞観 16	さきに石見国漂着の渤海人 56 人に、資糧を与え本国へ帰らせる。	
875年	貞観 17	石見国の史生 1 人を停め、琴師を置く。	
884年	元慶 8	遷摩郡大領・伊福部安道、部内百姓を率い権守上毛野氏永を襲撃するという（石見国守襲撃事件）	
927年	延長 5	出雲・石見・隠岐国内の官社が書き上げられ（神名帳）、神賀詞が記載される。これ以前に、意宇郡の一部と賀茂神戸を割いて能義郡が設置される。	延喜式・完成 承平・天慶の乱始まる
937年	承平 7	この頃、石見国は 37 郷・1850 戸・4884 町歩という	
996年	長徳 2	高麗人石見に来着、この日食料を与え本国に還す。	藤原道長・摂政
1063年	長徳 6	清原頼行、久利郷司職に補される。石見における中世的郷の初見。	延久の荘園整理令
1164年	元暦 1	鎌倉殿代官・梶原景時、藤原兼時を石見国押領司に任命し、出雲国平氏らを討伐するように命じる。	源義仲敗死、源頼朝に平氏追討命。
1193年	建久 4	佐々木定綱、石見国初代守護職に補任される。	
1200年	正治 2	石見国守護・佐々木定綱、石見にきた「唐船」のことにつき九条兼実に報告。	
1223年	貞応 2	石見国惣田数注文作成される。	寛喜の大飢饉
1274年	文永 11	蒙古人が香岐・対馬に来襲し合戦ありとして、石見国の所領に下向し、もし凶徒が攻めてくれば防衛するよう、幕府から命下る。	文永の役
1280年	弘安 4	この年、石見海岸に 18 の砦築かれるという。	弘安の役
1333年	正慶 2	後醍醐天皇、隠岐を脱出する。石見の佐波・三隅氏ら天皇方となる。	鎌倉幕府滅ぶ。
1336年	建武 3	出雲・石見の武士の多数が尊氏方に馳せ参ずという	建武の新政
1348年	貞和 4	伊甘郷にある益田氏の氏寺福園寺、石見安国寺に定められる。	観応の騒乱
1374年	応安 7	石見・益田兼見（浄阿）、時衆寺院萬福寺を創建。	
1376年	永和 2	石見益田本郷の田数目録作成され、本百姓・間人名体制が成立する。	足利義満、花の御所に移る。
1383年	永徳 3	益田兼見、21ヶ条からなる置文を作成する。	
1399年	応永 6	足利義満、大内義弘に代え、京極高詮を石見国守護に補す、まもなく山名氏に交代、ただし遷摩郡だけは戦国期まで大内氏に属す（遷摩分郡知行）	応永の乱
1403年	応永 10	鎌倉末期の在地構造を示す石見久利郷・惣田目録が作成される。	
1408年	応永 15	朝鮮通信副使・李芸、嵐に遭い石見仁万津に漂着、大内氏これを救護して送還する。	
1425年	応永 32	朝鮮国・張乙夫ら 10 人、石見長浜に漂着。周布兼仲、対馬經由で送還。	
1426年	応永 33	朝鮮国王、李芸を長浜因幡守のもとに遣わして礼物を与う。	正長の土一揆

石見の歴史年表—3

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1430年	永享 2	出雲州見尾関処・松田備前守藤原朝臣公順、使者を遣わして朝鮮と通交。	
1435年	永享 7	石見益田氏の一族・部党104名、松寿丸（兼菟）を惣領主人と仰ぐことを誓う。	
1438年	永享 10	朝鮮の使者李芸、対馬に赴き、石見など日本からの使送人は以後貞盛の文引なければ接待せぬことを通告。 富山から石州長浜まで約13日の日程。	
1440年	永享 12	邇摩郡を除く、石見5郡の段銭注文作成される。	嘉吉の乱
1451年	宝徳 3	「石見州太守宗盛久」使者を遣わして朝鮮と通交。	
1467年	応仁 1	応仁の乱で、石見守護山名政清は西軍に味方す。「石見州益田守」「石見州三住右馬守」使者を遣わして朝鮮と通交。	応仁の乱
1468年	応仁 2	「石見州北江津守」使者を遣わして朝鮮と通交。	
1471年	文明 3	「石見州桜井津大夫」も朝鮮と通交。	
1474年	文明 6	対馬島首主貞国、塩津留氏に石見・若狭方面への船人の売買などを認める	
1481年	文明 13	対馬島郡の宗盛弘管下の者22人は、「賊徒」として金羅道の浦所から略奪を行い、密かに石見州に往き売買を以て「生業」としているという。	山城国一揆 加賀一向一揆
1490年	延徳 2	「東辺出雲州・石見州」などにはきわめて多数の「賊徒」がいるという。	
1517年	永正 14	大内氏の石見守護就任に際し、前守護の要請を受けた尼子氏、石見に進出するという。	
1524年	大永 4	博多商人・神谷寿貞、大森銀山を開発するという。	
1544年	天文 13	佐波連盛、神主八郎次郎女に大田北市庭かわらけ屋敷を安堵し、公役などは市庭並みに努めさす。	
1549年	天文 18	石見の鑄物氏公事役は、従来小笠原氏の被官・山根常安が知行してきたという。	
1552年	天文 21	大内氏、石見三隅湊の大賀氏に8端帆1艘、6端帆2艘の分国内通交を免除する。	
1559年	永祿 2	毛利元就、小笠原長雄を温泉城に攻めるといふ、小笠原氏下る。	
1561年	永祿 4	中国で作成された「日本図」などに、石見国内の港として波根、刺鹿、江津、浜田、長浜、温泉津などが記されている。	
1562年	永祿 5	石見音明城主・福屋兼隆父子、出雲経由で大和に逃れ、城陥落すといふ。 石見福光森村の検地帳作成される。 本城常光、毛利氏の軍門に降って石見を退去。 温泉津・波根・牛尾氏なども退去して、石見平定される。	
1563年	永祿 6	毛利氏、温泉津を直轄領として、温泉津奉行を設置する。	

石見の歴史年表—4

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1570年	元亀 1	石見温泉津湾頭に鶴丸城築城される。毛利輝元、温泉津奉行に対し、兵糧 1500 俵を銀山に遺わしたとして、町中に伝馬を申し付けるように命じる。	
1571年	元亀 2	毛利元就、杵築浦警護のため、温泉津・浜田・益田都野などの浦持衆に出動させるよう、吉川元春に命じる。	毛利元就没す。 信長、延暦寺を焼打ち。
1572年	元亀 3	温泉津の間屋・中島氏、毛利輝元から屋敷を安堵される。同日、温泉津正恩庵を無縁所だとして、毛利氏から城誘を除く諸役を免除される。	室町幕府滅亡。
1574年	天正 2	湯原春綱、輝元から出雲佐陀浦ほか9浦の帆役を免除された、温泉津を除く石見諸浦の諸役も免除。	信長、長島一向一揆を滅ぼす
1576年	天正 4	顕如上人、温泉津西楽寺に一紙半銭の奉加を求める	
1583年	天正 11	石見益田氏、妙義寺領の検地を行なう。	
1585年	天正 13	石見小笠原氏、三原丸山城に入城するという。	秀吉、関白となる
1590年	天正 18	中国で編纂の「日本風土記」に、石見国内の港として波根・刺鹿・長浜・浜田・温泉津・都野津あり。	秀吉、小田原攻め
1591年	天正 19	毛利氏、益田氏的那賀・美濃両郡の検地を行なう。石見小笠原氏、出雲神西への国換えを命じられる。	
1592年	天正 20	石見黒松小浜浦役帳作成される。	秀吉、朝鮮出兵
1593年	文禄 2	津和野藩主・吉見元頼の家臣下瀬七兵衛が、「朝鮮渡海日記」を完成さす。	
1597年	慶長 2	秀吉、柳沢元政に出雲・石見などの銀山公用の受取状を与える。	秀吉、朝鮮再出兵
1600年	慶長 5	彦坂小刑部元正、銀山接收代官として銀山へ下着。	関が原の戦い
1601年	慶長 6	坂崎出羽守直盛、津和野3万石に封じられて入城。大久保石見守長安、初代銀山奉行となる。津和野藩主坂崎出羽守、九州から楮苗5万本を買入れ吉賀地方に植える	
1602年	慶長 7	銀山奉行・大久保石見守、石見国を検地。	
1603年	慶長 8	大久保石見守、石見銀山で釜屋間歩を開き、「銀山大盛」の最盛期をつくり、開発功労者の安原伝兵衛を伴って伏見城で家康に謁見、	家康、征夷大將軍 江戸に幕府開く
1605年	慶長 10	大久保石見守、大森銀山・温泉津の地銭を永久免除	
1614年	慶長 19	銀山方役人、山師を率いて大阪に出陣、城堡を穿つことを命じられる。	大阪冬の陣
1617年	元和 3	亀井豊前守政矩、因幡国鹿野より津和野4万3000石に移封。	大阪平定 朝鮮通信使来日
1618年	元和 4	琉球船が那賀郡都野津浦に漂着。	
1619年	元和 5	古田大膳大夫重治、浜田5万412石に移封、城地を鶴山に決定し、山名を亀山と改めて築城。	
1635年	寛永 12	石見国に朝鮮漁民6人漂着。 津和野藩家中内紛、多胡勘解由は切腹、他は追放。	鎖国令

石見の歴史年表—5

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1636年	寛永 13	銀山奉行竹村藤兵衛死去により、銀山領4万石を京極忠高が預かる	島原の乱
1646年	正保 3	津和野藩主亀井茲政は芸州藩に仕えていた多胡主水真益を呼び返し、藩政に登用し領内に楮を植え付けさせ製紙業を奨励。	
1649年	慶安 2	松平周防守康映、5万1291石で浜田に封ぜられる。	慶安の御触書
1659年	万治 2	石見国浜田領内に朝鮮人9人が漂着。	
1665年	寛文 5	津和野藩、紙専売仕法を施行。	
1675年	延宝 3	石見国の飢饉、前年よりさらにその度を加える。	
1676年	延宝 4	津和野地方大地震、津和野城石垣崩壊、倒屋133軒 死者7人、負傷者35人。	
1686年	貞享 3	浜田地方地震	
1696年	元禄 9	津和野藩、紙をもって収納米に代える（紙年貢）	
1697年	元禄 10	浜田藩田方損毛10年平均を以って春定用捨とする	
1702年	元禄 15	周布川洪水、津和野藩大風雨洪水。	
1705年	宝永 2	津和野大火、930戸、神社5、寺院14、焼失。	
1706年	宝永 3	津和野大風、1万5000石損毛、倒屋438軒、漁船覆没12艘伊	新井白石の建議 で通信使待遇 享保の改革
1707年	宝永 4	石見国波根東村に唐人52名漂着	
1716年	享保 1	浜田藩、春定用捨停止につき領内百姓代表嘆願のため出頭、銀山領内百姓が陣屋で年貢減免を嘆願。	
1717年	享保 2	石見国和江村に朝鮮人8人漂着。 石見国黒松浦に朝鮮人6人漂着。 石見国飯ノ浦に唐人14人漂着。	
1718年	享保 3	浜田領東部村々百姓願に出頭、この年、津和野領内11カ村で百姓一揆起こる。藩は貢租の一部延納を許して落着。	
1721年	享保 6	大森銀山領も長雨で凶作。	
1722年	享保 7	浜田藩周布郷農民検地を妨害。	
1724年	享保 9	浜田藩江戸藩邸で銀山事件。この年、津和野藩、買紙を請紙制とする。	
1725年	享保 10	浜田大火事、1400戸以上焼失。	
1726年	享保 11	長門国須佐浦に唐船漂着、津和野藩は飯ノ浦警固の人数を出す。	
1731年	享保 16	この年、井戸平左衛門、大森代官となる。	
1732年	享保 17	蝗害による大凶作飢饉。津和野藩1万1141人、損毛3万780石、浜田藩、幕府回米2700万石浜田浦に着船、飢民援助に充てる。 銀山代官井戸平左衛門、夫食種貸牛馬飼料の貸渡をなし、幕府の指令を待たれず困米を放出して救助、年貢破免。 また、甘藷栽培をすすめる。	

石見の歴史年表—6

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1734年	享保 19	国東治兵衛、美濃郡速田で蘭草を植え畳表を製造普及する。	
1745年	延享 2	津和野藩洪水損、田畑虫付損1万5780余石	
1755年	宝暦 5	津和野藩大火、全焼1459戸。津和野藩領暴風雨潰家700余戸、損毛2万3550石、	
1759年	宝暦 9	浜田藩主松平周防守康福、下総国古河に移封。本多中務大輔忠愍、古河より浜田に移封。島根県加賀浦に朝鮮船1艘漂着。	宝暦事件
1761年	宝暦 11	津和野藩、高津港に蝸座役所を移し、大坂登紙建4百石積大神丸を買入れ北国通いに500石積幸徳丸、300石積明神丸などを廻船させる。	
1762年	宝暦 12	浜田藩松平康福、侍従に任じ老中となる。	
1763年	宝暦 13	津和野大火、1459戸焼失。	
1764年	明和 1	蓮如9世の孫・仰誓、邑智郡市木村浄泉寺住職となり、専修念仏を弘め他宗を攻撃する。このため各宗9ヶ寺連署して藩に訴願し、宗教論争起こる。	
1767年	明和 4	浜田藩銀札を発行。	
1768年	明和 5	浜田藩領内宗論に対して幕府採決。	
1769年	明和 6	浜田藩主本多中務大輔忠肅、三河国岡崎に移封。代わって松平周防守康福が再び浜田藩主となる。那賀郡津摩村に異国人32人漂着。	田沼意次・老中
1773年	安永 2	津和野大火、1424戸焼失。	
1774年	安永 3	邑智郡日貫村香川景隆、「石見名所集」を著わす。	
1778年	安永 7	浜田城下火災、221戸焼失。	
1783年	天明 3	安濃郡大田で一揆打ちこわし。邇摩郡温泉津浦に朝鮮人5人漂着。宅野村に異国人7人漂着。銀山領・浜田・津和野領も大凶作。津和野藩が、藩校「養老館」を開設。	アメリカ独立戦争 天明の大飢饉
1784年	天明 4	浜田領飢饉、百姓窮迫し4500人が城下に来て施粥を受ける。200人餓死。	
1787年	天明 7	浜田藩主松平康定、「弥重太多美」40巻を編集。	松平定信・老中
1791年	寛政 3	異国船1艘浜田近海に現われる。浜田藩主松平康定、小篠敏を儒臣とし、藩校・長善館を開設。	フランス革命 寛政異学の禁
1798年	寛政 10	浜田・国東治兵衛「紙遊重宝記」を著わす。	
1806年	文化 3	伊能忠敬、石見から出雲へ海岸測量。那賀郡長沢村で初めて釉薬を使って赤瓦を製造する。	
1819年	文政 2	那賀郡七條村岡本甚左衛門、七條原開墾を願い出て浜田藩許可する。	
1820年	文政 3	中川公允「石見外記」著わす。	幕府外国船打払令
1822年	文政 5	邇摩郡五十猛村大浦に朝鮮人7人漂着	
1826年	文政 9	浜田藩主松平周防守康任、老中となる。	

石見の歴史年表—7

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1830年	天保 1	那賀郡松原港に朝鮮人8人漂着。	
1831年	天保 2	那賀郡唐鐘浦に朝鮮人13人漂着	
1833年	天保 4	凶作で安濃郡波根東村で百姓一揆。	天保の大飢饉
1836年	天保 7	浜田・津和野両藩神職連盟して神葬祭復興に尽力。 津和野洪水、流失家屋430戸、溺死241人、飢饉。 松平右近将監斎厚、上野国館林より浜田移封。	
1837年	天保 8	那賀郡熱田浦に朝鮮人11人漂着	大塩平八郎の乱
1838年	天保 9	安濃郡波根東村に朝鮮人5人漂着	天保の改革
1844年	天保 15	異国船廻摩郡大浦港に来航、夕刻錨をあげて去る。 那賀郡浅利浦に異国人4人が漂着	
1847年	弘化 4	津和野藩は江戸深川の下屋敷を売却し、1万両を教育資金とする。	
1849年	嘉永 2	津和野藩主亀井茲監、藩校養老館を拡張、阿熊臣を国学教師とし、医学に蘭医科を置く。 那賀郡熱田浦に異国人10人が漂着。	
1850年	嘉永 3	高津川洪水、江川洪水。安濃郡大田在町小前、家別貼紙をなし状勢不穩。	
1851年	嘉永 4	大国隆正、津和野藩に復帰し養老館本学教師となる	
1853年	嘉永 6	津和野大火、家中10、物見31、町方568、土蔵146 寺社38、地方86軒焼失。	米騒4隻浦賀入港
1856年	安政 3	津和野藩校養老館教授吉木蘭齋、牛痘接種を始める	
1857年	安政 4	福羽美静、津和野藩校養老館国学教師となる。 西局、幕府の番所取調所に入る。	
1858年	安政 5	浜田地方大地震、翌日まで50回の余震。	日米修好通商約
1863年	文久 3	長州藩攘夷実行するや津和野藩は硝石数百斤を贈る。	下関外国船砲撃事件、薩英戦争
1866年	慶応 2	松江藩兵、長州再征に出発。津和野藩は名分なしとして出陣辞退。国境警備のみで出兵せず。 益田の戦い幕府軍大敗。浜田城自焼、長州軍浜田に入る。大森代官逃走、浜田藩領、銀山領ともに長州支配となる。	坂本竜馬、薩長連合をとりもつ。
1868年	慶応 4	旧浜田領西原井組のうち17村が黒川で一揆を起す	五箇条の御誓文 神仏分離令
1869年	明治 2	津和野藩主亀井茲監、参与神祇事務局判事任命。 佐藤寛作を浜田県令に任命。亀井茲監を津和野知藩事任命。旧幕府領・旧浜田領に大森県を置く。	版籍奉還 平民の姓を許可
1870年	明治 3	大森県庁を大森から浜田に移し、浜田県と改称。 旧長州諸隊出身・前田誠一、浜田で町民を率いて打ちこわしを行なう。	
1871年	明治 4	亀井茲監、廃藩置県を上表、知事辞任。津和野藩を廃し浜田県に併合。	廃藩置県、日清修好条規
1872年	明治 5	浜田県、病院を仮設し地震の罹災者を救助。浜田県、郵便取扱所を開設。	徴兵告諭

石見の歴史年表—8

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1873年	明治 6	浜田県、各郡の下に部（組合村）を置く。 浜田で朝日山小学校を開校。 浜田県管内を5大区に分ける。	地租改正条令
1874年	明治 7	浜田県、人民合同議事（民会）を開く。	民撰議院設立
1875年	明治 8	浜田県令佐藤信寛、地方官會議に人民代表を加えることを建白。 浜田県、県内地誌編纂のため資料提出手続を布達。 浜田県會議場仮規則。	第1回地方官會議
1876年	明治 9	浜田県を廃し島根県に合併。 三菱会社汽船、境・浜田に毎月上下1回寄航することになる。	日朝修好条規。 廃刀令。
1879年	明治 12	第53国立銀行が津和野に開業	教育令制定
1880年	明治 13	県立浜田中学校新設	国会既成同盟
1882年	明治 15	松江で「山陰新聞」創刊。 浜田で石見立憲改進黨結成。 益田で石見立憲自由党結成。 波根東村で石陽自由党結成。	立憲改進黨結成 日本銀行開業
1883年	明治 16	浜田師範学校、中学校に併設開校。 道路改修に関する県論達（三大道路建設着手）	高田事件
1884年	明治 17	浜田中学校を県第二中学校に改称。 浜田師範学校を松江師範学校に合併し、島根県師範学校と改称。 島根県医学校開校。	加波山事件 秩父事件
1887年	明治 20	大森銀山、合名会社藤田組により操業再開。	保安条例
1889年	明治 22	石見各郡有力者 220 名連署して石見国を広島県に管轄替えを元老院に建白。 県下各地で養蚕伝習所 45ヶ所設置。	大日本帝國憲法 発布
1894年	明治 27	邑智郡川戸村小作人、小作料減免の示威。 大阪商船、赤間関～浜田線運航。 石見半紙、軍用防寒紙布需要急増。	日清戦争
1895年	明治 28	浜田港、外国貿易港になる。	下関条約調印
1898年	明治 31	島根県に府県制施行。 歩兵第21聯隊、浜田の兵営に入る。	貨幣制公布
1899年	明治 32	浜田港、開港場に指定。	
1900年	明治 33	大阪商船、大阪～境線、隔日1回両地発航、浜田・温泉津・鷺に寄航。 県立女学校を浜田町に新設開校。	北清事変
1905年	明治 38	露国軍の艦隊ルティツク号、那賀郡津濃村海岸で沈没、乗組員は投降。	ポーツマス条約調印
1912年	明治 45	石見仏教弘仁会を浜田に設立。	中華民国成立
1913年	大正 2	内国通運会社、浜田～出雲今市間に乗合自動車開業	第一次世界大戦
1915年	大正 4	石見自動車運轉社、津和野～浜田間乗合自動車開業	
1916年	大正 5	浜田築港工事竣工し朝鮮貿易増の期待高まる。	
1918年	大正 7	第1回県下市町村長聯合会開催。 浜田で米騒動。 益田でも米騒動。	シベリア出兵

石見の歴史年表—9

西暦	和 暦	石見圏域：事項	国内外事項
1921年	大正 10	津和野郷土館設立。 県立大田中学校・県立益田農林学校開校。	
1925年	大正 14	邑智郡日貴村、那賀郡今市村で日農組合員が村議に立候補当選。	ラジオ放送開始 普通選挙法公布 満州事変
1934年	昭和 9	県立健康相談所を松江市と浜田町に開設	
1935年	昭和 10	益田町の出雲製織石見人絹工場操業開始 大阪～大社間急行列車運転開始	
1938年	昭和 13	松江・今市・浜田に国営職業紹介所開設。	国家総動員法
1940年	昭和 15	浜田市制施行	大政翼賛会発足
1942年	昭和 17	衣料配給切符制実施。 寺院の梵鐘供出始まる。	ミッドウェイ海戦
1944年	昭和 19	各女学校に女子挺身隊結成。 県下大風水害で被害。	サイパン陥落
1945年	昭和 20	米軍機、玉湯で海軍兵舎と待避中列車を銃爆撃。 終戦。 松江市・浜田市の衛戍病院がそれぞれ国立病院として再開	ポツダム宣言受諾 戦争終結
1946年	昭和 21	県立温泉津高等女学校開校。 戦後初めてのメーデー	日本国憲法公布
1947年	昭和 22	県立農林専門学校が益田町に開校。	第2次農地改革
1948年	昭和 23	江津町に県立農業補導所、浜田市に県立水産業職業補導所開設。	中華人民共和国 成立
1950年	昭和 25	浜田高校生徒、警察予備隊宿舎問題に反対してハガーストライクに入る。	朝鮮戦争起こる
1952年	昭和 27	益田市制施行。	
1953年	昭和 28	県立浜田ろう学校開校	テレビ本放送開始
1954年	昭和 29	大田市制施行。 江津市制施行。 ラジオ山陰開業。	
1956年	昭和 31	県立邑智高校開校。 鳥根県庁舎全焼。	
1958年	昭和 33	県立江津高校開校。 石見地方大水害。	1万円札発行
1962年	昭和 37	浜田—広島県に特急バス運行開始。 津和野町で森鷗外生誕百年記念式典開催	
1963年	昭和 38	豪雪で県下全域に大被害。	
1964年	昭和 39	県下全域、集中豪雨で災害救助法適用。	テレビの東京大会
1968年	昭和 43	江津市に私立江の川女子短期大学開学。	
1972年	昭和 47	邑智郡瑞穂村に青少年旅行村完成。	沖縄返還
1974年	昭和 49	浜田市に浜田卸団地完工。	
1975年	昭和 50	三江線の浜原～口羽間が開通し三江線全通。	
1976年	昭和 51	大田市に石見銀山資料館開館。	ロッキード事件発覚
1978年	昭和 53	中国電力、三隅町に火力発電所建設を申し入れ	第2次石油危機
1979年	昭和 54	大田市に県立農業大学開校。 中国自然遊歩道津和野コース完成。 益田市に石西文化会館開館	
1982年	昭和 57	益田市の万葉公園整備事業として資料館完成。 中国自然遊歩道浜田海岸コース完成。 中国電力三隅火力発電所計画を国が認可。	東北新幹線開通
1983年	昭和 58	県西部に集中豪雨、死者107人、被害総額3446億円	
1988年	昭和 63	益田駅前大火、8棟12世帯焼け出される。	瀬戸大橋開通

石見3回廊と地域特色の呼称提言

第1節：山村の自立とは何か

1970年代以降、山村にも工場やリゾートが誘致されてきた。しかし各地を歩いてみると、その工場やリゾートの誘致は期待したほどの効果を上げていないばかりか、時には山村の基盤をますます突き崩しているように見える。工場や大規模リゾートの誘致は、山村に暮らす人々にとって、雇用先が生まれるということ以上の意味はなかった。ところが、このことの中に矛盾もまた含まれている。

第一に進出してくる企業にとって山村の魅力とは、安い労働力が確保できるということ以外にはなく、逆に山村の人々からみれば、低賃金で単純な雇用先ができただけのことである。同時に現代型の雇用の増加は、雇用→賃金→消費生活という「都市市民型の労働と生活スタイル」を増加させ、このような生活をするなら山村に暮らす意味はますます低下するとともに、かつての山村らしさの基盤にあった物や人、文化、自然との複雑で多様な関わりを、もはや必要としない労働と生活のスタイルが作られていくことを意味しているのである。

このように考えていくなら活力ある山村を回復するには、山村で暮らし、山村で仕事をする意味や価値が存在するような形の山村が作られなければならないのである。そして、そのような方向での山村再建の模索を、今日の山村は開始しているようにも思える。

この動きを促したのは、次のような要因であった。

第一に工場やリゾートの誘致が、若者の村離れを止める要素にはならないことが分かってきた。村に帰ってくる青年にとっては、仕事の質や暮らしの質が大きな問題になるのである。

第二には都市の暮らしの、ある意味での「貧しさ」が山村の人々にも伝わってきたことがある。そしてこのことと歩調を合わせるように…、

第三に自然と密接に結びついた暮らしや、山村的な暮らしを「豊かな」暮らしと考える人々が増え、そのことが村人の自信を回復させ始めた。実際今日の山村では、村の暮らしを卑下するような言葉は、村人からほとんど聞かれない。

第四には、さらに都市から山村へと移住してくる青年も増え、この青年たちの求めている山村とは、都市とは文化のあり方が違った山村であることが理解されてきたのである。

都市に近づこう、都市を真似ようという伝説は、山村と都市の現実の動きを前に、再検討をせざるを得なくなったのである。山村らしい仕事のあり方、山村らしい生活のあり方、そして山村らしい都市との交流の方法を模索する動きがこうして始まって来る。

それは必然的に、次のようなことを視野に入れさせる。

第一は山村の自然とは何か、山村的な自然と人間の関係とは何か、ここから伝統的な林業地を含めて雑木の森、すなわち広葉樹の森や、針広混生の森の価値を再評価し、雑木の森と山仕事の関係をもう一度考えようとする動きや、浄化槽設置などを含めて、昔のきれいな川を回復させようとする動きが出てくる。

第二に、山村における個人と共同性の関係を、もう一度つくり上げようとする動き、この動きは村の共同労働を復活させようとする動きや、村祭りの再現、村の伝統芸能の再興などを促進している。第三には個人と共同性ととともに、山村での働き方を考えながら地域資源の掘り起こし、あるいは過去には使われていたが今日では眠っていた地域資源を見つけ直し、そこから産業と仕事のあり方を模索する動きも広がっている。この動きは、かつての多職型の山村を新しい形でつくり出そうとする動

きにもみえる。

第四は都市の市民と山村住民との多様な交流をつくり出そうとする動きが加わる。施設型リゾートではなく、山村そのものを訪ねてくれる市民の獲得、それも一度だけではなく、幾度となく交流を続けてくれる市民の獲得を目指して山村自身もいろいろな交流制度をつくり出している。それも人と人の交流の中に村の生産物の直接販売を組み込んだり、山村留学制度、さらに最近では農業や林業への都市市民の参加も含めて、極めて多様な交流の形が少しずつではあるが確実に生まれ始めているのである。

それは山村が山村らしい複雑で多様な交流の形を新しく創造し直そうとする模索のように見える。生産物を通しての多様な交流、自然を軸にした多様な交流、人と人の多様な交流、村人同士のさまざまな交流、山村の文化や芸能を村人が共同で、時に都市の人々を含めて作り上げていこうとするときに生まれる交流、すでに述べたように、山村とは複雑で多様な交流のうえに展開し維持されてきた社会であり、この交流の衰退こそ山村の衰退を発生させたのである。

第2節：石見の地域特性を活かす3道

島根県市町村組合事務組合が発行された『しまね・よりみちマップ』を見ると、石見地方は「大田エリア」「浜田エリア」「益田エリア」の3部に分かれ、どれも南北方向に分断されたもので…、「大田エリア」では、羽須美から大田へつながる国道375号線
「浜田エリア」では、大佐山から浜田へつながる国道186号線
「益田エリア」では、津和野から益田へつながる国道9号線…がエリアの中心線となっているが、わずかに国道261号線だけが瑞穂から川本、川本から江の川沿いに江津へと、2枚のエリア地図をまたいで描かれている。

確かに山陰と山陽を結ぶ人の動きからみれば、この「エリア図」の意味が分からないではないが、3つのエリア、3路線に散らばる生活圈では「山頂の集落」「山あいの集落」「海辺の街」の3生活圈が、どのエリア図にも共通した図となっており、地域資源の紹介図というより一般的な道路図と言った感じが強い。

石見地方で地図と言えば、「大田」―「仁摩」―「温泉津」―「江津」―「浜田」―「三隅」―「益田」と日本海沿岸部が頭に浮かぶように「山頂の集落」「山あいの集落」でも、そこに散らばる集落群を東西につなぐとどうなるだろうか。

「山頂・山岳の集落」をイメージすると…、

●羽須美から大和～粕淵ゾーン

江の川の清流を活用した「カヌーの里」をはじめ、羽須美の「ロッジ・ヌーク」、大和の「遊・湯ランド潮村」など、清流を楽しみ、馴染んで憩いを覚える里の村と言える。

●瑞穂～矢上ゾーン

歴史的に由緒のある「志都の岩屋」から「八幡神社御旅所の松」など、旧陰陽連絡道の関所としての歴史性、「香木の森」や温泉「霧の湯」などの新たな地域施設。文字どおり山あいでの交わりを体験する集落である。

●金城～弥栄ゾーン

なんと言っても弥栄の「ふるさと体験村」、四季を通じて本格的な山里体験ができる。加えて若生の溪流、ブナ林散歩道があり、ここへの入り口には金城波佐の資料館があるなど、四季を通じての諸

体験ができる山里。

●匹見ゾーン

前・裏・表の3方向からの匹見峡は、中国地方の山岳景観を代表するところと考えてよい。そこに温泉・レストパーク・木工房などがあり、溪谷の静けさの中で、ゆったりとした「癒し」を味わえる山里である。

●柿木～吉賀ゾーン

中国自動車道六日市インターに直結した吉賀、国道9号線から離れた柿木を一体にした山里。陰陽連絡の古い歴史性を持ち、温泉や山岳地の民俗交流施設の豊富な山里での「なごみ」を覚える集落といえる。

この5山村を東西につなぎ込むとそれぞれの特色が明らかになって、単なる山里と軽視することは出来なくなる。山を愛し、山の自然からもらう清風を生きゆく活力と考える人にとっては、またとない地域であることを強調できるのではないだろうか。

石見地方は地形的に東西に長い。これを南北に狭く区切って味わいのない集落とするよりも、東西につないで、それぞれの持つゾーン特色を活かした形で広く呼び、語りかけ、石見の特性を広報・宣伝したい。上に挙げた山岳5集落をつなぐと、四季の道と呼びたくなる。同じ手法で、山合に広がる7集落をつないで温の道と呼び、日本海沿岸を東西に続く6市街を海の道と仮称して、それぞれの特色をあげてみた。

これはあくまでも仮称であり、関係者の討議をへて決定をして頂きたい。

第3節：地域の特性・特色を打ち出そう

別添「中国地方における滞在型体験交流の振興策」でも書き出したが、地域交流事業の推進にあたっては、地域の特性や特色を各地域住民の検討・協議から徹底的な「地域の再評価」が必要となる。交流に活用しうる地域特有の資源、特性として、自然や地理的要因、歴史・風土的要因、伝統芸能や祭りなどが挙げられるが、それに加えて地域の抱える課題や交流を実施する際の阻害要因（交通条件浸け皿の整備不足など）も見直す必要がある。

そこに住む人々にとっては当たり前のものであっても、他地域の人々にとっては魅力あるものとなる場合も少なくない。従って、地域の魅力とは意識して発掘すべきものであり、それが同時に地域課題の発掘にもつながる。

一つの事例として、先に掲げた「羽須美・大和～粕淵ゾーン」から「柿木～吉賀ゾーン」までの5集落の特性・特色を書き出してみると次のようになる。

●羽須美から大和～粕淵ゾーン 清流いこいの里

●瑞穂～矢上ゾーン 高原まじわりの郷

●金城～弥栄ゾーン 四季たいけんの郷

●匹見ゾーン 溪谷いやしの郷

●柿木～吉賀ゾーン 山里なごみの郷

この地域呼称には「清流」「高原」「溪谷」「山里」はそれぞれの地域特性を指し、「いこい」「まじわり」「たいけん」「いやし」「なごみ」は地域の特色を読もうとしたもので、これを平仮名書きとしたのは、四季の道に共通する書き方とみて欲しい。最後に、それぞれの地域を「郷」と呼ぶのも平仮名書き

と同じく「四季の道」に共通する表現である。

続いて「温の道」と呼ぼうとする「山あいの集落」7地域について、同様の特性・特色と、地域の呼称を書き出してみたい。

●三瓶ゾーン

三瓶山全体に西の原や埋没林公園、浮布池などの自然があり、それにキャンプ場やスキー場、パラグライダーまで置かれ、文字どおり山の自然を体感できる地域として、うたい挙げたい思いを込めた。

山の幸・体感の里

●石見銀山ゾーン

世界遺産として登録された地域で、その史跡や建造物をそのまま広く紹介する意味を込めた呼称とした。

世界遺産・銀山の里

●川本～桜江ゾーン

粕淵で流れを西向きへ大きく変えた「江の川」は、川幅も広く水量も豊富で大河の趣を存分に味わう。その川沿いには川のまちならでの民俗文化・史跡も豊富で、生き生きした川文化を感じさせる。

河川美一味わいの里

●旭～金城ゾーン

美人湯と伝えられる美又温泉、浜田自動車道に直結した旭温泉、新時代の金城きんたの里に風の国など、温泉の里とも言える特色があり、ゆるやかな石見台地に現代の農村風景が広がる地域である。

湯恵み・満喫の里

●美都ゾーン

美都温泉を中心に道の駅・サイエント美都、民宿や宿など、ひっそりとした石見の山村にぼつりと出来た山村集落である。双川峠にはじまり、遠くなるが蛸の名所に自然の森、ひだまりパークなど自然も豊富な地域である。

山情緒・育みの里

●日原ゾーン

国道9号線と中国自動車道：六日市ICからの187号線がクロスする地点にあり、日原天文台から津和野敵視民俗資料館、道の駅シルクウェイにちはらや各種宿泊施設など、山陰・山陽を結ぶ街並みの地域となっている。

陰陽道・繋ぎの里

●津和野ゾーン

伝文化館、郷土館、今昔館、美術館など津和野が残す歴史・民俗文化をしっかりと残し、さらに太鼓谷稲荷神社をはじめ、永明寺、弥栄神社、森鵬外旧宅など、文字どおり歴史を残す小京都の街である。

小京都・散策の里

これらの呼称には、「山の幸」「世界遺産」「河川美」「湯恵み」などが地域の特性を、「体感」「味わい」「満喫」などが地域の特色をうたおうとしたもので、温の道にふさわしい、歴難や民徹化を味あわせ

てくれる地域と言っても過言ではない。四季の道で地域の呼び方を郷」としたのに対し、温ノ道では「里」で表現したのも四季の道が山岳地帯であるのに対し、温の道は山間の高原地帯にあたり、起伏のゆるやかな地形の中で広がりもある意味をこめている。

最後は「海の道」、国道9号線に沿って益田から大田へ繋がる海浜の街に呼称をつけてみたい。

●大田ゾーン

大田市は石見4市のうち市街地が内陸部に広がり、日本海沿岸部には小集落が散在するが街はなく、波根、久手、笠ヶ鼻、鳥井などの海水浴場が続き、それに硅化木やハマナス自生地などもあり、日本海の自然が残されている。

日本海・体感の街

●仁摩～温泉津ゾーン

港の温泉地：温泉津と鞆ヶ浦は、大森銀山の積出し港として古い歴史を持ち、今日でもその史跡・遺跡が数多く残される街である。銀山の世界遺産登録を切り口にして、このゾーン一帯の歴史性を強調し、知らしめたい。

銀積出し・歴史の港街

●江津ゾーン

石央の東半分は、江の川の清流が描きだす自然美の中にある。中国太郎とも呼ばれる江の川の河口の街：江津、まさに江の川の親の里と言えよう。江津市の新産業おこし、街づくりには川の親里としての意欲を感じる。

江の川・親里の街

●浜田ゾーン

石見の中央部：浜田は、県立大学をはじめ世界子ども美術館、しまね海洋館アクアス、道の駅ゆうひパークなど、石見地域の都市型施設の建設が盛んだ。今後の課題は、環日本海交易時代に備えた輸出入港としての機能整備である。

日本海・交易の港街

●三隅ゾーン

かつて山岳修験の聖地とされた大麻山、そのすそ野に広がる三隅地域には、折居、田の浦海岸に三隅B&G海岸センターなど、石見海岸特有の自然景観が残されている。ひっそりと落ちついた三隅、そこには石見の自然がある。

石見海岸・体験の街

●益田ゾーン

柿木人麿、雪舟など、石見の歴史上の古人を祀り、これらにまつわる史跡も数多く、市内の随所に石見の歴史を語りおこす旧跡がある。長州・山口から津和野、益田へと広がり、石見の歴史創生の原点とも言える地域である。

石州史・創出の街

これらの地域をつなぎ結んだのが「海の道」である。先にあげた「四季の道」「温の道」にくらべ、各地域には時代的な動態がそれぞれに影響している。「銀積出し・歴史の港街」では銀山閉鎖にと

もなった衰退、「江の川・親里の街」「日本海・交易の港街」では現代的な都市型整備など、ほかの二つの道とは大きく違って、時代の流れの変化を大きく受けていると言えるだろう。

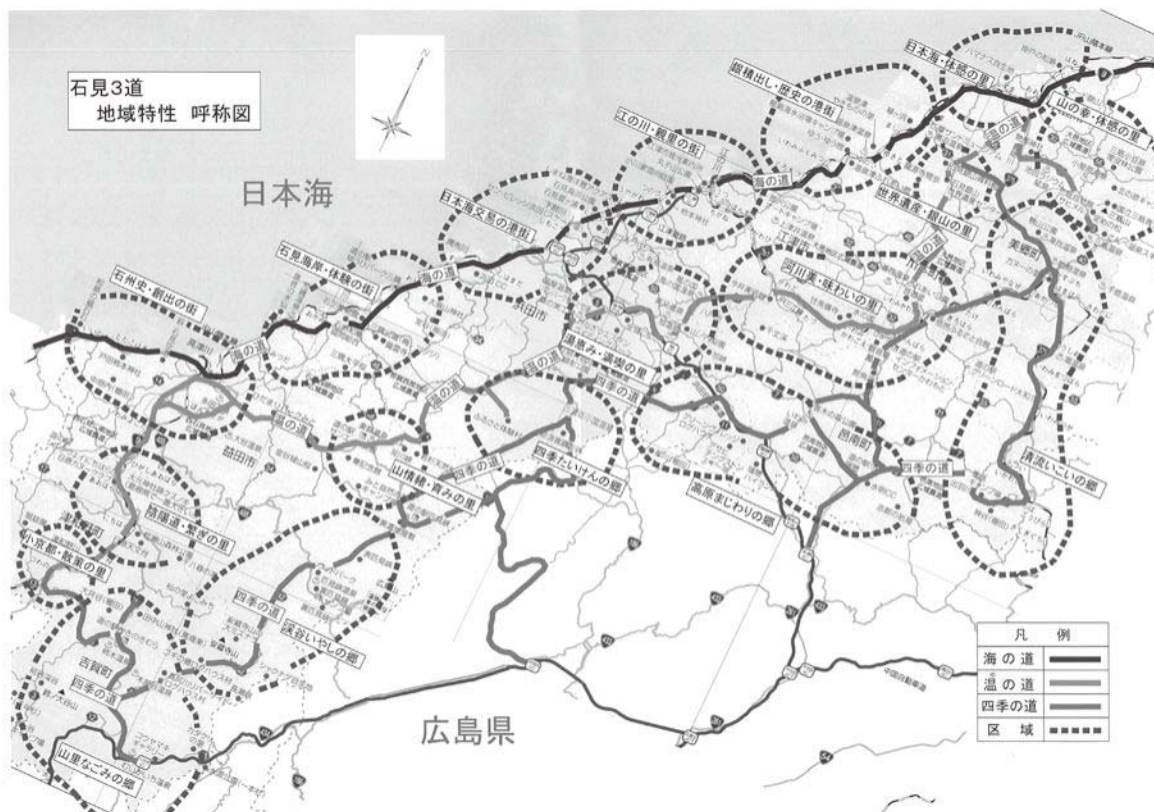
これで、「四季の道」「温の道」「海の道」の3道と、その道によってつながる合計19地域の呼称も書き出してみた。しかし、この呼称はあくまで資料による取り出しで、現地に生活する住民の皆さんのものではない。改めてお願いをしたい。

この事例を参考に、徹底した協議から本当の地域呼称を作り出して欲しい。

< 追 記 >

「なつかしの石見の国」ポータルサイトについて

本書籍の内容や「石見の国」の観光情報を掲載したサイトが開設されている。「石見3回廊」のあらましや、石見を「遊ぶ」「観る」「楽しむ」「味わう」「石見の特産品」などを検索することができる。「なつかしの石見の国」URL <http://www.iwaminokuni.com>



おわりに

本書は平成21年(2009年)からシリーズでまとめられた「石見の国読本」をベースに再構成したものです。ベースとなった4冊の編集に携わってくれたのが、昭和50年(1975年)にオープンした「浜田ショッピングプラザ一番街」の企画、コンサルティング業務を担当するなど浜田の諸事業に参画していた故中島淑夫先生でした。

中島先生は広島県呉市出身。東京大学卒業後、広島市役所に入り市長室広報課長などを務めて退職、民間企業などを経てコンサルティングを生業とする中島経営研究所を設立し、浜田のまちづくり事業との縁ができました。その後、得意とする資料収集と分析力を生かして島根経済同友会石見支部の業務にも携わり、平成の大合併に伴う『石見11市町村の地域活性化策(ソフトプラン、アクアプラン)』や『石見3回廊と地域特色の呼称提言』などの提言集もまとめてくれました。

しかし、残念なことに中島先生は昨年5月、鬼籍に入られ、本成果を目にすることができなくなりました。改めて本書を先生に捧げたいと思います。

本書は『図説 島根県の歴史』など優れた郷土の歴史書を参考にまとめたものですが、歴史研究者の視点ではなく、石見の歴史と伝統をやさしく理解していただく石見人の視点で制作したものです。著わされた史実を曲げることなく、可能な限り表現したつもりですが、不十分な部分は要約、編集の稚拙さとしてご容赦いただければ幸いです。(宮田)

<参考にさせていただいた書籍など>

- ・『 図説 島根県の歴史 』
（内藤正中編・河出書房新社、1997年）
- ・『 益田市誌（上巻） 』
（益田市誌編纂委員会・益田市、1975年）
- ・『 津和野藩 』
（沖本常吉著・津和野町教育委員会、1994年）
- ・『 郷土の歴史資料集—大田市・仁摩町・温泉津町 』
（大田・邇摩学校教育研究会・中学校社会科部会編、1994年）
- ・『 石見観光事典 』
（石見観光事典刊行会、2008年）

「石見の国読本ハンディー版」

発行日 平成28年4月30日

編集者 中島 淑夫

発行者 宮田 弘

<お問い合わせ先>

島根経済同友会石見支部

〒697-0027 浜田市殿町124-2（浜田商工会議所内）

TEL0855-22-3025